
魔法少女リリカルなのは -after image-

はぐれ雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは - after image -

【Nコード】

N35720

【作者名】

はぐれ雲

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはx Fate/stay night

大きな火事に遭った、全てが燃え落ちるこの世の終わり。

士郎は其処で死んで、エミヤシロウが其時生まれた。

残ったのは決して贖えぬ咎。

歩むべき道は未だ解らず、目指すべき理想も曖昧なまま。

然れど、想いは胸に刻み込んで。闘争へと身を投じて往く。

何時か“本物の正義の味方”になれる時まで

Prologue (前書き)

本作は“魔法少女リリカルなのは”シリーズと、Fate/stay nightのクロスです。

内容的にはとら八、及び型月を多分に含んでおります。

子供士郎転移モノで、正義の味方として成長していく過程を描ければと思っております。

読み書き前にお願ひします

注)

読んでいて不快に感じましたら即刻ブラウザ戻るを推奨いたします。

・本編 (EP1から) ではFateからの出演は士郎以外ほぼ皆無です。

・士郎は強め設定、若干弓兵化。ハーレム気味になるかもしれません。

・原作ブレイク。大筋は変わりませんが、独自設定・解釈を多分に含みます。

・ルビ打ち多目なのでPCの方がより快適にご覧いただけます。

感想板では・・・

・誹謗中傷、水掛け論はご遠慮ください。

・独自設定への文句は勘弁してください (どうしようもないので

場合によっては容赦無く削除しますので、そのつもりでお願いします。

当初、9歳の予定でしたが変更になりました。年齢不詳、恐らく1歳でいきます。

元より学校に通わせる予定はありませんので、期待していた方はご容赦願います。

取り合えずSTSSが終わるまで、不定期に連載していく予定です。処女作であるため拙い文章ではありますが、どうぞ生温かく見守ってやって下さい。

ブログから独自設定全開で申し訳ありません。

Prologue

Awakening is always going through Gehenna.

Once he died there, and was born at the same time.

Heart is hollow; without definitive ideal.

However, he continues going forward.

Only have inscribed with the original sin.

Someday... till getting the answer" in his hand.

Side: ????

「・・・ふむ、どうしたものか。」

そう独り呟いた彼は酷く困惑していた。

自我など疾うに消されたものと記録していたからだ。

“守護者”、目の前にある全てのモノを抹消^{キョウ}することを目的とし、それを可能とする力だけが世界から与えられる。

（ 心当たりが無い訳ではないが・・・ ）

辺り一面の炎、漂う死臭。

空に浮かぶ黒い太陽。

苦悶の声が聞こえる。

其処は正に、地獄だった。

（・・・やはり聖杯戦争か。よくよく縁のある事だな。）

この結末は記録^{しゅつてい}している。

衛宮切嗣が残った令呪で以ってセイバーに聖杯の破壊を命じる。だがそれは、自分がこの場に遣わされたという事実^{じじつ}に矛盾する。

（俺が此処にいるという事は、切嗣は負けたのか？）

何にせよ、世界がマスターによる要因の排除は不可能と断じたのだ。此の先に待つの^は人類の破滅。世界に従ってやる理由など無いが、門は閉じねばなるまい。

そうして彼は黒い太陽 門を正面に見据えて呟いた。

トレース・オン
投影開始

と。

Side： 切嗣

炎の中を彷徨い歩いている。

痛みはないが ココロがイタむ

熱に魔されているようだ 目に付くのはシタイ、したい、死体

何故こうなったのかは分からないが 其れは殺したようなものだ

あの時、僕は躊躇った ソレでもボクがカノジョをコワシタ

ほんの数分前まで僕は戦争をしていた。

7人の魔術師と7体の英霊マスターによる殺し合い サーヴァント 聖杯戦争を。

結果だけ見れば、確かに僕は勝利した。

銃口は揺ぎ無くあの男の心臓を捉え、セイバーは一片の油断もなく
アーチャーを討ち取った。

しかし

第三者がこの場を見ていたとするならば、一体誰が僕を勝者と思えるのか。

自分でも分かる。僕は今、絶望に満ちた敗者の顔をしている。

彼女を失う覚悟は出来ていた。

聖杯に掛ける願いがあったから。僕達の悲願が。彼女で最後なのだ。心に蓋をした。

けれど

現実には、世界は残酷なものだ。

聖杯は僕達が求めた物とは程遠く、彼女からは死が溢れている。

「・・・マスター。」

セイバーが隣に居るが、どんな顔をしているのかは分からない。僕は眼球が固定されたかの様に、黒い穴を茫然と見つめていた。

あれを止めなければならない。

そうしなければこの炎は何処までも。

地平を紅蓮に染め上げるだろう。

ふと、視界に令呪が映った。

知らず腕を上げていた。

（・・・殺す、僕が、彼女を？）

僅かな躊躇い、答えが出ない。

刹那に視界を黄金が覆った。

光が晴れる。

あの泥は止まった様子だが、セイバーは周囲を警戒している。

ああ、それも当然。今は約束された勝利の剣、エクスカリバー君だけの聖剣だ。

けれど僕の心は僅かにも震えない。全てが他人事の様だ。

虚脱感だけが押し掛かる。思考を占めるのは唯その事実のみ。

“聖杯は破壊された／アイリは死んだ”のだと。

「……………っ!!」

声にならない嗚咽、しかし涙は流れない。

まるでその機能を忘れてしまったかの様に……否、僕が殺した。
涙する資格は、無い。

ココロが才れた　心を殺すことができない

魔術師殺しでなくなると決めた時点で　立つべき場所さえ定まらない

衛宮切嗣は昔の姿に戻っていた　故にマスターたる資格など無い
セイギノミカタ

僅かな痛みが奔る。

次の瞬間、令呪が消えた。

そして、彼女の方へと体を向ける。

「・・・セイバー、すまない。」

彼女は一瞬驚いたような表情を見せた。
思えば、僕が彼女に言葉を向けたのは二度の命令だけだった。

「 キリツグ・・・いえ。」

目を伏せ、まるで彼女の方が謝っているかのような表情を見せた。
影が薄れる。マスターとの繋がりを失った以上、消えるのが必定。

「君がそんな顔をする必要は無いんだよ。」

君は、本当に・・・僕には過ぎたサーヴァントだった。
アサシン キャスター
暗殺者や魔術師、或いは反英雄こそが僕には相応しかったんだろ
うね。

・・・いや、僕自身がサーヴァント機械だったのかな。」

彼女は顔を上げて此方を向いた。
その顔に浮かぶのは悔恨か憐憫か。
そしてそのまま、光と消えた。

炎の中を彷徨い歩いている。

（何故何時も生き残るのだろう・・・）

ココロがイタむ

（今出来るのは、せめて・・・）

目に付くのはシタイ、したい、死体

(生存者は居ないのか・・・?)

それでもボクがカノジヨをコワシタ^{コロ}

(あれは・・・ヒトか?)

視界が悪い。20m程先に誰かが立っている。
数歩進んで歩みが止まった。

この魔力の残滓は戦闘による物ではない。
先の一撃を放ったのは

「抑止の・・・守護者。」

Side: ????

「約束されし勝利の剣!!」
^{エクスカリバー}

真名開放の負荷で黄金の剣は光となり霧散していく。

俺の世界の中でも最上位に位置する聖剣。

これならばこの世全ての悪を完全に消し去る事が出来ると経験済みだ。
^{アンリメユ}

「・・・さて、切嗣がいなかったのなら俺の様子でも見に行くか。」

元よりこの区画で生き残る事が出来るのは、切嗣に助けられる子供一人だけ。

世界の影響下に無い以上は探してまで人間を消す必要もなし、ソレをどうするかはその場で決めれば良い。

見付かるかどうかも定かではないし、そもそも存在するのも分からないのだ。

しかし、少年を見付けるのは予想以上に容易だった。
道の真中で崩れた瓦礫に左半身が埋もれている。

（・・・焼け死んでいなかっただけマシか。）

瓦礫を除け、声を掛ける。

「おい小僧、生きていたら返事をしろ。」

意識を失っている様で反応は無い。
ざっと見たところ、左腕は落とさねばならないだろう。

ふと、人が歩いてくる気配がした。

（・・・生存者？他にもいたのか。）

そちらに目を向けると、黒のロングコートを纏った男が歩いてくる

姿が映った。

（・・・切嗣か。負けた訳ではなかったのだな。）

切嗣が此方に気付き、声を漏らす。“抑止の守護者”と。頭だけ切嗣の方へと向け、此方から声を掛ける。

「く、分かっているのなら話は早いが、抵抗しないのかね？」

「ああ、敵わないという事も理解しているからね。」

随分と枯れた答えが返ってきた。

抑止という結論に至った以上は破滅の要因も、その危機が既に排除された事も理解しているだろう。

ならば、不要な殺戮を続けるであろう守護者を黙って見過ごすとは思わなかった。

だからだろう、こんなつまらない事を口にしてしまったのは。

「しかし、先刻お前の妻を殺したのはこの私だ。敵を討とうと言うのなら付き合うが？」

「・・・っ!!」

一瞬、表情が強張ったがそれだけだった。

「・・・いや、同じ事さ。君がやらなければ僕が手を下していた。」

（そうか、余計な事だったようだな。）

「けど、君の前にいる少年を殺すと言うのなら見過ごす訳に

はいかない。」

僅かに逡巡した後、そう言い放った切嗣の眼には微かな光が灯っていた。

（ん？・・・なるほど、正義の味方の営業再開という訳か。）

S i d e : 切嗣

「　　けど、君の前にいる少年を殺すと言うのなら見過ごす訳にはいかない。」

そうだ、アイリを救えなかった僕に無為に死ぬ事は許されない。
彼女で最後にすると誓ったんだ、聖杯に願えないのなら此の身で為せば良い。

それが決して届かぬ理想だという事は十分理解している。
ならばせめて、この手の届く限りは・・・。

「く、安心しろ。守護者と言っても今回の俺は不良品だ。
恐らく大聖杯の影響だろう、自我を保っている。」

驚いた、守護者でもその様な不完全な事が起こるとは。
彼から邪気は感じない。真っ当な英霊ならば信用して良いだろう。

そうか、と返答し少年の様子を見る為に傍らへ歩み寄り屈む。

「この左腕は……。」

（セイバーが居ない以上、あれだけでは……。）

「ああ、普通ならば助からないが今は手がある。
切嗣、アヴァロン全て遠き理想郷を小僧にくれてやれ。」

「……っ!？」

漏れる声は困惑。何故それを知っているのか。
僕の名前だってそうだ、先程もアイリを妻と言った。
なるほど、世界は全てお見通しという事か。

「分かった。」

どの道他に手は無いのだ。
アヴァロンを少年に譲渡し、彼の方へ向き直る。

と彼の手には一振りの中華刀が現れ、其れを躊躇い無く振り
抜いた。

少年の左腕を切り落とす。さらに同時に自身の腕をも落とし、其れ
を少年の肩に宛がっていた。

「ガアアアアアアアッッ!!!」

切った際のショックで少年が意識を取り戻した。

暴れているようだが、子供の力ではいくら片腕でも振りほどけない。

「何をっ！？」

「安心しろ、俺とこいつは特別だ。繋がりをさえすれば問題無く動く。」

理解が追いつかない。

英霊は姿形こそ同じだが、霊格は人間となど比較にならない。しかし、確かに少年の出血が少ない・・・否、止まっている。

「・・・馬鹿な。」

「く、尤もな感想だがな、こいつとの腕の互換性は確認済みだ。繋がるのが早いのはアヴァロンに魔力が残っていたからだが。」

少々アンバランスだ、などと冗談を言っているのだから始末が悪いけれど、それ以上に気になった。だから尋ねた“君は誰だ”と。

「ああ、私はエミヤシロウ、正義の味方のなり損ないさ。」

（エミヤ・・・衛宮、そんなまさか。これが偶然では在り得ない。）

「君は、未来の英霊という事かい？」

ああ、と彼は頷き、何時からか傍らに置いていた赤い外套を差し出してきた。

片手では無理だから、自分の代わりに少年の腕に捲けと言う。

僕は作業を進めながら彼の話に耳を傾けた。

此処で衛宮切嗣に救われ、衛宮の姓を貰った事。
僕から魔術を習うが、僕が途中で病に倒れる事。
聖杯戦争に巻き込まれ、セイバーと共に勝利する事。
そして、一を捨てて九を救う処刑人となった事。

そんな過去を語る彼に、僕は“自分自身を幻視”した。

S i d e : エミヤ

俺の話が終わると、作業が終わるのは同時だった。
赤い外套を捲き付けてからは、小僧は幾分か落ち着いた様子だ。
聖骸布の一種なので、魂への浸食を防いでくれるだろう。
アヴァロンの使い方さえ分かれば必要無いのだが。

新たに干将と莫耶を投影して足元に置き、さらに新しい剣を投影する。

こればかりは本物に程遠いが、一度ぐらいならば使用できる筈だ。
外見から使用方法が分からないからだろうか、それを見た切嗣が尋ねる。

「それは何だい？」

「宝石剣ゼルレッチ、シュバインオーグの秘奥だ。」

「なっ！？」

アインツベルンか、或いはアイリスフィールから話程度は聞いていたのか。

その表情には明らかに驚愕の色が見て取れる。

「守護者の腕を持った人間などこの世界は許容しない。

ならばその手も届かぬ様な彼方の世界に飛ばすしかあるまい。」

宝石剣を小僧の胸の上に置く。

そして今度は生前に使用した件のアゾット剣を投影する。

「これには知人の魔力が込められている。ところが彼女はシュバインオーグの系譜でね、その魔力で宝石剣を暴発させようと言う訳だ。」

「

一通り説明を終えたところで短刀を足元に置き、ホルスターを投影する。

それを小僧のズボンに据え、干将と莫耶を其処に差し立てやる。

（ さて、準備は整った。後は・・・ ）

「小僧、話は聞いていたな。貴様の左腕は徒の人間に過ぎないお前

には猛毒だ、覚悟が出来るまで聖骸布を捲いている。その腕は俺の記憶と経験、人外の力を貴様に与える。止むを得ず使う事になったその時は、アヴァロンの使い方だけは絶対に思い出せ。」

必要な事柄を口早に伝え、小僧はそれを茫然と聞いている。

切嗣から必要な事はあるかと思ひ、視線を向けるが首を振った。

（当然か、可能性があったただけで、今はまだ出会ったばかりの他人に過ぎんのだからな。）

「その双剣は干将莫耶、餞別代りに受け取っておけ。私達に恩を感じると言ふのなら、辿り着いた世界で“本物の正義の味方”になって見せる。」

アゾット剣を逆手に構え、宝石剣に宛がう。

l??t

ただ一言と共に限界まで魔力を流し込む。
同時に宝石剣が極光を放つ。

「さらばだ、衛宮士郎。二度と会う事も無いだろう。」

そして光が収まった時、その場から一人の姿が消えていた。

Interlude 0 . もう一度、始めから

Side : 切嗣

視界を覆っていた光が晴れた時、少年の姿は既にそこには無かった。

「彼は、無事に辿り着けたのかな。」

「・・・さてな。ここまでやって野垂れ死ぬ様なら、そこまでの存在だったという事だろうよ。」

(そうか。なら僕は、自分の為すべき事を・・・。)

踵を返し、その場を去ろうとする。

すると彼は立ち上がり、僕に覆らない事実を告げた。

「止めておけ、この区画に最早生存者は居ない。アヴァロンの様な奇跡無くして、これ以上の命は救えない。」

返すべき言葉が見付からず、ただただ立ち尽くす。

頬を一筋の雫が伝う。

夜明け前、曙光が萌す空を見上げた。

「・・・雨、か。」

「これで直に火は治まるはずだ・・・しかし、人の命を吸い上げて降る雨か。」

皮肉気に眩き、嘆息を漏らしている。

「さて、少しばかり話を聞かせて貰っても良いかね？」

僕は後ろへと向き直り、頷いた。

そして、今回の聖杯戦争の大筋を語った。

彼は終始無言で聞いていたが、それに一際大きな反応を見せた。

「待て、令呪を二つ使ったと言ったな。それはどういう事だ。」

「・・・ああ、転移と死守で、二つの命令に数えられたんだと思う。」

「な・・・に？」

驚愕の表情が浮かぶ。

（成程、君の記憶と齟齬があるという訳か。）

彼は一度苦笑を洩らし、顔を上げた。

そして自信の込もった表情で、こちらを見据えて言い放った。

「納得がいった。彼女もサーヴァントとしてはある意味特別でね、令呪一つならばある程度抗えるのだよ。」

まるで自分の事のように誇らしげな彼の様子が少年のようで、先程ま

でとは随分不釣り合いに映った。

「・・・まして聖杯は彼女の悲願、何物にも代えられない唯一なんだから。」

（ ああ、君も・・・。）

だから気付いた。

僕が彼女^{アイリ}を救いたいと思ったように。
君は彼女^{アルトラア}を救おうとした。

C h a n g e S i d e : エミヤ

（成程、それで俺が遣わされたという訳か。）

切嗣に会った時からの疑問は氷解した。

今回の聖杯戦争は俺の記憶よりも数年後。

経過は概ね一致するが決定的な所で齟齬が生じていた。

最早これ以上、この場に留まる理由は無い。

だが、行き掛けの駄賃に少しばかり確認しても構わないだろう。

「・・・しかし、その命令はらしくなかったのではないかね？」

「　　どうだろう、昔の僕ならそうかもしれない。けど、可能性が欲しかったのかも知れない。彼女も救える可能性が……。」

（ああ、聖杯が汚染されていなければ別の結果もあっただろうよ。）

「……彼女の存在は、気付いた時には僕の悲願よりもずっと大きくなっていったんだ。」

“それが分かったのはさっきだけどね”と、そう言つて切嗣は微笑んだ。

今にも泣き出しそうな、触れるだけで壊れてしまいそうな微笑み。

「これからどうするんだ？」

だから。知らず、口調が昔の自分エミヤシロウの物に戻っていく。

「　　分からない。けど、もう……後悔だけは、したくないんだ。」

切嗣はそう途切れ途切れに答えると、俺に背を向けた。

その背に言葉を投げかける。今度は俺から切嗣へ、心からの誓いを。

「目に映る全てを救ってくれなんて言わない。それでもせめて、大切な誰かの心ぐらいいは守ってやれよ。」

切嗣の肩が震えた。

しかし、今度こそ振り返る事無く前に向かって歩みを進めた。

イリヤの事は伝えていない。

それは俺が決める事じゃないから。

(けど・・・きつと。)

「正義^{ヒーロー}の味方は、大人になったからって名乗っちゃいけない訳じゃないだろ？」

今際の誓い。

呪いとさえ揶揄された。

俺の心の一番奥に根付くもの。

(それでも俺にとっては・・・。)

少なくとも、俺にとって爺^{キリッゲ}さんは

きつともう聞こえていない。

その背中には影しか見えない。

道は違った。

今度こそ、その道を迷わず進めるって信じてる。

もう十分だろう。

だから自分を許してやれよ、爺^{キリッゲ}さん。

一つの終わり。

養父の背中を見送ること無く、右手の剣を胸に突き立てる。

そして静かに、目蓋を閉じた。

Interlude 0 . もう一度、始めから（後書き）

Interlude 0 でした。

当初はInt1の予定でしたが、そも物語始まっていないと言う事で0に差し替えました。

今後もストーリーに（余り）関係無い部分や、息抜きの意味合いで短い幕間を挟んでいくと思います。

Episode 01・曙天の晨星　　e b i r t h

体を包むのは浮遊感。

まるで水中を漂っているみたいだ。

この目には何も映らない。

光も届かない様な海の底。

自分^{なにも}が誰^{おもいだせない}なのか分からない。

思考が思い出す事を拒否している

何があつたのか分からない。

けれど、全身が痛みを訴える

ジリジリと眼球の奥が焼ける。

この眼にはその映像^{ジゴク}が焼き付いている

気持ち悪くなつて、知らない光景を振り払った。

しかし、それさえも拒絶する

“ 厭だから無かつた事にしようなどと、其れは罪だと思わんかね。 ”

吐き気がする／知らない声^{アイシ}が聞こえる

“ 受け入れる、お前ただ一人が生き残ったのだ。そして認める、お前は救いを求める声を見殺しして、ただ一人生き延びようとした。”

言葉は質量を伴って、この心臓を鷲掴みにする。

俺はそんなこと知らない（・・・本当に？）

言っている意味が分らない（それはただ蓋をしただけ）

“ 自己を優先することは生物ヒトについての強行規定。それでも、忘れようなどという行為は、置き去りにする事とは決して同罪つりあわではない。”

ただそれを、聞き取らなかった。

だから耳を塞いだ。

“ 忘却はこの上ない赦しだ。だが、お前は贖わねばならない。踏み躪った想いに報いるだけの、理想コトエで以って示さねばならない。”

「聴きたくない聞きたくないキタクナイ！！俺はそんなコト知らないっ！！」

そうしても尚、責め付けてくるその声を。

掻き消す為に意味も無く叫んでいた。

“ 彼らの願いを忘れるな、その死を胸に刻め。それが、何時かは薄れゆく記憶だとしても。”

叫びは虚しく闇に吞まれ、苛む声は変わらず頭に響く。
だってこのコエは、裡から生じている。

それを如何でか防げよう。

“ 例えキセキに頼ろうとも、死者が甦る事は無い。起きてしまった事は戻せないのだからな。”

「・・・然るに、空っぽのお前は、死の先^{その}に一体何を見る？」

明確な問い掛け。

それを境に、真っ暗だった視界に一条の光が差した。

答えが出る事は無い。

そもそも、言葉の示す意味さえ理解出来ていない。

だから。

此处に居るのが厭で、この誠告を聞きたくなくて。
無意識に光の方へと手を伸ばしていた。

けれど、伸ばした左腕は紙屑みたいに潰れていく。

さつきから可笑しな事ばかりだ、これはきつと夢。
このまま目を瞑れば、直に眠りから覚めるだろう。

されど、耳鳴りが鎮^ちむ事はなく。

“ 思い出せ ” と。
“ 忘れるな ” と。

E p i s o d e 0 1 . 曙天の晨星 ｝ e b i r t h ｝

赭^{あか}き大地は、満目蕭条なりて。
在るべき形より逸りし、空虚なる世界。
天は黄昏、後には夜^{おわり}を控えるのみ。

されど、其れは断じて死に非ず。
此処は何人にも侵し得ぬ、静謐たる彼らの埜域。
今は唯、瞑^{ねむ}り坐して担い手を待つ。
真に目覚めし時にこそ、世界は黎明を迎える

（ ここは・・・何も、無い？ ）

再び目を開いた時には、荒涼とした風景の中に在った。
見渡す限りの虚空、地平まで続く荒野。

しかし後ろを振り向くと、一人^{そいつは}の男が立っていた。
血に塗れたかの様な紅い外套に、浅黒い褐色肌。

それとは対照的に色が抜け落ちた白髪。

顔を俯せ直立する偉丈夫。

その左手には、一丁の拳銃が握られていた。

男の姿の何処が奇怪しいでもないのに、違和感を覚える。

（銃なんか持つてる奴が目の前に居るから？）

否、そこから感じるものがあるとすれば、それは恐怖。

じゃあ、日本人離れした容貌だから？

それとも、剣か弓の方が相応しいから？

“そもそも、コイツにひだリテなンテ、アツタツケ？”

（あれ、なんでそんな事・・・。）

思うのだろうと。

疑問は同時に解答でもある。

理由があるから、疑問が生じる。

（・・・俺は、コイツを知っている？）

頭に鈍痛が走る（その蓋を開けてはならない）

顔を伏せ、歯を食い縛って耐える。

一瞬、触れてはならないモノに手を伸ばしてしまった。

痛みは直ぐに治まり、そして目を開けて気付いた。

左腕に、まだ赤い瘡蓋がある。

目に見えないのは火傷の跡かくしている

その下が、どうしようもなく気になつて。

その蓋を開けてはならない

爪先で少しだけ持ち上げようと。

疵「コロコロ」が「コロコロ」が開いて痕が消せなくなる・・・！！

瞬間、自我「コロコロ」が碎けた。

隠れていたのは“死”そのもの。

ジクジクと音を立てて、記憶はこの身を浸食する

熱い。

肌が焼ける。

目に映るのは真っ黒な　。

熱い熱い熱い熱い熱い。

そして、涙うみの中で聞いた声が、この身に再び問い掛ける。

“死者が甦る事は無い。起きてしまった事は戻せない。”

聞こえる声きこえるが／鞠まりこえる声が

心を決る。

（ 止める。 ）

“ 空っぽのお前は、死の先に一体何を見る？ ”

（ 止める・・・やめろやめろやめろやメロやメロやメロ・・・ッ
！！ ）

手遅れになるその前に。

辛々意識を繋ぎ、慌てて右手で上から抑え付けた。
フタをした

それは十秒にも満たない僅かな時間の事。
けれど、胸に溜まった熱い空気を吐き出し、肩で息をしていた。

「・・・結局、答えは出せず終いか。」

そう言つて、不満そうに嘆息を漏らしているのが分かった。

「 つ、えっ？ 」

思わず顔を上げ、男の方へと目を向ける。
そこに先程までの静かな姿は無かった。

鷹の様に鋭い眼光。

明確にこちらへ向けられた敵意。

男はゆつくりと、此方へと歩み寄って来る。

（ 来るな・・・来るな、来るな ）

射抜かれたかの様に体が動かない。

違和感が嫌悪へと、恐怖へと掬り替わる。

アイツが歩みを止めた時、俺はきつと殺される。

“別にいいだろ、俺はあそこ^{.....}で死んだんだから。”

まただ、頭に声が響く。

けどそれは、前とは違うコエ。

今度は本当に自分の胸から上ってくる言葉。

けど駄目だ。

何が良くても、コイツだけは良くない。

あの銃で撃ち抜かれるという事は。

というヒトが終わるという事。

(　、あれ?・・・俺の、ナマ・・・エ?)

錯乱する思考の中でも、結論に到った。

ああ、確かにこの身は死んだも同然^{ナマエ}。

自己の定義さえ既に見失^{オモイダセナイ}っている。

而して、裁きの刻は来たる。

男は俺の前で立ち止まると、左手を上げた。

銃口が眉間に突き付けられている。

「 士郎が、偽りの人生しか歩めないと言っのなら・・・」

視線が上げる。

引き金に掛けられたソイツの人差し指。

ガキリと音を立てて撃鉄が上がる。

「・・・この場で死んだ方が、マシというものだろう?」

自分の死を前に、喉がカラカラに渴いている。

眼球はそこで固定され、一ミリたりとも動かせない。

そして躊躇い無く、引き金は引かれた。

結論から言つて、銃口から鉄が飛び出す事は無かった。

しかし、血が流れずとも、それは確かな“死”のイメージ。
ナカミ
問答無用で蓋は開けられ、
を暴いてきやがった。

「 あ、 ああ、ああああああっ!!」

全身の神経が、内側から紅蓮に焼かれる。

熱い熱い熱い熱い熱い……！！

裡より生える刀刃が、肉を裂き骨を断つ。

痛い痛い痛い痛い痛い……！！

死んで終しまいたくなる様な責め苦を、齒を食い縛しって何とか踏み止まる。

だって言うのに、 から知るはずのない情報が、際限無く流れ込んでくる。

頭が割れる、

その情報量は一個人には容量オーバー。

あたまがわれる、

その内容は徒の一般人には解読リカイできない不能。

アタマガワレル……！！！！

その奔流は俺の意識を押し潰していく。

「あああああああああつつつ……！！！」

そこで俺は、目を覚ました。

Side： 忍

「・・・ふう。」

嘆息を漏らしながら客間の扉を開ける。

中では恭也が椅子に腰掛け、目を瞑っていた。

「・・・ん？ 忍、起きてきたのか。」

「恭也があんな事言うものだから、気になっちゃって。」

今日の昼時の事だ、彼が家に残ると言った。

曰く、“何か起きる予感がする”との事だけど。

寝ていると言われたので仕方なく、私は暫く休んでいた。とは言え、根が夜型なので文字通り横になっていただけ。

そして、丑の時までは何事も無く過ぎた。

刻限は5時を迎え、空の端が白んできている。

もう間も無く日が昇る。

鳥の声は無く、風も凪いでいる。

本当に静かな・・・静か過ぎる夜明け。

（ 確かに、これはちょっと異常ね。）

彼の予感が当たっていた事に今更ながら気付かされる。

ふと、耳に声が届いた気がした。

「……………」

「どうした。」

「うっん、誰かの叫び声？……聞こえたような……。」

私は普通のヒトよりも耳が利く。

それが分かっているから、彼は無言で立ち上がり傍らの刀を握る。

と、ノエルが礼をして部屋に入ってきた。

「……失礼します。忍お嬢様、林の方でセンサーに反応がありました。」

侵入者の様ですが、如何為さいますか？」

「相手の数は？」

「一人の様です。」

「……出るぞ。ノエルは忍を頼む。」

「かしこまりました。」

「恭也っ！……気を付けて。」

それに頷くと、恭也は部屋を後にした。
そして私もノエルと一緒に彼の後を追った。

一年前、恭也と“誓い”を結んでから私の生活は良い意味で一変した。

相変わらず両親は家を空けがちだけれど、皆が居て、学校に通い、気兼ね無く過ごせる。

そんな、本当に“幸せ”なんだと感じられた日々。

確かに私達は普通じゃない。

表も裏も無く、正しく異端だと言える存在。

私自身、誰も彼もが受け入れてくれるとは思っていない。

財産が目当てか、それとも私達を滅しに来たのか。

どちらにせよ、何時かはこんな日が来るとも思っていた・・・なのに。

その時を迎えてみれば、かくも心は千々に乱れ。
夜窓に望む、薄れゆく残月に。
無意味と知るも、強く祈った。

（ 願わくば、誰も悲しまぬ様に。 ）

Episode 01・曙天の晨星 ｝ e b i r t h ｝ (後書き)

さて、何だかんだで結局始まりませんでした。

本編に絡まない面々はこういう時に出さないと出番が……。その関係で、多分これからも寄り道は増えるかと思われます。寄り道と幕間の差って何だろうか？

ちなみに、とら八陣はそちらの設定重視で行こうかと(数人ですが。

タイトルは「曙天の晨星 ｝ e b i r t h ｝」という事でしたが、意味はお好きなようにお取り下さい。

いつか纏めて、題の由来みたいなものも付けようか？

取り合えずはこれから、「日本語題＋英副題」で行こうかと。

次話も月村邸・・・続きます。

Side : 高町士郎

a half day ago ,

「あれ、お兄ちゃんの方は？」

「ん？ ああ、恭也は月村さんの家に泊めて貰うらしいんだ。」

「ふえー、そうなんだ。」

二階から下りてきたなのはが、卓上の皿が少ない事に気付いて尋ねてきた。

桃子は苦笑いを浮かべ、美由希は僅かに眉を顰めている。

なのはと美由希の間が欠けて、四人で囲む食卓。

今日の昼過ぎの事だ、月村邸に行った恭也から一報があった。

“何か起きるかもしれないから、警戒しておいて欲しい”と。

その後、美由希とは簡単に打ち合わせをした。

桃子はいつも通りに振る舞うらしい。

なのはには 伝えていない。

そして俺は、皆に店を任せて辺りを見回っていた。

しかし、不穏な空気も、影で動いている気配も終ぞ見付けられず。

空も赤くなってきたため帰宅した。

（月村の家が狙いか・・・いや、明確な動きがあれば恭也も気付く。何の準備もせずに行ったのだから、気付けば装備や増援を求める筈だ。

それが無いという事は、それこそ“風が吹いた”程度の予感だったのか・・・。）

恭也も多くは語らなかったが、月村家には色々と複雑な事情があるのだと聞いている。

費用対効果を鑑みるに、家が狙われる可能性はそう高くない。

仕事関係での怨恨を除けばだが、その手の情報も回って来ていない。

しかし、あちらには恭也が“強い”と評するノエルさんも付いている。

此方が下手に動いては、隙を窺っているかもしれない相手を刺激する事になる。

その時に、実戦慣れしていない美由希では足手纏いになる可能性さえある。

そして俺自身も。この体は最早、全開での戦闘は難しい。

状況が固まるまでは此処に残った方が互いに動き易いだろう。

（・・・今は置いておこう。）

余計な事を考えていては折角の夕飯も不味くなる。

何時でも確りと食事を取る、それもまた重要な事だ。

「よし、それじゃあ・・・いただこうか。」

「「「いただきます。」」」

兎に角だ、今晩は寝ずに備えよう。

何も起きないに越した事はないが、これも恭也には良い経験になる。一年前に少々こたついた程度で、その後は平穏なものだった。

真剣での打ち合いも行っではいるが、やはり実戦に勝る訓練は無い

「・・・あなた？ お箸が止まってるわよ？」

「ああ、すまんすまん。何でも無いんだ。」

「父さん、食事中に考え事は良くないよ。」

「ははは。ううん、今日も美味しいな！」

こういう時、真っ先に動いていたのが不破士郎だ。むかしのじぶん

だからだろうか、じっとしていると色々と考え込んでしまうのは。

仮に襲撃があつたとして、徒の賊ならば何の問題も無い。

裏の人間が相手だとしても、立ち回れる様に鍛えてきた。

恭也は既にあれも習得している。

ましてや、一人でも状況を判断出来て良い歳だ。

傷を負う事を恐れていては、ボディガードは務まらない。

こうして冒険する事で得られる物もあるだろう。

（恭也・・・確りな。）

心の中で、声の届かぬ相手に激励を。

それぞれの胸に思惑を抱きながらも、夕食時は賑やかに過ぎてゆく。

S i d e o u t

E p i s o d e 0 2 . 靄然たる暁霞は深く ｝ T h e a t r i
c D r e a m ｝

目を覚ましたのは仄暗い林の中だった。

(・・・どこだ、ここ。)

辺りには靄が立ち込めている。

夜明け前だろうか。

足元を見遣る。

眼前に在るのは見慣れない背中。
赤い少年が片膝を突いていた。

グツグツと、液体が煮え滾る音が聞こえる。

回路、強制起動成功。 力の生成を確認。

“・・・熱い、熱い熱い熱い。”

ギシギシと、骨子が軋んでいる音が聞こえる。

左腕受肉、連結正常。 現在活動を抑制中。

“・・・痛い、痛い痛い痛い。”

手足の感覚が希薄。

頭の中は霞みがかっている。

そして、この眼には在るべきモノが写っていないかった。

自らの視覚を偽装する事で、見えない傷みを忘れている。

しかし、他人の思考は頭蓋の内に流れ込む。

回路交錯部焼結、未知の器官へ変質。 復

元は不可。

・・・保留。

・・・

肉体に認識との相違・・・誤差、修正中・・・

事態を飲み込むだけの時間は与えられない。

何があつたか思い出そうとしている内に、そいつが徐に立ち上がる。知らない誰かに合わせて辺りを見回した。

正面に臨む高き壁。

今、その先を知る術は無い。

後方は朦朧たりて。

暗然として、全くの不明瞭。

左手には鉄の檻。

それが侵すを阻み、内からは溢さず。

常無し。

私有地と断定。

的な警戒を探索・・・異

発見前に離脱する。繁みに沿い、左方から

と、そこで頭が止まった。

名残雪。

暁闇に映える一点の白。

俺達は引き寄せられる様にそちらへと足を向ける。気付けば繁みを出て、テーブルの横に立っていた。その上には一鉢の雪の花。

目を奪われる幻想的な光景に。

心は何故か昏迷を深めるばかり。

（かすみ草・・・。）

いつか、誰かに聞いたそのナマエ。

しかし、その誰かを思い出せない。

ヒトと同じで、皆が寄り添って咲く花。

“ならば、師たる此の身はどうだ。”

（・・・花言葉は、）

ガキリと音を立て、思考が切り替わった。

「つ、ぐっ・・・、」

アンノウン接近。数3、距離40、帯刀を確

認。

行使不可。干将・莫耶で応戦する。

腰に差していた鋼を引き抜く。

三步後ろからそれを見ている。

二本を順手に構え、腕をだらりと下げた。

手にしているのは正しく人をす為の。

「大人しく武器を捨てる気は・・・無さそうだな。」

眼前には一人の剣士。

敵意も露わに此方を睨んでいる。

所謂“殺気”と言っやつたろうか。

見ている俺まで全身の筋肉が緊張し、拳を握る力が強くなる。

一級の脅威と想定。追撃の可能性有り。

無力化した後、警告を与え離脱する。

初手は受けに回り、力量差を測る・・・。

「行くぞ。」

数瞬の対峙の後。

その一言と共に、視界が弾けた。

後に映ったのは素晴らしい戯曲。

台本通りに、打ち込まれる銀は白と黒に吸い込まれていく。

右、胴薙ぎ。

左脇、突き。

俺はそれに身を振りながら指示を送る。

コントローラスクリーン プレイヤー持つ手が痺れ、目の赤髪は有り得ない速度で剣を振るう。

視覚も、聴覚も、触覚さえも偽装した死合ゲーム。

リアルなんて言葉が陳腐に思える、けどそれは自演じゃない。
だって俺は背中を見てるし、あんな風に剣を振れない。

それに、こんな化物みたいな左腕はシラナイ。

剣士が飛び退いて動きを止める。
指示は与えず、それを追う事も無い。

最早、ユメかと自分の思考が区別できない。

抑、此の身が何処に在るのか理解していない。
なにをしている

三度、ドクリと鼓動が締め付けた。
それも無意味と剣士は再び打ち掛かる。

舞い散る剣花。
響くは旋律。

しかし、それ以上に。
赤い布に覆われた左腕が、今更ながらに気になっていた。

されど、幕が上がるまで前奏は続く。

S i d e : 恭也

(御神流・・・心。^{しん})

扉を前に感覚を研ぎ澄ます。

この場に於いて、さらにその先へと意識を向ける。
其れは察するのではなく、視る為の技。

しかし、そこに動く者は無く。

扉を押し開け、周囲を探る。

知覚の届く範囲にはやはり誰もいない・・・其一人を除いて。
肌寒い朝靄の烟る幽光の先、影が佇んでいるのが分かる。

(・・・そこまで出て来たなら、何故仕掛けてこなかった？)

奇襲ほどではないが、先の手を取る事にも意味はある。

例えば、先程のドアを開ける様な拳動も通常は命取りとなり得る。
室内で襲われれば、護るべき者を後ろに否応無く守りに回る事になるだろう。

つまりは戦闘の状況を選べるのだ。

その利を捨てての受け、この闇も靄も使うには薄過ぎる。

考えられるのは援軍、狙撃・・・。

しかし、俺達の戦闘は時間稼ぎになる様な物ではない。

狙撃に関しても、普通の人間ならばいざ知らず。

月村家^{こい}の守り手にはまず通じない。

（ 援軍が来る前に取り押さえるか。 ）

そう思い間を詰めようとした時に、後ろから二つの足音が近付いてきた。

「 恭也。 」

「 出て来て大丈夫なのか？ 」

「 すぐかはファリンと奥の間に下がらせる。 私にはノエルが付いてるから大丈夫よ。 」

「 ……ノエルはそのまま守りに付いてくれ。 俺はあいつを押さえる。 」

「 もしもの時は、私も力を使うから……無茶はしないで。 」

「 ……っ！ 忍……分かった。 」

その言葉に思わず後ろを見遣るが、頷き返されてしまう。
ならば、そうならぬ様に努めるのが俺の役目。

そして今度こそ、歩を進めた。

待っていたのは赤い少年だった。

血に濡れた服。

所々が焼け落ちた、ボロボロのその姿は。
まるで、戦場^{シゴク}を這いずり回ってきた後かの様だった。

外見から言えば、11、2歳と言ったところだろう。

しかし、赤い布に包まれた左腕だけが成人男性の様に太く、長い。

義手　それも敢えて大人用の物を選んだか。
それとも、戦闘用の機械^{オートマタ}人形なのか。

どちらにせよ、見てくれが幼体擬装^{「コトモニセ装い」}の意味を酷く損なっている。
あれでは油断どころか、逆に警戒されてしまう。
或いはそれ自体が誘いなのか・・・。

「　大人しく武器を捨てる気は・・・無さそうだな。」

少年が手にしているのは見慣れない黒と白。
無骨な造りではあるが、日本刀とは違う美しさが有る双剣。
その刃は広く、そして厚い。

彼は正面に向き直り、感慨無く此方を睨み据える。
まるで“お前など敵ではない”とでも言っているかの様に。
その眼は逆も見た目相応ではなく、歴戦の猛者の物だった。

対して、俺が手にするのは月村邸に置いて在った一振りの小太刀。
無銘ではあるがかなりの業物、徒の賊ならば何の問題も無かった。
しかし、そこに居る相手は俺と同じく戦闘者。
銃器ではなく、此の身と刃で以って事を為す者。

（　　せめて、二本揃えておくべきだったな。）

武器になる物自体は幾らかあった。

だが、扱い慣れた小太刀を選んでこの場に臨んだのだ。

そもそも予感があったと言うのに別段準備をしなかった。

それ自体が手落ちであったと言える。

睨み合つて数秒が経過している。

彼が腕を上げる様子は無い。

（誘い手か、それともあれが構えなのか。戦う気が無いという事は
）

未熟だ、と頭の中で悪態を吐く。

戦いは既に始まっているのだ。

忍は玄関先から此方を伺っている。

その傍にはノエルが控えている、心配は要らない。

後は増援が来る前に、こいつを取り押さえれば良い。

勧告は済ませた。

最早、雑念は不要。

「
行くぞ。」

その言葉を皮切りに、俺は地を駆けた。

四歩。

一瞬の内に間合いを詰めに掛かる。

右手を柄に掛け、刀を抜く動作を見せる。

五歩、相手が双剣を交わしに動くのを見送った。

（ 虎切っ！！ ）

抜刀、その勢いのまま、二本の付け根に切り付ける

だが。

「・・・、なっ！？」

驚愕の声を漏らしたのは此方だった。

直ぐさま浅い刺突^{つぎ}を放つ。

やはりそれも弾かれるが、後ろに一步飛び退いた。

今のは不味かった。

自分の打ち込みに耐えきれず、得物が碎ける感触。

俺も以前は木刀を何本も折ったものだ。

その経験が無ければ、この刀に刃は付いていなかっただろう。

確かに、あの双剣が受けに秀であるう事は見て取れていた。

しかしこれだけの得物ならば、それこそ鉄板であろうと両断できる。

（それが・・・。）

鞘を捨て、正眼に構えた小太刀を見遣る。

その刃は欠け、刀身が僅かに歪んでいた。

（・・・一度切り結んだだけでこれか。）

追撃は無い。

防御を解き、再び腕を下けている。

やはり、あれが彼の構えらしい。

珍しい型だ。

俺の知る相手とは全く異なる物。

“構えない事が構え”など何の言葉遊びか。
手にする剣も含めて、その正体が掴めない。

（深くは切り込めないが・・・手はある。）

上げた刀をそのまま左袈裟に切り込み、右に刺突^{つき}、胴を払い距離を
取る。

続け様に疾風の如く、脇、腕、肩への三連撃を一息に放つ。

しかし、それも悉く弾き、逸らされた。

都合三十は切り結んだか。

その中で分かってきた事がある。

まず、極端に動こうとしない。

時折反撃も見せるが、押すも引くも移動は僅か。

斬り返す為の一步か、懐近くまで踏み込まれた時の後退り。

追撃も無ければ、大きく間合いを離す事もしない。

此方が一刀とは言え、これ程容易く捌かれるとは実に守り上手だと言える。

そしてもう一つ、彼の太刀筋から何らの脅威も感じないという事。初めて打ち合う、その正体も掴めない様な相手にも関わらずだ。父や美沙斗さんと手を合わせる時はそうではない。

その手の内を知り、一挙手一投足に注意を払いながらも、次の一手は予想の更に上を行き、此方を討ちに掛かる。そんな感覚があった。

しかし彼はどうか。

捉えられない様な速度でもなければ、神業染みた技術を見せる訳でもない。

繰り出される一撃はあくまで平凡。

その全てを予測し、視えて、理解も出来る。

だと言うのに攻め切れない。それが異常だった。

敢えて評するのなら無駄が無い・・・無さ過ぎる。

能力で劣っているにも拘らず、こうして打ち合えるのは。

防げる道を創るのではなく、識っているから。

思考と行動には僅かな遅れも許さず、確信を持って此方の手を潰してくる。

それは正しく、刻まれた記憶通りプログラムにしか動けない、ヒトヒトに似せた機械の様で

だが、それも此処まで。

相手が何であろうと敵は討つ、御神の剣はその為に。最早、手加減は出来ない。

（・・・悪いが、多少の怪我は諦めて貰うぞ。）

貫。^{ぬき}

其れは見切りの極み。

但し受けるのではなく、攻める為の。

相手の防御を見切る事で此方の一撃を透す。

戦いを続ける中で彼も隙が大きくなっていた。
左上段、次で決める。

三間を一息に詰め、中段に放つは二筋。

手は抜かず、されど牽制。

あの得体の知れない構えを解く為の。

（飽く迄、受けに回ると言つのなら・・・）

予想通り。

それを双剣の腹で受けた。

（・・・隙だらけだっ！ 取った ！！）

返す刀で無防備な左の肩口へ、突く様な斬撃を放つ

！！

だが。

ガッ

(・・・!!)

それは黒に吸い込まれた。

白光が奔る。

皮一枚、僅かに避け切れず掠められた。
ジリリと脇腹が焼ける。

後ろで、忍が動く気配がした。

S i d e o u t

ゲーム
斬り合いを始めて数分になるだろうか。

赤髪は変わらず静、そこに剣士が攻め立てる。
はじめから

さっきから指示を送ってないのに、コイツは自動で防御する。

漫ろに、右腕と左肩が痛くなってきた。
右脚も正座していたみたいに痺れている。

“そろそろ止めて、休まないと。”

中段、左右に払い。
誘いに反応、迎撃。

相手の攻撃を弾いて、また一步カウンター。
それに何故か、剣士の反応が僅かに遅れた。

(・・・あ、)

今まで空を切っていた攻撃が掠めた。
崩れる事の無かったその顔には困惑が満ちている。

と。

後方に居た二人が近付いて来るのを捉える。
長髪の女性と目が合った。

敵戦力、把握完了。
次手より攻勢に移り

(・・・やめる。)

之を撃破する。

(止める、この人と戦ってはいけないっ！)

思考も儘ならなかったこの頭が。
有り丈の理性で以って、相手を斬る事を拒絶する。
しかし、そんな思いが他人に届く訳も無く。
コイツは構わず一步前に出た。

影が伸びる。

その黒は輪郭を帯び、剣士の足元まで。
闇路に光が差し込んだ。

（日が、昇る・・・。）

それに目を細めるのを認めた瞬間、この身は爆ぜた。

身体を倒し、地を這う形で懸隔を抜ける。
左を払い、合わせられるも疾駆は止まらず。
真正面から左脇へと身を投げる。

是は迎も、子供の躰には為し得ぬ絶技。

相手は刀を袈裟に振り抜いたまま。
それを驚異的な反応速度で、抜ける此方へ切り返す。

凄まじい勢いで、映像が視界の端に抜けていく。

しかし、腕を畳み縦に構えた右刀がそれを受ける。

其れは全て識っていたかの様な立ち回り。

視界の外、踏み込んだ左足を軸に体を捻る。
半回転、その勢いのまま左腕を振り上げた。

ブチブチと筋肉が音を立てて断裂する。

されど、身を裂く刹那、眼前に銀光が奔る
！！

斬

「・・・っ！！」

漏れたのはどちらの声か、一閃と共に深紅の花弁が夜の庭園に舞った。

そして俺は、夢から醒めた。

EP2、予告通りとは言え始まらず。

次から皆も出てきます・・・多分。

戦闘が殆どでしたが、これで良かったのかは分からず。

行間を空けずに書くと、次の行まで視界に入っちゃうし。

かと言って空け過ぎも気持ち悪い。

加えて効果音。

擬態語、擬音語とは違う風に表すにはどうするのが良いか。

まあ、落とし所を見付けるのも課題という事で。

ちなみに、文中に挙がったかすみ草の花言葉は「夢心地」でした。

Episode 03・繫縛の心に沈く　Shed Tears

パチパチと弾ける音が聞こえる。

救いを求める声こゑが聞こえる

漂うのは生理的に受け付けない厭な臭い。

これはきつと　　が焼けた二オイ

目を開くと辺りは一面の赤。

朱くないのに此処では死が眼に視えている

五感がこの身に迫る終末を訴える。

理性が逃げても無駄だと告げている。

そこらに在イルるのは　　、　　タ　　、　　シタイ。

理不尽で非業な死／平等で無慈悲な救い

そのどれダレもが、まともな“人の死”を迎えていない。

しかし、延々とそれを見せ付けられ、心が壊れた人型よりかは
人間ジブンの精神を残している分、幾らか正常だと言えるのかもしれない

それでも、ああはなりたくなかった。
だから進んだ。死者シヤの声を無視して。
出口の無い焦熱地獄めいろを彷徨い続けた。

この時は、ただ“**体が壊れる**”のが恐かったから。
まだ“**ココロがコワレル**”事の意味を理解していなかったから。

しかし、その歩みも止まる。

崩れてきた瓦礫を避けられず、下敷きにされていた。

（・・・ああ、なんて間抜け。）

全身が痛い。重い。

何ともないのは左腕だけ。

体の状態を確認しようにも首が動かない。

認^みめてしまったら耐えられないから、それを拒否している。
もう声は聞^{こめ}こえない。

それはきっと、俺も直ぐに仲間入りするから。

意識が稀薄になっていく。

出来ればこのまま眠るように、
にたい。

そう思いながら、**瞼を落とした。**

「ッ、ッ。」

$$\begin{pmatrix} \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ ? \end{pmatrix}$$

そんな中、誰かの声が聞こえた気がした。他でもないこの身に向けられた言葉だと、何故かそう漠然と感じら

れた。

ふと、体が軽くなる。

助けようとしているのだろうか。

けれど、これだけでは不十分。

いきるために
シをたくりよせている
鼓動の度に、血が流れ出していく。

気が付くと、誰かはなしこえ（こえ）が一二人になっていた。

瓦礫を踏み砕く音が段々と近付いて来る。

それは、俺の顔に影を落とす形で止まった。

（・・・あ。）

炎に灼かれていた頬が、瞳が、ゆっくりと冷めていく。
今なら、目を開けて礼を言えそうだ。

そして、胸に温かい灯いのちが燈った。

しかし同時に、ココロが砕けた。

肩口を挟む傷みから／目を開けてしまったから

（あ、）

・・・
この人にも。

「・・・ああ、」

“ウデガナイ”

「ああああああああああつ！！！！」

夢を見ている。

気付けば此の躰は磔、傷痕が甦る。
打ち込まれていたのは鉄の釘。

ユメヲミテイル。

罪の報いは死、此の身が燃え落ちる。
火の湖の中“第二の死”を迎えようとしていた。

ユメカラムザメル。

そして受け入れた／それを思い出した
過去と言う銘の罪業と、現在と言う名の結末を。

夢から目覚める。

これは終わり／これが始まり

士郎は此処で死んで、エミヤシロウが其処で生まれた。

Episode 03・繋縛の心に沈く 〈Shed Tear
s〉

目覚めは拷問の始まりだった。

内側が何本もの燃える火箸を刺されたかの様に熱い。
からだカラダ

骨子はギチギチと音を立てながら揺り潰されていく。

体が熱くて、体が痛くて、熱い痛い熱い痛い熱い痛い……！！

「ぐ、ぎ……あ、はぁ……がつ、」

空気が煮え滾ったコールドの様に熱い。

息を吸う度に喉が焼け、肺が切り刻まれる。

しかし、脳は貪欲に酸素を欲し続ける。

生きる為には、この痛みに耐えるしかない。

手足が、首より下が動かない。

何とか頭を回して体を見遣る。

眼球が振盪してピントは合わないが、パーツは揃っている様だ。

全身が磔にされている。けれど、それが幸いした。

そうでなければ地面をのたうち回り、手足が折れるまで暴れ続けた
だろう。

或いは、脳漿をぶちまけるまで頭を打ち付けていたかもしれない。

「、くつ……。」

下らない想像に苦笑が漏れる。

全く、茹ったこの頭は建設的な思考を行えないのか。

現状を把握しようとか、この熱病とイタみを何とかしようとか。

そういった類の事には碌に考えが及ばない。

それでも、何とか理性を掻き集めようとした時

「ちよっ！？ 大丈夫・・・じゃな。医が せ

」

誰かが慌てた様な声を上げながら、こっちに走り寄って来た。
それを認めて安心したのか、最早、堤防が決壊したのか。
瀬戸際で何とか踏み止まっていた意識は途切れた

Side： 恭也

dawn，

at the break of

「ノエル、状況は……。」

（……何を、馬鹿な。）

そう尋ねた自分を胸中で嘲る。

聞かずとも分かっている事だ。

日の出と共に草木は目覚め、先程から鳥たちの囀りも聞こえて来る。

危機は去った。

冷たい朝風が頬を撫でる。

目の前に横たわるのは一人の少年。

能く能く見てみれば、その肉体は満身創痍だ。^{カラダ}

所々、覗ける肌には裂傷が見られ、赤く爛れているのは火傷だろうか。

衣服を朱に染める血は、紛れも無く彼自身の物だった。

（こんな事にも気付けないとは……冷静さを欠いていた証拠か。）

頭は疑雲に覆われている。

この場に居合わせた事は、彼にとっても想定外だったのではないか。武器を所持していたとは言え、そもそも彼に害意は有ったのか。

襲撃者にしては不可解な行動が余りに多い。

俺はそれを確認する事無く、敵と極め付けて掛かってしまった。

「……時刻は午前5時36分、事態を確認してから8分が経過しました。索敵範囲内に反応はありません。」

此方まで歩み寄って来たノエルが改めてそれを告げる。

忍はその隣で訝しげに少年を見ながら、一つの仮定を口にした。

「・・・この子、もしかして機械人形オートマト？ さっきのも起動酔いみたいな感じだったし・・・。」

彼は“機械”ではないのか。

起動酔い云々は別にして、それは俺も考えた事だ。

（だが　。）

「いえ。呼吸、循環共に確認できます。」

そう、彼は人間だった。

しかし、それ故に別の疑問が生じる。

機械と言われれば、或いは納得できただろうか。

見た目に不釣り合いな剣の練度も、光の灯らない昏い瞳も。

もちろん、外見通りの年齢とは限らない。

忍の叔母さんに聞いた話だと“夜の一族”は満足に血を吸えなければ、総じて成長が遅れる傾向にあるらしい。

（　　ああ、そういう意味では人間とも言い切れないか。）

俺にとってはそう違わない。

だが、その真偽によって今回の襲撃の意味合いが大きく変わってくるのだ。

兎に角、今はどうするべきか。

此方の情報が不足している以上、まだ警察には引き渡せない。

怪我の治療をしなければならぬが、病院に連れて行く訳にもいかない。

そうして考え込む俺に、助け船が入る。

「恭也、この子が目を覚ますまで家に置いてどうか？ 話も聞かないといけないし。」

「それは・・・やはり危険だ。」

「大丈夫よ。さっきみたいな事には、多分ならないと思う。」

勘だけど、などと戯けた調子で付け足した。

確かに、月村邸なら人目を憚る事もないし、治療も十分に出来る。
家も考えたが、その正体の可能性を考えれば得策とは言えない。
それが露見してしまえば、詳しい事情を話す事は避けられないのだ。

正直に言うところの申し出は有難い。

反面、彼女のボディガードとしてそれを認める訳にもいかない。
しかし、代替案は一向に思い浮かばなかった。

「・・・お姉ちゃん、もう大丈夫なんだよね？」

気が付けば、ずずかとファリンが表に出て来ていた。
不毛な逡巡にも関わらず、随分と気を取られていた様だ。

「ええ、未熟な高町君が軽く怪我をしただけよ。」

（・・・返す言葉も無いな。）

聊か気になる言い回しではあるが。

ともあれ、厳然たる事実なので反論する事が出来ない。
仕方無く睨み返すも、それを知ってか軽く流された。

「あ……恭也さん、腕……。」

「忍の言う通り、俺の油断だ。すずかが気にする必要は無い。」

ながれる
生の血を見るのに慣れていないからか。

或いは、人間である俺が怪我をした事に罪悪感があるのか。
ぶがししや
申し訳無さそうに俯くすずかに、再びその名を呼び掛ける。

はつとした様に顔を上げるが、やはり目を合わせようとはしなかった。

気不味そうに視線を逸らし

「……男の子？」

それが否応無く目に入った。

「
そういう訳で、暫くは騒がしくなるかもしれない。
それで、彼を何処に拘留するかなんだが……。」

すずかとファリンに今回の出来事を伝える。
先の懸念は伏せて、口にするのは淡々とした事実のみ。
確りしているが、やはり根は子供なのだ。
不必要に危機感を煽る事も無い。

「・・・私も家で構わないと思います。元々、私達の問題ですから。」

（今回ばかりはそうとも言いきれないが・・・。）

しかし、それにただ頷き返す。

回収した黒と白をノエルに手渡し、倒れ伏した少年の顔を横目に窺った。

そこには安らかな寝顔ではなく、苦悶に歪む表情が覗いている。

ジクリと。

腕が痛む／心が揺れる

知らず、彼との決着を思い返していた。

頭を振ってその思考を追い遣る。

敵への気遣いなど、覚悟を鈍らせるだけで不要な物だ。

だが。

この少年には。

優しい言葉を掛けてくれる相手も。
かぞく

帰るべき故郷も無いのだと。

理由も無く、漠然と感じ取っていた。

だからか、それを送らねばならない気がしたのは。

（・・・見事な腕だったぞ。）

傷だらけの少年に。

心許りの讃辞を。

「ノエルは拘束出来る物を頼む。忍、何処に運べば良い？」

傍らに寄り、暗器の類を隠し持つていない事を確かめる。

そして、彼の体に極力負担を与えない様に抱え上げた。
軽い。本当に子供なのだ。

この左腕を除いては。

（次があるなら・・・殺し合いではない場で闘いたいな。）

そんな事を思いながら。朝靄の中、少年を運ぶ。

その直前、青年の背に遮られるまで。

すずかは茫然とした表情で、少年の顔をじっと見詰めていた。

S i d e o u t

再び此方に戻ってきたのはどれぐらい後の事か。

長い夢を見ていた気がする（見ていたのは刻まれた傷痕）

一瞬にも、永遠にも感じられた（記憶は一瞬、されど記録は無窮）

（・・・どこだ、ここ　。）

先刻出来なかった、状況確認の第一歩を。

奇しくもそれは何時か行ったのと同じ試行。

（　何も、思い出せない。）

有り体に言えば、記憶が無い。

“Who am I? Where am I?”

何とも馬鹿らしいフレーズだが、正しくそれが当て嵌る。

知識としての記憶には、特に欠落は無さそうだ。

何でもない風景とか、テレビに映った人間は思い出せるのに。

ただ、“自分”と言うモノが酷く曖昧だった。

“思い出せ。”

過ごした街並みや、話した友人の顔には靄が掛かっている。

歩んで来た道を、帰るべき家を、両親の顔さえ思い出せない。
おぼえている
後ろに有るのは、思い返すのも嫌になる先の苦行のみ。
ジユク

“忘れるな。”

けれど、もっと大切な何かを忘れている気がした。

それに胸は締め付けられ、さっきから耳鳴りが続いている。

「・・・目が覚めたみたいね。」

「　　っ、え？」

紫紺が揺れる。

そこに光るのは赤い双玉。

左脇に女の人が立っていた。

「あ、の・・・　「まずは質問に答えて。あなた、本当に人間？」
・・・え？」

思考が追い付かず、情けない声しか出せない。

俺は“ニンゲン”か？

それに似た何かではあると思う。
しかし

「・・・分かり、ません。」

それを聞かれたという事は、人間以外の可能性が有るという事ではないのか。

ならば、歩んだ過程も知らない様な自分の憶測で、嘘を語る訳には
いかない。

だから告げた、“何も思い出せない”と。

「・・・それ、本気？」

当然の疑問だと思う。

女の人は猜疑の目を此方に向ける。

俺だって同じ状況に立てば、簡単には信じられない。

「分かる範囲で良いから話して。」

「・・・む。」

聞いているのは一般常識の話じゃないだろう。

問題なのは、俺が“人間”^{ナニモノ}であるかの一点に尽きる。

とは言え、本当に何も思い出せないのだが。

それが本当だと分かって貰うにはどうすれば

「目が覚めた様だな。」

そう言つて、男の人が部屋に入つて来た。

他にも何人が続いて来たが、この人から目を逸らせない。

（ あっ、 ）

知らない筈の剣士の姿。

逆再生されたのは、とある映像。

その中で、俺はこの人を十度殺した。

だから、そんな言葉が漏れた。

「・・・ああ、良かった。」

繋がった。

現在が過去へと。

欠けていた訳じゃない。
そこで蓋をしていただけ。

あの時の戦い、さいごの最後で俺は気付いた。
自分が“何処で、何をしている”のかに。
頭に映ったのは剣士の最期。
俺はそれが厭で、受け入れられなくて。

夢中で剣を振り上げ、そのまま自分の胸へと

あの後、どうなったのかは分からない。
しかし、俺達は此処に居る。
それで十分だった。

（・・・もう、逃げる訳にはいかない。）

あの時、自分が弱かったから。
傷付くのが厭で、現実から目を背けたから。
訳も分からないまま、この人を斬ろうとした。

（・・・思い出せ。忘れるな。）

頭に幾度と無く響いたその言葉と共に、左腕を見遣った。
そこに在るのは紅い腕。そして、改めて受け入れた。
思い出した筈の過去を。
ココロにキザまれた
キオク

耳鳴りが続いている。

聞こえていたのは懇請の声。

瞳に赤が写された。

その端々に映るのは黒い影。

（ ああ、俺は・・・。）

溟^{うみ}の夢で刻まれた言葉、その意味に気付いた。

「・・・あの時、皆を見殺しにした。」

Side： すずか

あの男の子を客間に運んでから半日以上が過ぎ、時刻は夜の八時を迎えようとしている。

あの後暫くして一度目を覚ましたけど、話す間も無く意識を失ってしまった。

恭也さんの話だと、まだ子供の様なので鎮痛剤を控えたのが裏目に出てしまったらしい。

体中、特に左半身の損傷が酷く、戦闘によって更に悪化していると

の事だった。

それが限界を超えて肉体を行使した代償だとも。

何でも、体格どころか筋肉も普通の子供相応らしい。

左腕はそうじゃなかったけど、赤い布で強く封をされていた。

ノエルが観測した結果、紛れもなく“生身の大人の腕”という事は分かった。

捲いているからには何か意味があるものと考え、そのままにしているらしい。

「ふう……。」

今は恭也さんが遅れて夕食を取っている。

私もそれに同席してお茶を飲んでいた。

でも、頭に浮かぶのはあの男の子の事ばかり。
襲撃者にして、客間で眠る客人。

本当に苦しそうな顔をしていた。

それは、カラダが痛いんじゃないで。

ココロがイタイ時の表情。

理由なんて分からない。

けど、あの子は多分傷みを知ってる。

そして非日常ひじょうに身を置く存在。

きつと、私の事を受け入れて

（　　っ！！　）

頭を振ってそんな考えを振り払う。

こんな事を考えるのは良くない事だ。

あの子は、私達を狙う襲撃者かもしれない。
あの子は、お姉ちゃんの大切な人を傷つけた。

「・・・はあ。」

「すずかちゃん、さつきから溜息ばかり。
やっぱりあの子の事が気になるんですか？」

ずっと一緒に居るファリンには分かってしまうみたい。
その言葉には何だか含む物がある。

「すまない、すずか。話を聞くまでもう少し待ってくれ。」

「・・・いえ、そんな。」

恭也さんには本当に申し訳ない。

私の心が乱れるのは不安からじゃない。

むしろ、彼が現れた事を喜んでさえいる。

（私はあなたが思うほど良い子じゃないですよ。）

心の中でそれを謝っても、気持ち晴れる事は無い。
それはきつと、彼についての結論が出てから。

「お姉様から、あの子が目を覚ましたと。」

ファリンがノエルから受けた連絡を伝える。
恭也さんは食べ掛けの料理を置いて席を立つ。
そして、扉に手を掛けて私に目配せをした。

「あ……私も行きます！」

その意味を理解し、慌てて席を立つ。
そうして、前に行く背中を追った。

部屋に入ると、お姉ちゃんと男の子が此方を向く。

お姉ちゃんの目が赤い。“力”を使うと聞いてはいた。
心理操作、嘘を吐かせない為に。

今朝も恭也さんが危なくなつた時に使おうとはしたらしい。
距離が遠くて上手く効かなかつただけ。

「……ああ、良かった。」

私達に聞かせる為ではなく、自分に語り掛ける様に、そう小さく呟いた。

彼はただ真直ぐに、恭也さんの方を見ている。

それは決して上辺だけではなく、本当に身を案じての言葉だった。

なのに。

「……あの時、皆を見殺しにした。」

「え？」

漏れたのは、余りにも予想外の言葉。

聞きたかったのはそんな言葉じゃない

けど、その意味を理解出来なかった。

冷たい現実なんて知りたくもない

見殺しにした。

“コロした。”

誰が？

この子が。

誰を？

ミンナを。

何か言わないといけないのに、体が凍ってしまっていた。
口が動かない／頭が回らない
けれど、お姉ちゃんが私の気持ちを代弁してくれた。

「・・・どういう、意味？」

そして彼は語った。

終わりと、始まりを。
ツミッ
パッ

S i d e o u t

大きな火事があつた

家に戻ったきり出てこない両親を。

置き去りにして、そのまま逃げ出した。

助けを求める生者の声を。

無視して只々、炎の中を前へと進んだ。

結末は皆と同じ筈だった。

しかし自分は助けられた。

自分一人だけが救われた。

そして気付けば此処に居た。

ただ、それだけの話。

高い天井を見上げたまま、俺は話を続ける。

誰も、物音一つ立てる事は無い。

呼吸さえ忘れてしまったのではないか。

そう思える様な静寂の中、俺はただ話を続けた。

「・・・後悔、してる？」

それを終えた時、傍らに立つ女の人がそう問い掛ける。

ああ、もちろん出来る事なら助けたかった。

けど。

「いや、多分・・・何度繰り返しても、同じ結果だと思うから。」

自分ではどうしても助けられないと判っていたから。
だから、立ち止まる事はなかった。

自分も此処で死ぬんだと思っていたから。
だから、彼等に謝る事もなかった。

ただそれまでは、一秒でも長く生きようと。
それこそが、斬り捨てるしかなかった願いへの。
唯一の報いになるんだって信じたから。

「じゃあ、どうして・・・。」

否、そんなものは言い訳だ。

救われず、炎に焼かれた皆に同情してる
俺が助けられたのは偶然^{キセキ}だった。

それが一度きりなんだという事も分かったから。

見当違いだとも気付かずに、怒りが湧いた
おれ^{ひとり}しか助けられないあの男^{この}に。
^{ムカチなモノ}オレ^{シブン}なんかを助けたアイツに。

視界が霞む／ココロがイタむ

（後悔なんて・・・してるに決まってる。）

けれど、それ以上に。

それ以上に、この胸を深く抉るのは

タスケテと、俺に呼び掛ける が。

瓦礫の隙間から、伸ばされた が。

それさえ出来ず、向けられた が。

そのどれにも、応える事をしなかつた。

「どうして、あなたは・・・涙を流すの？」

「あ、」

そう。

何百という命を殺して。

ただ一人だけで助かった。

それが結果 。

だから、知らず涙した。

胸には慙悔も憐情も悲憤もあつたけれど。

“起きてしまった事は戻せない。”

彼らを救う事は、もう決して出来ないのだと。

その結末が、どうしようもなく哀しかったから。

「・・・ごめんなさい。」

「い、や。」

それは違つと。

言葉を返そうとするが、震える口では思う様に紡げなかった。それは、この場で最も罪深い者が口にする言葉

「ごめんなさい。」

だと言つのにその人は目を瞑り、繰り返し咎人に頭を下げる。再び開かれた瞳には青が覗いていた。

然れど。

“死者が甦る事は無い。”

俺が贖わなければならぬのは。

その相手は、もう何処にも生ない。

そうして行き場を失ったその言葉は、俺の心に重く押し掛かり。
この瞳からは止め処無く、熱い滴が溢れ続ける。

“忘れるな、胸に刻め。”

「　　っ、ああ。ならせめて、刻み付けよう。」

斬り捨てた願いを。
認めてしまった彼らの死を。

“何時かは薄れゆく記憶だとしても。”

（そして・・・この身の咎を。）

「　　決して、忘れないように。」

さてEP3でした。

忍は凜、すずかは桜のポジが近い感じでしょうか。

リリなの忍がもはや別人過ぎて・・・とらハで行きます。

士郎には原作と違い、大火災を確り思い出してもらいました。

しかし、こんな状態でまともに生きていけるのかとも思いますが、まあ何とかなると思う事で一つお願いします。

予定以上に長引いて、結局場面は進まず。

「多分皆も出る」と予告していたのに、申し訳ない。

VS恭也の結末描写とかを流れる的に後に回す事に決めまし、大火災の回想は過多になると夢夢夢で続いているから面白くないと考え、可能な限り削りました。それでもこれでは・・・指摘を受けたばかりだというのに中々この性分は治りません。

Side： 忍

カチッ カチッ カチッ

只々、振り子は揺れる。
等しく刻まれている筈のその時間は。
瞬く間に過ぎ去り、同時に重く押し掛かる。

食堂の空気は凍っていた。
折角入れた紅茶は冷め切っている。
恭也が食事を再開する事も無い。
ただ、泣いてしまいそうだった。
何かしていなければ、心を抑えられなかった。

“あなたも状況を整理して。後でもう一度話しましょう。”

彼にあれを語らせてしまった事を詫びた。
況して、それが彼の意思を無視した行為であった事を。
その後は、そう伝えるのが限界だった。
結論を先延ばしにする事しか出来なかった。
説明諸々はノエルに任せて、私達は部屋を後にした。

彼の症状は一見すると“全生活史健忘”のそれだ。

脳が精神を保全する為に記憶を封じるケースは間々ある。けれど、封をした筈なのに覚えていて、その矛盾。

人をヒトたらしめる物は何か。

“魂”なんてオカルトな・・・私が言っても説得力はないけど。そんなモノより重要なのは、他でもない“記憶”だ。

一個人として自己を定義し、されるにはそれが必要となる。

ならば“記憶を失う”という事は。

少なくとも、それ以前の自分にとっては。

文字通り“死”を意味すると言えるだろう。

これは推測だけれど、彼は自身に罰を与えたのではないか。

“身命の優先”という刑罪に問えないその罪に対して。

“シフンをコロス記憶を消す”という重い罰を。

加えて、生まれながらにココロが砕かれているのだ。

始まりも同じくその場所、死者の海だったから。

（・・・いいえ、それも含めての“罰”なのね。）

確かに、その言葉の全てを鵜呑みには出来ない。

左腕は切り落とされた後には付いていたと。

意識を失い、気付いた時には家に居たと言っていた。

腕の移植は記録の上では存在するけれど、それを何処で施したのか。意識の戻らない彼を、一体誰が、何の為に此処に運んで来たのか。

彼の話には時間的、空間的な空白が多い。

そもそも、致命的な矛盾も抱えている　　大火事そのものだ。

街一つを飲み込む様なものがあれば、即時に相応の報道が為されるはずだ。

けれど現に今、或いは過去を振り返ってみても、そんな物は何処にも無い。

至近距離で力を行使していたのだから、嘘を言っていたとは考え難い。

強烈な記憶と、事実^{カラダ}に符合する概念^{イメージ}のみで繋ぎ合せているのか。

全てが与えられた記憶である可能性だつて十分に考えられる。

クローンなどと言った遺伝子操作に長け、その手の事を平気でやっている組織があると聞いた事がある。

しかし、それだけでは説明が付かない事もある。

卓越した戦闘技術を有しながら、左腕を除く肉体は正しく子供のそれだった。

現に戦闘後、手足の筋肉が断裂し、起きた時は痛みにも苦しんでもいた。

二度目は何ともない様子だったので、それだけとは思えないけれど。何にせよ、兵器としては余りに未完成で不安定。

（　　それに。）

如何しようも無く、尊く感じたのだ。

彼が流したあの涙を。

口にしたあの“誓い”を。

それを、決して偽物とは言いたくなかった。

（甘い・・・かな。）

ゴーン ゴーン

時計の音が九時を告げる。

あれから早一時間、これ以上先延ばしには出来ない。

確かにこれは、内側に潜り込む為の罠なのかもしれない。

私達とは関わりの無い事に踏み入ろうとしているのかもしれない。

けど。

「恭也・・・あの子、私が引き取るわ。」

彼を見捨てたくなかった。

助かったのは偶然なのに。

決して自分を許さないだろう彼を。

罪と言えないモノの為に。

あんなにも自分を傷付ける彼を。

「忍・・・。」

「危険があるかもしれないって事は分かってる。

それでも、可能性の話であの子を見捨てたくはないの。」

そう、まだ可能性なのだ。

けれど、もしここで放り出してしまったなら。

彼が救われる事は決して無い、これは決定事項。

自ら救いを求めないのなら。
此方がその心を救ってあげればいい。

「だから、私は……。」

その手を取りたい。

私を支えてくれる人達がいる様に。

あの子の支えになってあげたい。

すずかはそれに、黙って微笑んでくれていた。

（もう一度、彼の前に……。）

S i d e o u t

E p i s o d e 0 4 ・ 三月尽夜 〈 C r e s c e n t P l e
d g e 〉

「……後で、もう一度話しましょう。」

そう言つて部屋には二人だけが残された。
妙な格好　所謂メイド服　にショートカットの女性。
俺を縛っていたベルトやらを外してくれている。
血が通つたからか、全身に痛みが軽くぶり返す。

「暫くは余り動かない様にして下さい。全身がボロボロですから。」

そう言われて、手足が動くかを確かめた。
左腕は鉄塊だ。肩から先が動く事は無い。
けれど、他は暫く休めば何とかかなりそうだった。

ふと、拘束具を外す手が止まる。

「失礼ですが、火傷、及び裂傷の痛みはありますか。」

「いや、何とも……。」

そして、可笑しな事を　否、奇怪しいのは俺の方。
記憶の中でも、俺は酷い怪我を負っていた筈だ。
それが今は無い。あるのは筋肉痛の様な物だけ。
思えば、此処で目を覚ました時の激痛も嘘の様に引いていた。

（……どうなってるんだ？）

「状況確認の為に、知りたい事がありましたらお尋ね下さい。」

暫くして、考え込んだ様に止まっていた手が再び動き出す。
それが終わると、寝転がると見えなくなる位置まで下がって行った。
尋ねてくれと言つて貰えるのは有り難いのだが。

今は、心の中を整理するだけで手一杯だった

目を瞑れば、其処に浮かぶのは世界の終わり。
全てが燃え尽き、全てが死んだ。

「　　。　　」

俺に呼び掛ける声を、伸ばした手を、向けた瞳を。
この五感が捉えた、その二つ一つを。
記憶に残っている限り、そのスベテをココロに刻み込む。

これが罪、どうしようもなく大きな。
贖う相手を欠いた、此の身の原罪。
行く当てを無くし、此の胸を決る想い。
それが、俺にとって唯一の追想。

だから、気付かなかった。

いつの間にか、見ている記憶が。
知らない誰かの記録に拘り替わっている事に。
ジゴクよりも尚先にある、大焦熱地獄たいしうにふかいやみを見るまでは。

「　　あ、　　」

見ていた筈なのは理不尽な死。
俺が殺してしまった隣人たち。
あの時、あの場で、俺自身が犯した罪。

(・・・だから、)

しかし、炎の海を抜けた今。
現に見ているのは無慈悲な死。
目の前に居るのは生きた人間。
それに、俺が手を下す瞬間。

(・・・^{シラナイ}他人の罪までは、)

映像は酷く断片的。

しかし、その瞬間だけは余す事無く
彼らの罪は映らない。

其処に明確な罪^{じゅつ}など^つ在りはしなかった
写るのは唯々視界を染める上げる赤。

如何に効率良く殺すかのみを磨き上げた

(・・・耐えられない。)

二本の鉄が命を嚼^くる。

この目を閉じてても、光景は変わらず眼に写し出される。
両の手は疾うに血塗れ。

二刀の重みを。人を斬る手応えを。
殺して、殺シテ、コロシツクシタ。
此の身は確かに、覚^さえて^いる。

「　　つ、　　あつ。」

見たくないから、目を閉じた（また、逃げていた）
それではいつまでも抜け出せないのが道理というもの。
瞼を開ければ、そこに映ったのは何時か見た天井だった。
思わず跳ね起き、両手を見遣る。

右手は“綺麗なまま”だった／左手は“真っ赤に染まって”いた
漸く現実に取り戻される／絶えず記憶を継承し続けている
見ていたのは知らない背中／アイツの記録を垣間見ている
然れど、その始まりは同じ風景。

だから、気付いた。

あの時のアイツが、そもそも誰だったのかに。
あの場所で死んで、同時に生まれた一体の人形。
姿形こそ異なるが、と全くの同一人物の存在に。

「　　ああ。オマエは・・・“俺”だ。」

ならば、此の身も同じ路を逝くのか。
屍の山、その先に^ま未^まつ刃の絞首台へと。
延々と／奄々と

この手で　し続けるのか。

違いはこの胸の、虚ろに在るべきモノ。
アイツの中に入り込んだのは“正義の味方”という理想。

（俺には……。）

“ 踏み躪った想いに報いるだけの ”

記憶を無くした（うまれたばかりの）俺では、支払う対価を持ち得ない。

ただ、この命を除いては

俺には、この先辿るべき道が分からない。

抑、道など続いてはいない

“ コタエ 理想で以って示さねばならない。 ”

何の道標も無く、この暗闇を進む事など出来ない。
しかし、目の前には一つの術が示されている。

“ コタエを示せ。 ”

この身は、決して無価値などではなかったのだと。
ジブン そうミナナを納得させられるだけの。
ギソウできる

“ 理想を貫け。 ”

（……ああ、お前の言いたい事も分かるけど。）

過去を変える事は出来ないから。
償うべきが在るとすれば未来だと。

想いは胸に、それでも前へと進んで行く事こそが。
置き去りにした者達への“鎮魂”に他ならないのだと。

（じゃあ、俺には・・・一体何が　　）

“何が在るのだろう”と、その疑問に到る直前。
閉ざされていた、扉が開いた。

S i d e :　　すずか

さっきまであんなにも昂っていた心に、今は水がさしている。
結論に達したのは、飽く迄私達だけの話。
お互い、まだ確かな事は何も分かってない

（あ・・・名前、まだ聞いてない。）

そんな、一番大切な事も。

一歩、一歩と彼の眠る部屋へ近付く度に。
私の心には朦々と暗雲が立ち込める。

“もしかしたら、断られるかもしれない”と。

知らない家の養子になるなんて、普通は考えられない。

遠縁の親戚は少なからずいるものだし、そうでなくても即答出来る問題じゃない。

そんな当たり前の事が、今更ながら頭に浮かんで来ていた。

「・・・入るわよ。」

それは誰に向けられた言葉だったのだろう。

厚い壁越しに、声の届かぬ少年が。

傍らで、不安に震える私にか。

それとも自身に、最後の覚悟を決める為か。

扉に手を掛けたお姉ちゃんの顔を見上げる。

（ え？ ）

其処には色々な感情が覗いていた。

不安や、恐れもあったと思う。

けれど、その表情を見て愕然とした。

一番大きかったのは、紛れも無く確信だったから。

それは。

彼の話の意味を、深くは理解出来ていなかったから。

私はそんな事にも気付いていなかった。

彼には“当たり前前の選択肢”が用意されていないんだと。

“彼という存在の意味”も知らずに、扉を潜った。

中で待っていたのは、ゼンマイの切れた人形だった。
身を起こし、右の掌を僅かに上げ、眼は左手で止まっている。
その動作に／彼の疑問に
続きがあつたのかは分からないけど。

そんな不自然な状態で、時は止まってしまった。

「少しは落ち着いた？」

ギリギリと、音が聞こえる様な遅鈍^{……}さで頭が回る。

最後の一巻きを振り絞る様に／頭の歯車が錆びついてしまった様に
彼の顔は／その思考は
漸く此方を向いた。

「これから、行く当てはある？」

「いえ……警察か、そういう所の世話になるんだと思います。」

「そう……なら、言わせて貰^{もら}うけど。」

この“世界”は、あなたの見て^{しつて}いる“世界”じゃないわよ。」

「……………えっ？」

その言葉の意味が理解できない。私も、彼も。

ただ、お姉ちゃんと恭也さんが悲し気な目を向けている。
そして語った。今、彼が直面している現実を。

この世の何処にも無い風景を見て泣いている事を。

「君の戸籍を辿っても、出て来る事は無いだろう。
記憶が与えられたものなのか、或いは……。」

恭也さんがその後を引き取り、けれど言葉尻を濁す。
過去か、未来か、別世界とか。そんな非現実的な言葉が続くんだと。
此処まで詳しく説明されれば、自ずとそれが分かる。

彼はベッドの縁に腰掛け直し、此方を向いたまま黙って聞いていた。
そして、お姉ちゃんはその選択肢を口にした。

「あなたを家で引き取りたいの。」

「・・・なっ、」

その顔には疑問が浮かんでいた。

普通なら彼の選択は正しい。

或いはこの国なら、今の彼でも保護してくれるかもしれない。

けど、その先には一体何が在るのだろうか。

言ってしまうば、彼は“異常性”の塊だ。

左肩に付いた大人の腕を振るえる事が。

在り得ない地獄を正確に記憶している事が。

そんなバケモノに平穏な未来は待っているのか？

しかし。

少年が、首を縦に振る事は無かった。

「俺に、そんな資格は無い。」

口にしたのは、遠回しに拒絶する様な言葉。けれど、彼の顔に浮かんだ片笑みが。触れれば壊れてしまう硝子の様な貌が。そこに決して偽りは無いのだと告げていた。

心から零れた言葉だと／溢れたのは一滴

「この手は血に塗れている。きっと・・・迷惑を掛ける。」

それも一つの道だと思う。私達だってそうだから。

近付き過ぎれば火傷する、他人は遠ざける事でしか守れない。

“その正体”^{ほんしよつ}を偽る事で、平穩の世界に生きている。そして今も、胸中には暗い闇を秘したまま。

それでも彼を迎えようと／この足は彼の方へと

「あ。」

気付けば、彼の前に屈み込んでいた。

両手はその引き手に添えられ、眼からは涙が溢れる。

顔を上げれば、目の前には瞳を丸くしたその貌が。

だから、伝えないと。

「・・・そんなこと、ないよ。」

誰が悪いんじゃない。だから、もう自分を許してあげて。

その火事で亡くなつた人達を思うなら。
あなたも・・・ちゃんと、幸せにならないと。」

彼の歩んだ道に、どれ程の報いが必要なのか。
そもそも、それは罪と呼べるモノなのか。

子供の私では、それに答えてあげる事は出来ないけど。

もう十分に、ココロをイタめた事だけは分かるから。

あなただって、地獄が生んだ被害者なんだから。
幸せにならなければ、その誓いも嘘になる。

「だから、迷惑なんて思わない。
あなたを・・・受け入れてあげたい。」

なら、今度こそ大事な事を忘れない様に。

「名前、まだ聞いてなかったよね・・・私は、月村すずか。あなたは？」

そうしてこの日、家族が増える。
不器用で、傷だらけの。
ちゃんと泣ける癖に、強がりな。

そんな、ただの一人の男の子が。

今度は俺が聞き手だった。語られたのは現状への推測。
此処は俺の知らない“世界”なんだと、初めこそ驚きはした。
けれど、それは現実なんだと。存外にすんなりと受け入れる事が出
来た。

そう、既に聞いていた筈の事実。
彼方の世界に飛ばす、とアイツは言った。

それが比喻でも何でもなく、文字通り別世界だったという事だろう。
しかし、次に掛けられたのは余りに予想外の言葉だった。

「あなたを家で引き取りたいの。」

「・・・なっ、」

耳を疑った。つまらない幻聴ではないかと。

しかし、目に映るのは此方を見据える真摯な瞳。
正直に言うつ、嬉しかったんだ。

俺の罪を知って尚、受け入れると言ってくれたのが。

（ ても。 ）

視線を左腕に落とす。

其処に在るのは自分の意志では動かせぬ、血に塗れた赤い凶器。コイツが何を思い、何を為そうとしているのかは分からないけれど、もしも、この人達がその邪魔をする様な事があれば。

俺はきつと、アイツの様に してしまふ そんな予感が有ったから。

「俺に、そんな資格は無い。」

それを拒絶するしかなかった。

この人達を、決して傷付けたくはなかった。

「左手は血に塗れている。きつと・・・迷惑を掛ける。」

切り落とすという選択肢は存在しない。

これは罰。此の身を、裡を犯す毒を飲み下す事が。

けれど、させるつもりも無い。

そんな事になれば、迷わずこの命を捨てるだろう。

だが、それでは駄目だ。此の身に死を選ぶ自由は未だ無い。

其処に辿り着くには、如何すれば良いのか分からないけれど、何時の日か、報いる事が出来たと思える時までには生きないと。

況して此の身は、その様な を受けて良い存在ではない

「・・・あ。」

すぐ傍で声が漏れた。

気付けば、一人の少女が俺の右手を取っている。

そして、向けられた瞳からは涙が零れていた。

心に響いた／＼ココロに問われる

「・・・そんなこと、ないよ。」

（・・・ああ。）

裏切られ、欺かれ、それでも進んだ其の末路。
無数の刃に体を穿たれ、終着駅は絞首台。

“ 本物の正義の味方になってみせろ。”

そうして、その果てに辿り着いて尚も。
口にした理想は“ 正義の味方” だった。

「誰が悪いんじゃない。だから、もう自分を許してあげて。」

（・・・自分の為に泣いてくれる人がいるというのは。）

アイツは俺と同じ思いを抱えたまま進んだ。

それが一つの思い違い

この哀しみを背負ったまま。

それはヒトには重過ぎる咎

立ち止まる事は無かったんだ。

けれど、それに気付けなかった

「その火事で亡くなった人達を思うなら。
あなたも・・・ちゃんと、幸せにならないと。」

(・・・こんなにも“温かい”。)

なら、俺も進まないと。

理想は違えど、歩むは同じ終の道
たとえその先が、同じ結末だとしても。

いずれ傷付き、その足も止まる
待っているのが、破滅なんだとしても。

そうして立ち止まったその時に
何時か、胸を張れるコタエに辿り着けるまでは。

初めて過ち^{まちがひ}に気付くだろう

「・・・だから、迷惑なんて思わない。
あなたを・・・受け入れてあげたい。」

そうして、この小さな女の子は。
涙しながら微笑んだ 俺を“許す”と。

『 せめて 世界 、 涙 欲し
くな 』

流れ込んで来たのは後悔、それとも哀しみか。
刻まれた想いは風化し、言葉もとぎれ途切れ。
ただ、アイツは真っ直ぐに進んだ道の中。

自分……を護ることだけで精一杯だった。
本当に守りたかったモノは

決してその手には残らなかった

（それは、一体　　）

「名前、まだ聞いてなかったよね……私は、月村すずか。あなたは？」

分らない。コタエも出ないけれど。

もう少し、一人で前に進める様になる迄は。

この優しい救い手に、甘えていたいと。

この温もりを、感じていたいと思ったから。

（許せるのか。俺は、オレを“赦せるのか”。）

許す事は出来ない。

けれど、何時か赦せるように。

だから。

名乗ったのはアイツと同じ一つの“銘”いましめ。

「　しろう……エミヤ、シロウ。」

俺が生まれたあの場所を。

俺が認めたあの人達の死を。

たとえ何処に居ようとも。

此の身の咎を、決して忘れぬように。

「誓って欲しいの。何だっていい、あなたの言葉で。」

“然るに、空っぽのお前は、生の先^{その}に一体何を見る？”

「　　っ、ああ・・・きつと。」

再びの問い掛け。

解答^{コタエ}はいくつも受け継いでいるけれど。

今もこの問い掛けには応えられない。

それは裡より生じた物ではないから。

（なら・・・お前の代わりに、俺が　　）

だから、理想^{コタエ}を探さなければ。

空っぽの容器^{オレ}には入っていないモノなんだから。

「味方^{オレ}で居られる。俺が、オレである限り　　」

“　　今は、前を向いて。”

其れが、伽藍堂の人形が出したコタエ。

応えと呼べるものではなかった。

何が正しいのか、何をすべきなのかも定まらない。

それでも、答えを見付ける為に前へと歩み続けると。

（ 何時か、胸を張れる答えに。きっと・・・辿り着けるから。

）

士郎の口調は当初、理路整然とした敬語だったのですが、独断と偏見で奇怪しい、且つ似合わぬと断じ、平に直す事になりました。実際、敬語を使うのは落ち着いてる時だけで、丁度良いかと思ったり。

その分、思考の方をちぐはぐのバラバラにしてみました。読み難いと思つたなら、左と右を分けて読むでは如何でしょうか。

さて、今度こそ確定したのがアリサ、次話から。フェイトは本編入ってからですね。

はやても近い内に一度は出ます。

クロノは・・・え？野郎は聞いてない？

Side：　　すずか

テーブルに並んでいるのはイチゴのショートケーキとグラスに注がれたコーヒ―。

清和の陽気が心地好い昼下がり。私は今、喫茶“翠屋”でゆっくりさせて貰っています。

前に座るのは、なのはちゃんとアリサちゃんの二人。

昨日はゴタゴタしていたから、今朝起きるまで約束が有るのをすっかり忘れていた。

出発前、家に残ると言ったんだけど

『難しい話は私達に任せて、約束なんだからちゃんと行きなさい。』

士郎君とはもう少しゆっくり話をしたかった。

けれど、そう言われてしまったら言い返せない。

昨日のあの後も、朝まで話を聞いていたらしい。

実際に引き取るとなると色々と問題が有るんだと思う。

それで、私に余計な気を使わせたくないのかもしれない。

（ずっと寝てばかりじゃ退屈だろうし、ケーキでも買って帰ってあげよう。）

うん、それは中々良い考え。

どうせならちゃんと好みも聞いておけば良かった。
不意に笑みが零れる。

「・・・すずかちゃん？」

「・・・はわっ!？」

「何だか嬉しそうだね。いい事あったの？」

二人と話していたのに、気付くと自分の世界に入ってしまった。
なのはちゃんがニコニコしながら疑問の言葉を向けてくる。

「確かにそうね、何となく上の空だし。」

「そ、そうかな？」

アリサちゃんは俯いて腕を組み、何か唸っている。

私はこの二人にも隠し事が出来ない。

一年生の頃、喧嘩して、仲直りして。それからずっと一緒に居る二人。

お互いの気持ちは何となく分かるし、そもそも嘘を吐いたりしたくも無かったから。

一番大きな“ミニ負い目”を除いて。

「あんたのその様子、さては・・・男ね。」

「・・・なっ、なな、なん、」

「冗談だけど・・・って、図星？」

そう言ってくれるのが少し遅かった。

自分でも分かるぐらいに顔が熱い。多分もう首から上は真っ赤にな
ってるだろう。

なのはちゃんの問い掛けだけでもヒヤヒヤしたのに、アリサちゃん
の言葉は何とも直球で、ど真ん中なものだった。

確かに士郎君は男の子だけど、別にそういう相手じゃ・・・

「……しろくん??」

「……あ。」

全く、今日は本当にどうかしている。

まだ秘密にしておきなさい、と言われていたのに簡単に気付かれて
しまった。

慌てて口を押さえたけど、何の意味が有るだろうか。

アリサちゃんが何とも言えない笑顔を浮かべたままこっちに歩み寄
ってくる。

頬を冷や汗が伝った。

「ふ、ふふふ……。」

「なのはちゃんっ!？」

「にやはは……。」

助けを求めるも、薄い笑みを浮かべたまま目を逸らされてしまう。
カウンターの方に目を向けると、桃子さんが微笑まし気に眺めてい
た。

見てないで助けて下さいと言いたかったけど。

すぐさま肩を掴まれ、空いている角の席へと押し込まれた。

「さあ、洗い浚い吐いて貰うわよ。」

「ううう……。」

そうして結局話してしまった。

夜明けと共に現れた、新しい一人の家族の事を

詳しい事情は伏せたまま。

そもそも、私だってまだよく分かってない。

伝えるのは差し障りの無い範囲で。昨日の朝に来た事、実家に帰れない事情がある事、怪我をしていて今は休んでいる事

私の話を二人とも興味津々といった様子で聞いていた。

それでか、となのはちゃんは一人納得している。

多分恭也さんが家に泊まった事についてだろう。

「なるほどね。それであんたは、そいつが気になると。」

「だからっ！ そんなんじゃないってば！」

「あははは……。まあ、冗談は置いといて。そいつ、聖祥せいじょうに通うの？」

もう、と不服の声を漏らしながら思考を切り替える。

“学校はどうするのか”

見た目少し年上なぐらい。小学生か、中学生かもしれない。

どちらにしても義務教育は受けなければならない。

けれど、あの左腕の事を正直に明かす事は出来ないし、それではお姉ちゃんが家で引き取ると言った意味が無い。

「どうなんだろう。士郎君にも色々あるみたいだし、まだ分からないかな。」

「ふん。なら尚更、一回ちゃんと会ってみたいわね。」

「そうだね。」

もつともな意見。

私も時が来ればちゃんと紹介したいと思っている。

今は迷惑になるかもしれないし、今度家に来た時にでも会って貰おうと思っていたんだけど

「・・・今からお見舞いに行きましょう。」

「「ふえ？」」

状況はその時を待つてはくれない様です。

なのはちゃんと二人、呆けた音を漏らした。

怪我してる事は黙っておくべきだったかな、と今更ながらに振り返っているとアリサちゃんが声を上げた。

「鮫島っ！」

「はい、お嬢様。」

アリサちゃんの半歩後ろ、いつもの運転手さんが音も無く現れる。

突然の背中からの声に、なのはちゃんがビクリと肩を震わせた。

「見舞いの花を用意して。」

「畏まりました。」

そうして恭しく一礼すると、瞬きした後にはその姿は消えていた。それにしても、本当に何処から出てきたんだろう。

店の中には居なかったと思うけど・・・と、そんな事より。今は何時に無く強引なアリサちゃんを止めないと。

「で、でも。士郎君も休んでるんだし、迷惑になるかも・・・。」

「女の子が三人傍に居る方が元気になるわよ。」

「ううう・・・とにかく、お姉ちゃんに電話してみるから。断られたら諦めてね。」

そうして少女達は少年に会う。

それが良いモノか、それとも悪いモノだったのか。知るのはずと先の事だろう。

或いは、そんな日は来ないのかもしれない。

けれど、其処には確かに。

運命の曲がり角が在った

S i d e o u t

E p i s o d e 0 5 ・ 春に縊る夢 〈 B o y M e e t s G
i r l s 〉

チチチッ チチッ

鳥の囀りが耳に届く。

時計に目を向ければ時刻は昼過ぎ。

“此方”に着いてから、もう丸一日以上ベッドで寝ていた事になる。
開かれた窓からは穏やかな春風が流れ込んで来ていた。

視界に銀の長髪が流れる。

目の前には俺の手足をペタペタと触る一人の少女 と言うのは
失礼か。

医者が来ると聞いていた為、出会い頭にも怪訝な顔をしてしまった。

『言いたい事は分かりますけど、私は一応月村さんより年上ですよ。』

□

一瞬でもすずかちゃんが浮かんだ、などとは口が裂けても言えない。フィリス先生、恭也さんが念の為に呼んでくれた歴とした医師免許持ちだ。

どうやら触診が終わったのか、忍さんと話をしている。

「貼ってあった湿布は？」

「家に有った消炎鎮痛剤を、昨日は随分と痛がつてる様子だったんで。」

「そう・・・恭也君に聞いてた程酷くないし、まさか一日でここまで？」

ああ、確かに。昨日の起き掛けは地獄だった。

二度目に目を覚ました時には痛みが引いていたけれど。

それは治療をしてくれていたからなのだろうか。

そう考えるのが順当だが、原因は別である事も分かっていた。

（あの痛みと熱は、コイツの所為だからな・・・。）

そう、この左腕。

コイツから記憶を受け継ぐ際には痛みと熱を伴う。

それはカラダを造り変えられるイタミ

それはシンケイが焼き切れる程アツイ

（オマエは、俺に何を求めてるんだ・・・？）

コイツから送られて来る、行動に繋がる命令は嫌に衝動的なのだ。

何かを思い出す時も、剣を振るう時も、果てにはヒトを殺す時まで。

そう死してココロを無視しなければ、ジブンがリソウに押し潰

されそうだった
今は黙ったまま　の様に感じる　動かないソレに目を向けてい
ると、今度は此方に声が掛けられた。

「折角の良い天気ですけど、怪我が治るまではもう暫く休んでい
てくださいね。」

「あ、はい・・・えっと、参考までに何日ぐらい？」

「一番酷いのは右手と左足の筋断裂・・・所謂肉離れですから、取
り敢えず二、三日はこのまま安静に。」

（まあ、仕方無いか・・・。）

お大事に、と決まり口上を残し部屋を出ていく。

忍さんも見送りの為、その後に続いて行った。

正直今でも動ける気はするが、薬が効いている物と思い込もう。

折角の好意を無碍に扱うのは良くない事だ。

そうして一人茫然と残された俺は、今朝に到る迄の事を思い返して
いた。

昨晩はお互いの自己紹介　と言っても名前を告げ合っただけだが

を済ました後、すずかちゃんとフアリンさんは部屋を後にした。

残りの面々で状況の確認、主に俺の記憶に関わる事なのだが。

それは個人情報から一般常識に到るまで多岐に渡り、お互い何を調
べれば良いのか分からずに手間取った為、気付けば日が昇っていた
という次第だ。

年月日が同じであれば、一般常識にそう差異は無かった。

歴史や世界情勢など、記憶に有る範囲では殆ど変わらない。

地名に関しても、国外から日本の都道府県名まで大凡一致する。

けれど、俺が居た筈の“冬木市”は過去80年の記録の中には存在しない。

同様にこの近辺に在るのは、海鳴、遠見、矢後、羽平・・・どれも聞いた事が無い。

或いは、活動圏外に在ったとも限らないが。

両者に共通して言えるのは、巨視的には概ね似通っているが、微視的になれば喰い違いが出て来るという事だ。多世界解釈、バタフライ効果、カオス理論。平行世界という考え方は様々な推論を内包している。

強いて言うならば“不確かさ”の概念が適当であろうか。まずある段階に於いて、全く同じもう一つの世界が在ったと仮定する。そして、其処に属する全ての人間が、平均して10%の揺らぎを持つものとしてしよう。

この時、一人の真偽決定は当然10%の確率で異なる物となる。もしそれが5人で行う多数決であればどうか・・・結果が偽となる確率は何と1%を下回る。つまり、意思決定の母集団が大きい程不確かさは小さくなるという訳だ。

しかし、それだけではない。例えばここで、一郎、二郎と名付けられる筈だった兄弟が居たとしてしよう。その時に一郎が先に二郎と名付けられてしまえばどうなるか。無論、これは酷く極端な例であって、二郎である必要は無いし、三郎でも太郎でも良い。端的に言うに関連性だ。

一に対して二が付けられるのであって、前提が無くなればその

後が続くべくもない。この世で何の意味も理由も無い、関連を持たないモノは殆ど存在しない。有るとするならば、それこそが全ての前提であると言える。

さて、では上の多数決の例に当て嵌める。5つの選択箱の内、一つの偽が確定していれば、結果は6倍以上の確率で偽となる。つまり、一つの綻びは波及していくのだ。丁度、水面に小石を落とした波紋と同じ様に。近い程波は高く、時間の経過と共に遠く、大きく広がっていく。たとえ始まりの幹が同じであっても、時々刻々と枝葉は伸びていくのだ・・・最早、これ以上は語るに及ばないだろう。

数百年、或いはもつと前か。枝分かれしたのが何時なのかを知る術は無いが、それから形作られてきた二つの道。少年は葉先の一滴、落ちて来たのが此の“世界”だったのだ。

閑話休題

何より驚かされたのが自分自身についてだった。

その時まででは考える事も無ければ、気付きようが無かった訳だが。知識量に関しては、大の男のそれに匹敵する。

言うなれば、この左腕が外部記憶媒体その物なのだ。

流れ込んだその膨大な量の情報は俺の頭という小さなメモリーには入り切らなかったが、断片的には残っている。

例えば外国語、偶然書物の端に記されていたのを見付けた際に、その意味を大凡取る事が出来た。

飽く迄知識だけである為、発音や聴解には若干の難が有るものの、忍さん達を驚かせるには十分な要素だった。

取り敢えず分かったのは英語とドイツ語。

或いは他にも有ったのかもしれないが、今はまだそれを整理し切れていない。

事実、フィンランド語に加え、欧州系、中国語やヒンディー語といった億単位の言語は概ね習得しているという化物振りを後に知る事になる。

対して、俺から伝えるべき事はそう多くなかった。

あの火事が現実存在しない以上、重要なのはこの左腕ぐらいなもの。

この腕は俺にとって猛毒であり、覚悟が出来るまでこの赤い布を捲いておかねばならないと、アイツに聞いた儘の事を伝えはした。

正直な所、これが何処まで有効なのか定かではない。

或いは心理的な、呪いの様な物なのだろうか。

助けて貰った段階で、これを取られなかった事は僥倖であったと言える。

普通ならば取った所で何ともないと考えるのだろうか、抑々此の身の状況が状況なだけに強ち無視する訳にもいかない。

アイツが口にした“覚悟”の意味も。

此の腕が如何程の毒であるのかも。

俺には何も分からないけれど。

否。封を切ればどうなるか、それは左腕に刻まれた経験の一つ。其れは既に頭蓋の内に。今は只、蓋を被せ見えない様にしているだけ

）・・・まあ今は、命の恩人の言ってた事を聞いておくしかないか。

そんな風に思いながら／知らずそう思わされて
ただ伽藍堂の主人が　理想を直走る路へと
戻るのを待つのであった。

S i d e : フイリス

「お忙しい所をありがとうございました。」

「いいんですよ、彼が患者であるのは確かですから。」

診察結果自体は概ね良好・・・聞いていたよりは、と付くけれど。

恭也君の見立てでは“暫くは動けない、痛みで気絶した”との事だったけれど。

実際に見てみれば、無茶な運動が原因で起こったにしては軽症。

況してや、気絶する程酷い様には思えなかった。

それについては怪我と別に、心因性の物を考えた方が良くかもしれない。

恭也君から電話を貰ったのは今朝の事。

聞かれたのは彼と似た症例が無いかどうか。

医学的な知見から言って、彼の症状は“解離性同一性障害”つまり二重人格の様に思える。

けれど、戦っていた間の事もはっきり自分だと認識出来ると言う。

加えて、違う思考形態を持つ別人格と言っても飽く迄同じ肉体。

急に足が速くなったり、腕力が上がったという事は通常起こり得ない。

如何しても理屈付けて考えるなら、全てが演技で肉体的には未完成な兵器を投入したと・・・無理が有り過ぎる。

(・・・やっぱり、あの左腕？)

脳以外に記憶や経験、延いては人格が宿するという意見も存在はするが飽く迄少数派。

況して腕が体を操るとなると、最早超自然的オカルトと言った方が良い。

実際に目で見て確かめたかったので、こうして診察の名目でお邪魔した。

けれど、肩まで赤い布で覆われていて施術部はその下に在る。

手の先半分は浅黒い地肌が覗いていたものの、これでは満足な処置が出来ない。

懣出来たとしても、何をすべきかは分からなかっただろうが。

本人がまだ取れないと言って、私達もどうすべきか分からない以上は現状を維持するしかない。

分かったのは腕が問題無く繋がっていると言う事だけ。

血管はもちろん、筋肉や骨にも異常は見受けられなかった。

出会った時は動いたそうだけれど、現に今は動かないので経過を待つしかない。

問題にならない内に切り落とす、という選択肢も月村さんには提案

した。

元より、知られるだけでも大問題になりかねない事実。

現代の医療技術ならば、安全に処置する事自体は可能だろう。

けれど、あの子はまだ子供。加えて生身の腕を再度移植する事は出来ない。

引き取る月村さん達が構わないと言っているのだし、正常に機能する様ならば、将来的な負担を考えても義手に換える必要性は無い。超自然的な事象も一応は考慮した上で、問題が起きるまで特に手を打つ積りは無いとの答えを聞いている。

（それが賢明、かな。）

電話で聞かされていた内容は、昔を思い返さずにはいられない物だった。

他人の腕に、有り得ない記憶。極め付けにそれがヒトを見殺しにする物であると言う。

出来る事ならば幸福に、平穏に暮らして欲しいと思うのはいけない事だろうか。

少なくとも恭也君達は内々に処理する為に手を回してくれている。

彼の言葉が何処まで真実であるのかを測る事は出来ない。

けれど事実だとすれば、それを子供に背負えと言うのは些か酷ではないか。

（　　いいえ、そうじゃない。）

背負おうとしているのは彼自身。

誰に強制されるでもなく、自ら塗炭の中に踏み入ろうとしている。それが分かるからこそ、皆は手を尽くすのだろう。

（けれど、彼の罪は　　）

「あ、と・・・もしもし、どうしたの。」

月村さんの電話に思考を遮られた。

取り敢えず足を止め、それが終わるのを待つ。

何やら真剣な顔で一頻り話を聞いていたかと思うと、戯けた調子で言葉を返した。

「大丈夫よ、二人にも来てもらって。」

土郎君だつて女の子が居てくれる方が喜ぶんじゃない？

ノエルに行つてもらうから・・・20分ぐらい、翠屋で待つてて。」

「

そうして一気に捲し立てると電話を切った。

随分と碎けた様子、二人以上であの子に会わせる女の子。

恭也君なら真面目な話になるだろうから違う。

確か妹さんがなのはちゃんと同級生だったような・・・。

「すみませんでした、妹がなのはちゃん達に知られちゃったみたいで・・・。」

「・・・大変ですね。」

「けど、土郎君には必要な事だと思います、ココロは自分じゃ癒せませんから。」

「・・・って、カウンセラーもやってるんですね。」

まあ、そうなのだけれど。その意見は私も賛成だ。

心に傷を負った人は、自分の内に閉じ籠ってしまふ事が多い。

聞いた限り、彼の場合は自身を罰するという行為を知った上で続けている。

そんな相手を理屈で説得する事は困難、感情に訴えるにも一朝一夕には行かない。

私も嘗ては暖かい家族と、長い時を掛けて漸く立ち上がる事が出来た。

そういう意味では歳の近い相手との日常に触れ合うのは効果的だと思う。

外に出ると、ノエルさんが車のドアを開いて待っていた。

結局、殆ど役に立つ様な事は出来なかった。

体は直に癒える、左腕に関しても私がしてあげられる事は無い。

けれど、心に落とした暗い影は

「それじゃあ、今日は帰りますね。何か有ったらまた連絡して下さい。」

その罪に対して罰を与えてしまふ事が一番簡単な解決策なのかもしれない。

けれど、本当にそれで良いのか。そうする資格が誰に有るのか。

医療に於いて“尊厳死”という言葉がある 所謂、安楽死の事だ。

“尊厳”とは何とも哲学的で捉えにくい概念ではあるけれど、それは何にも優る自己決定権と言い換えられる。

裁いてくれる筈の相手も、そもそも罪さえ存在しないこの世界で。

真実、彼を救す事が出来るのは、自身だけなのだから。
私達が与える罰は彼の想いを嘘にする物であって、正しく尊厳“が”
”死ぬ事になると言えるのではないか。

それは出口が有るのかも分からない迷路^{シゴク}。
きっとこれからも、苦しむ事になるだろう。

けれど、イタミから解放するだけが救いではないと思うから。

(何時か、迷った時には・・・その道を、照らしてあげられる。)

だから。

私は、私達は。

その選択肢を胸に仕舞った儘

S i d e o u t

カチッ カチッ カチッ

「 「 「 「 。 「 「 「 「 「

沈黙が痛い。

目の前に居るのは三人の少女。

すずかちゃんの同級生だと聞いているが、一人は茶髪を二つに結んでいる。

もう一人は見事な金の長髪で、如何にも外国人と言った印象は受けないが、ハーフかクォーターだろうか。

昨日から何人も会っているが、まともな黒髪は一人。

他人の事は言えないのだが、本当に此処が日本なのか疑問に思えてならない。

とまあ、それは良いとして、何時までも黙っては居られない。やはり、男の俺から切り出すべきだろう。

「あゝ、衛宮士郎だ。昨日からすずかちゃん達の世話になってる。」

「すずかでいいよ、士郎君。」

「そ、そうか……。」

いやにアクセントを付けていた気がするが、反応するのは其処なのですか。

しかし、思い返してみれば昨日から名前で呼んでくれていた。

小学生とは言え、名字で呼び合うのが普通だと思うのだが、信頼の表れか。

或いは俺の心の内いましめを知って、そうしてくれているのだろうか。

「アリサ・バニングスよ、アリサでいいわ。」

「高町なのはです。私も名前で呼んでくれればいいよ。」

(・・・うん、考え過ぎだな。)

よろしく、と三人頷き合いながら苦笑が漏れる。
しかし“高町”か、確かあの人も

「なあ、なのは。もしかして兄妹とかいるか？」

「あ、うん。お兄ちゃんとお姉ちゃんが一人ずつ。
お兄ちゃんには昨日もう会ったんだよね。」

なるほど、やはりそうらしい。

昨晩は混乱していた為、有耶無耶になってしまい、怪我をさせてしまった事を謝っていなかった。

動ける様になったらきちんと挨拶に行かなければ。
そんな事を考えていると、アリサが声を掛けてきた。

「ねえ、あんたのその腕なんだけど・・・。」

(うつ・・・。)

初端から急所を突かれ、思わず自分の格好を見遣る。

フィリス先生が帰った後、忍さんとファリンさんは色々抱えて部屋に戻って来た。

『すずかの友達が来るから、問題無い格好にしましょう。』

そう言って文字通り引ん剥かれた。

昨日は治療が中心だった為、その時も下着にタオルを掛けられただけの殆ど裸の状態だった訳だ。

元々着ていた服はボロボロで血も付いており、ベッドに縛り付けられる前に処分されていた。

ホルスターや双剣に関してはきちんと保管されているが。そして今は、ぶかぶかのシャツに大きめの高校のジャージを着せられている。

それでも尚、目を引くのはやはりこの左腕。

赤い布の儘では余りに目立つので、今は幅の広い包帯を上から巻いている。

地肌が覗く手には黒い革の手袋を嵌め、袖は通していない。

上体を起こして左腕は首から吊っているのだが、それも到底自然とは言えず、腕が在るのは臍の下だ。

“義手で通す”それが取り敢えず到った結論だった 無理が有る氣もしたのだが。

「ああ、義手だ。故あってサイズの合っていない物を使ってる。」

「ふん、そう。」

思っていた様な追及は無かった。

努めて顔には出さない様にしていたが、背中では冷や汗が伝っている。正直に言っただけ助かった、案外こういう事は氣にならないのだろうか。

「失礼します。」

と、そんな間延びした声と共にファリンさんが部屋に入ってきた。

ポットとカップが載せられた銀のプレートを手になっている。

そして三人が囲うテーブルの上にそれを置くと、此方まで良い匂いが漂って来た。

カップは四つ、その内の一つに琥珀を注ぐと俺に手渡し、ソーサーをサイドテーブルに置いてくれた。

心遣いは大変嬉しいのだが、二日近く空けて口にするのがお茶というのも如何な物か。

しかし、取り分け腹が減っている訳でもなく、紅茶が苦手という事も無い。

戴きます、と一言断わりそれを口にした。

茶葉の良し悪しに関しては判別しかねるが、薫りも良く美味しい・・・と思う。

そうして俺達は、紅茶を片手に平和な日常を。本当に些細な出来事の話をしていた。

其れは此の身に過ぎたる平穩

そんな何でもない日長的一幕。

然れど、時は瞬く間に過ぎ去って往く。

きつと是こそが一番守りたかった

それはまるで、春の夜の夢が如く・・・。

S i d e : アリサ

「それじゃあ、私たちは帰るわね。」

「またね。」

ああ、と土郎は右手を上げて応えている。

私はそれを一瞥すると部屋を後にした。

今日はすずかの家に場所を変えたけれど、本当にそれだけの事。
結局、話していたのは私達だけで、土郎が自分から会話に入ろうとする事は無かった。

(・・・何よ、あいつ。)

話を振れば反応するし、顔は笑っているのだけれど。

自分からは言葉を掛けない。況して、自分の事は一度も口にしなかった。

一歩どころか、三歩は引いていると言うか。

まるで、自分には入れない舞台で行われる劇を眺めている様な。

そんな苛つく印象さえ覚えたものだ。

言ってしまうば、昔の二人、特にすずかの姿に似ているのだ。

今でこそ、そう言った感じも薄くなったけれど、会ったばかりの頃は酷い物だった。

「まあ、それで意地悪したのかって、言い訳にもならないけど・・・」

「……??」

唐突に足を止めて何事か呟いている私に、二人は目を丸くして振り向いていた。

すずかやなのはの振る舞いは折々の気持ちの浮き沈みではなく、それぞれの環境で育ってきた性格とでも言うべき物だ。

私だって所謂“家庭の事情”ってやつまで開けっ広げて話そうとは思わない。

もちろん、暴力とかは良くないけど、しきた為来りや在り方についてだ。

「何でもないわ。しかし、惚れる程格好良くはないわね。」

「だ、だからっ！」

「……でも、いい人みたいだったよ。」

すずかは顔を真っ赤にして詰め寄って来る。

その後ろでなのはは微妙なフオーローを返してくれていたのだが、対照的にその笑顔は引き攣っている。

（まあ確かに、悪いやつじゃないんだけど……。）

すずかが士郎に惹かれる理由が、何となく分かった気がする。

あいつはどう考えても普通じゃないのだ。

親を連れずに一人で来たり、大人用の義手を付けていたり。

その心の中には計り知れない何かを抱えている。

それを何処まで知っているのかは聞かないけれど。

多分、共感できるモノが有ったのだと思う。

（全く・・・私の周りに現れるのは、どうしてこんなやつばかりなのかしら。）

別にそれが嫌という訳ではない。

むしろ、名前も知らない大人に媚びられるよりはずっといい。

ただ、私の前であんな顔をされるのは厭なのだ。

自分でも可笑しくなるぐらい、何とも我が儘な話だけど

「・・・まあ、私が何とかしてやるしかないか。」

見渡す限りの青空の下。

庭先で二人を抜き去りながらそう呟いた。

後ろではずすが何やら叫んでいるけど、それも耳には届かない。

士郎に会えて良かったと、確信を持って断言出来るから。
思わず頬が緩む。こんな顔は見せたくなかった。

（ うん。きっと、あいつとも上手くやっていける。）

S i d e o u t

夢を見ている。

“ 僕は、正義の味方に ”

僅かに肌寒い月夜の縁側で。

そう、これは今際の誓い。

これがエミヤシロウと言う理想を決定付けた。

其れは一つの望みを守る暖かい想い出。

目にした景色を、耳に届いた声を、アイツの感じた心を。
俺は今それを、駆け足に追体験している。

夢を見ている。

“ 先輩 士郎 シロウ ”

こうして呼び掛けてくれる声は。

それこそが、一番守りたかったモノ その筈だったのに。

アイツは真っ先に切り捨てたノ俺も末先に斬り捨てる

この胸に在ったのは離愁、残懷、それとも・・・。

これは俺に対する黙示。

もしも、俺がエミヤシロウとして進む事になれば。

此の身を支えてくれる恩人達を。

暖かい少女達を切り捨てる事になると。

だから、このオモイを忘れたくない。

この想い出が胸に在る限り、後悔する様な道は歩まない。
俺は、迷う事無く進んで生^いける気がするから。

夢を見ている。

けれど、きっとそれも忘れてしまう。
俺に許された目覚めは唯一つだから。
今も眠りは深く、もう声は届かない。

だから、せめて願う。

いつか、路の果に到る前に。

この答えを、得られる事を

今回は今までに比べて、雰囲気は何とも落差有り。

本編でも無論、日常パートがちまちま入る訳ですが、如何も上手く書ける自信が無い・・・。

すずかが攻めに攻められていましたが、すずかは基本的に切り返しが弱く、なのはどちらかと言うと聞き上手。となれば、この様な構図になるのも止む無しかと思ひまして。

しかし、改めて思うのはとら八陣は抱えているものが重いと言うか、士郎君と被ると言うか。

書き始める前はそんなに気にしてなかったんですが、今になって書きたくなるのが人情。しかし、フィリスの方はまだ書く予定無し。

逆に（高町）士郎さんの方は次に何かしら書く予定。つまり次回は・・・。

途中の長つたらしいやつ、平行世界の有り様を“不確かさ＋時間経過”で解釈するのは私自身の持論と言いますが、特に著名な学者さんがどうこうではなく、勝手な想像（・・・と言う名の妄想）とお思ひ下さい。

あと、他のファンタジーじゃない部分も含めて。

ちょうど暦的には三月尽の夜が過ぎ、四月一日。エイプリルフルとか言う風習に因んで勘弁して下さい（汗

この話には関係ありませんが、プロローグが如何しても良くない。到った結論は、出だしが軽い。

序章の最後に付けようと思っていた英語の一節を頭に挿げ替え。

こっちの方がしっくりくるので個人的には満足です。

Side: 恭也

薄闇に包まれた道場の中、俺は独り二刀を振るう。
冷たく湿った朝の空気は宛らあの日の様であった。
少年との邂逅から早三日、腕の傷も殆ど塞がり今はその調整だ。

俺はあの晩に話を聞いて、そのまま朝早く家へ帰っていた。
父さんには事の後に連絡を入れていたのだが、流石に説明も十分に
しないまま連日で家を空けては皆も心配する。
あれから忍と何度か電話で遣り取りをしただけで、特に問題は起こ
っていない。

（ 　　あるとすれば、なのは達に知られた事ぐらいか。 ）

そして雑念を払い再び型に入る。
思い返すのは、やはりあの日の夜明け前。
俺の未熟さを教えてくれた、暁霞の中での闘いを

ring,
at that hazy mo

（日が、昇る・・・。）

地平の先にそれを認めた時、僅かに気が緩んでしまった。
知らず、其方へ目を向けてしまう 瞬間、影は動いた。

凄まじい勢いで間合いを詰められる。

右から左刀が払われ、それに何とか顔先で合わせる。

しかし、少年の足が止まる事は無く、空いた右脇へと体を投げて来た。

思わず、首を落とさんばかりの勢いで刀を切り返す。

だが。

初めて見せた攻勢が意味するのは、文字通り必殺。

これまで太刀筋を眼で追っていた少年が、此处に到って俺の方を向いていない。

左で覆う様に隠された右手には、予め防ぐ一手が敷かれていた。

（・・・やられるっ！）

咄嗟にそう思えたのは幸運だったのだろうか。

前へと跳びながら体を捻り、背に翻る黒を払う。

ガッ ザ

金属音が響いたかと思う間に、身を断たれていた。

不用意な体勢で一撃を受けた小太刀が物の見事に碎ける。
止められなかった黒刀と共に、右腕からは鮮血が舞った。

「・・・っ!!」

だが、剣士が選択していたのは防御ではなく回避。
勢いを殺しきれずに前腕を掠められたが、それに留まる。
在ったのは僅かに一瞬の攻防。
再度、両者は間合いから外れていた。

元より少年の体は満身創痍。

対して、剣士の得物は失われたに等しい。

本来ならば漸く五分五分だと言えるが。

残るは唯、一方がその優位を手放したという結果

空足を踏みながらも体勢を整える。

手に有る小太刀は半ばから先が無くなっている。

立ち位置は入れ替わり、奥でノエルが臨戦態勢に入った。

(本当に・・・未熟だ。)

手を抜いた訳ではない 否、その認識が間違いだ。

先への考慮も無しに、俺は出し惜しんだ。

実戦で使いこなせる自信が無かったのか。

それとも必要無いとの慢心が有ったのか。

今となつては全てが言い訳にしかない。

この少年は、全力で打倒すべき相手。

俺がそれを測り損なっていたに過ぎない。

“ うるさい ”

思考が冴え渡っていく。

一度、肺の中の熱気を入れ替える。

そうして体を倒しながら、折れた得物を目眩ましに投げ付けた。

“うるさいっ・・・！！”

その矢は容易く弾かれるだろう。

然れど、それは問題にはならない。

防御に腕を振るうその一瞬で十分なのだ。

其の刹那の間隙こそが、この天秤を傾ける。

今からの俺にとって。

外敵は他ならぬ自身の限界

（ 御神流・・・神速。 ）

瞬間、視界から色が抜け落ちた。

同時に思考の全てを深部感覚へと切り替える。

前傾姿勢から踏み出される一步が遅い。

肌を切る空気は水中の様に重く感じる。

（ もつと前に ）

少年の剣が線をなぞる様に弧を描く。

俺は徒手空拳のまま両手を引き、其れを打ち込む体勢へと。

一步・・・後ろ足が地を蹴った。

（ もつと速く！！ ）

“ ああああああああつ！！！！ ”

その間、一秒足らず。

絶叫と共に、在り得ない動きを察知した。

少年の右腕は剣を握ったまま、切っ先を自身の胸へと向けている。

（ つ！？・・・間に合えつ！！ ）

それを認めて、照準を右腕へと移す。

その刃が肉を抉ろうという寸前で。

辛々、右刀を叩き落とした。

そして其処で、操り人形の糸は切れた

「……………」

時刻は七つ半、朝暾を待つ事は無い。

美由希が起きて来るにも、後三十分は余裕が有る。

俺は変わらず、無言で腕を振るう。

僅かに汗ばんだ体に曉風が抜けて心地好い。

耳に届く風切り音は、段々と鋭さを増していた。

S i d e o u t

E p i s o d e 0 6 . 花明り冴ゆる縁坐敷 } E n F a m i
l l e }

カチッ カチッ カタン

「・・・・・・・・。」

瞼を開けば、其処には変わらぬ高い天井が在った。
見ていたのは、俺に唯一許されたアナムネーシス。
目覚めは何時も同じ。あの日、あの場所から。

初めこそ人の死を目の当たりにする度に呻きもしたが。
何百、何千と繰り返す内にそれも慣れた。

地獄を想起するのは何も目覚めだけではないのだ。
独りで思考の海に沈むしかなかったこの療養期間中は。

見殺し、斬殺し、コロし尽くす光景ばかりを眺めていた。
誰に強制されるでもなく、そうする事を自ら選び取れる。
それこそが何よりも異常であり、ココロが壊れている証拠と言
えた。

(・・・起きよう。)

一人で動く許可を貰ったのは昨晚。

既に痛みも無く、体の調子は寧ろ良いと言えた。

あの朝以来動かなかった左腕も、徐々に感覚が戻っている。

回路を寸断したままでは元に戻る事は無い

体を伸ばしながら軽く動いてみるが、やはり痛む箇所は無い。

逆に、丸三日間寝ていた所為で節々が軋むぐらいだ。

時計へ目を向けると、月は縦二つに分たれていた。

それは丁度、今の自分と同じ有様

こうして自分の足で立つてみると尚更部屋を広く感じる。

洋間なのだが、座敷で言う十畳間の数倍有るのは間違いない。

豪華な絨毯が敷かれ、アンティーク調のテーブルに椅子が二脚。

加えて壁際には大きな暖炉や、天井まで届く本棚が設えてある。

納められた本の背は段毎に統一され、調度品ではなく飽く迄装飾の
一環か。

部屋全体が如何にも客間と言った趣きであつた。

ふと、視界の端を光が掠める。

目を向けて可笑しくなる、今までよくも気付かなかった物だと。
部屋の隅には、一枚の大きな姿見が置かれていた。

其方へと歩み寄る／其処に写る物を確かめねばならない
足を止め一度、瞳を閉じた。

今はその背中しか思い出せない。

脳裏に甦るのは、白髪ジブンのアイツ。

そうして眼を見開き、硝子の窓を覗き込む。

一瞬、日が反射して目が眩んだ。

「あ、」

此方を見ていたのは赤毛の少年。

華奢な体付きで、相貌は如何にも幼さが残る。

取り分け目を引くのはだらりと下がった右腕。

白い筈の包帯が、何故か赤く映っていた。

「・・・ああ、そうだ。」

これが、俺

そうして二人は同じ言葉を口にする。

鏡の中に在るのは歪な奇景キケイ。

有ってはならないモノが確かに映る。

（・・・何年も、ずっと目にして来た筈なのにな。）

けれど今は、これが正しい姿だと。

こうでなければ嘘だとさえ思えた

其れが自分自身との出会い。

これから一つの道を歩んで往くのは。

他でもない自分なのだとノアイツとは違うのだと

それを此処カラダで確認してノそう此処ココロに言い聞かせて

今日と言う一日が始まる

「衛宮様、朝食の用意が出来ております。」

「あ、すいません。黙って外に出て・・・と、おはようございます。」

「はい、お早う御座います。」

手を掛けた玄関扉が内側から開けられ、中にはノエルさんが立っていた。

その後が続いて食堂へ入ると、既に皆が揃っていた。

本来その席に居るべき両親は共に海外、仕事の関係で年に数回程しか戻らないと聞いている。

時刻は七時過ぎ、春休みと言う事を考えれば少し早い朝食だろうか。すずかも何となく眠気が抜けないと言った面持ちだ。

俺が起きた時には、未だ屋敷は寝静まっていた。

その為、時間潰しに運動も兼ねて辺りを歩いて回って来た。

改めて見ると立派な三階建の洋館、何やら屋根裏部屋らしき物まで窺える。

俺が居たのは二階の西側だろうか、窓でも開けておけば確認できたのだが。

屋敷自体は南玄関で東西に長く、在るのは恐らく小高い丘の上。

市街地を西方に据え、北から東に掛けて若緑の峰々が連なる。

そして南には“海鳴”の名が示す通り青畳が輝く、正しく風光明美とでも評すべき景観が広がっていた。

朝風は木々の薫りを、鳥の囀りを運び、眼下の海原を眺めているだけでも潮の香りや波の鳴を感じられる様だった。

「良い所ですね、此处は。」

挨拶を返しながら促されるまま席に着き、そんな事を口にした。それが有りの儘の感想だった。目に映る物全てが余りに違い過ぎる。

静かだが命に溢れた、温かく平穏な世界。

刻んで来たのは、阿鼻叫喚の死が満ちた地獄せかい

（そして、俺の居るべき場所は　　）

「・・・そうね。けど、これからは此处があなたの帰る場所よ。」

「・・・。」

忍さんの言葉が結論を出す事を遮る。

それはまるで、俺の考えを見透かしていたかの様に。
俺は返答に窮し、黙ったまま黄水仙を眺めていた

「取り敢えず、食事にしましょう。」

そうしてガラガラとワゴンが引かれて来る。
思う間に、卓上には皿が並べられていった。

しっかりとした丸いパンは“ゼンメル”と言うらしい。

その横にはソーセージがボイルされ、サラダはレタスとトマトに紫
キャベツ。

こちらはあっさりしたドレッシングで仕上げられ、パセリを散らし
たポテトスープまで付いていた。

何処そのホテルの様とでも言うか、今朝も大変美味しいのだが・・・
沸々と裡に湧く物を感じるのは気のせいだろうか。

こうして揃って食事をし出したのは昨日からだ。

初めに気になったのはノエルさんとファリンさん。

二人は後ろに控えたまま席に着かず、抑々皿が三人分しか用意され
ていない。

曰く、メイドである事が誇りなのだとか。

正直に言うとなん自身はよく分かっていないのだが。

客人の身分で彼は口出しする訳にもいかず、こうして俺は座ってい
る。

食事を終わると決まって紅茶が淹れられる・・・が、忍さんの手に
有るのは紙パック。

これは昨朝からの事で、尋ねた所“アセロラジュース”を大層お気に入りでそうな。
優雅な朝の一時だと言つのに、気怠るそうにストローを咥えているのは如何な物か。

「士郎、ちょっと話があるんだけど。この後いい？」

(・・・ん?)

呼び掛けにそこはかとなく違和感が。

確か昨日までは君付けで呼ばれていた様に思う。

まあ変な渾名でもなし、好きに呼んでくれて構わないのだが。

それは置いといてだ。

「構いません、俺も聞きたい事が有ったんで。」

一度頷き返して席を立つ。

俺が尋ねるべきはあの人の事。

漸くこの日、一つの過ちを清算する為に

Side : 忍

「・・・まあ座って。」

そう席を促して机の引き出しから一綴じの書類を取り出す。たった二枚だけの、しかし何にも代えられない大事な証。

一度中を確認し、それを無言で彼の前へと向ける。

面には花が印刷され、一際大きく“征二” “飛鳥” “忍”と記されている。

一枚めくり、その下には

「あ、これ・・・。」

「戸籍、今時何かと必要でしょ？」

其処には“士郎”続いて“すずか”と在った。

其れは正しく、家族の証。

最初は養子縁組を考えていた。しかし、彼に実親は居ない。生きていないのではなく、文字通り存在しない。

現行法では出生不明の子供を養子に迎える事は不可能に近い。ならばと言う事で、過去の記録から弄って貰った。

勿論、父からは大変なお叱りを受けた。

娘からの偶の我が儘ぐらいは黙って聞いて欲しい物だ。

まあ、自分でも無茶なお願いだったと思いはするけれど。

家がそれを可能とするぐらいのコネを持っている事は分かっている。それに、何と言っても電算処理の時代、一度書き換えてしまえば引っ掻き回されない限りは露見する様な事も無い。

「言つたでしよ、此処があなたの帰る場所だつて。」

「けど、きつと迷惑を……。」

「いいの。子供は黙つて大人の言う事を聞きなさい。」

自分で言つて可笑しくなる。

大人をいい様に使つておいて、そんな事を口にするかと。

しかしそれは別にして、彼はもう少し他人を頼つてもいいと思つのだ。

「……まあ確かに、厄介事は増えるかもしれないわ。」

「……ならつ！」

「けど、それも分かつた上で言つてるの。」

彼は言葉を遮られ、また俯いてしまう。

黙つて受け入れてくれる事は無いだろうと思つていた。

勿論、今更戸籍の重要性を解くような相手ではない。

だからと言つて、此方が引き下がる訳も無いけれど。

「……私達は本当の意味で、あなたが歩いて来た道を知る事は出来ない。」

所詮、ヒトは己の知る事しか知らない。

彼が私達に何を伝えようと、それを痛ましくは思えても。

現実には私達は過去を共有出来ないのだ。

けれど、後ろを振り返る必要は無い。
道を照らすのが前だけでいいように。

ここから先ならその手を取って共に歩める。
倒れる体を支えてあげる事が出来るはずだから

「だから、今は“ありがとう”って言うてくれれば十分なんじゃない？」

難しい理屈は要らない、誰にだって寄る辺は必要だ。
進む道は自由を選んでくれれば構わない。

けど、ずっと飛び続ける事なんて出来はしない。
たとえ機械であつても、休息は必要なんだから。

「
あり、がとう・・・ございます。」

迷った素振りを見せながらも、とぎれ途切れに。
その声は消え入りそうなほど小さかったけれど。
確かに、此方へ頷き返してくれた

「さてと、私からは以上よ。士郎が聞きたいって言うてたのは？」

重い空気を押し除ける様に声の調子を上げた。
無意識に彼の手へと両掌を添えていたのが、何となく気恥ずかしく
なつて席を立つ。

「あ、えっと・・・高町、恭也さんの事なんですけど。」

「・・・あゝ。」

皆まで言わずとも分かってしまう。結局はこういう性質なのだ。恭也は気にしてないだろうし、故意にやった訳でもなければ、あの両親が目くじらを立てるとは思えないのだけれど。

（ま、言っても聞かないか。）

事実、当の本人にとって詮議すべきはその結果と其処に到る過程。

誰に怪我を負わされたかは飽く迄一要素、言わば些末事だった。

「・・・オツケー、挨拶に行く時は車を出すわ。」

恭也の家は喫茶店をやってるから、店が閉まるまで待ちましょう。

「

「はあ・・・。」

揃って店を空けさせるか、それとも晩に尋ねるか難しい選択ではある。

けれど、送り出す前に丁度やらねばならない事もあったのだ。

気心の知れた仲とは言え、流石にこの格好の儘では行かせられない。私の呼び掛けから僅かの間に、ノエルとファリンが部屋へ入ってきた。

「ノエル、ちょっと買い物に付き合つて。」

ファリンはその間に土郎をお風呂に入れて頂戴。」

「畏まりました。」

「了解です。」

「・・・・・・・・・・・・・・は？」

そうして一人だけ遅れて。

何とも間の抜けた声を漏らしていた。

S i d e o u t

「・・・・・・・・・・なんです。」

思わずそんな言葉が口を衝いて出る。

ファリンさんやノエルさんの様な女性を傳かせ、剩え背中を流して貰っているなどと、外野から見ればある種の憧憬を抱かせる様な光景かもしれない。

彼女達にしても手の掛かる客人、元い子供の世話程度の感覚だろう。

しかし、されている本人からしてみれば別の言い分が有るという物はつきり言つて、ペットの動物が着せ替え人形の様な空しさを覚える。

昨日までは忍さんから一声掛ければ、問答無用で衣服を引ん剥かれ、食堂へ移動するだけで抱き上げられたりもした。

二人は見掛けに依らず力が強く、其処に加えて遠慮の欠片も無い。当初は心許りの抵抗を試みたりもしていたのだが、俺の動きは片手で易々と押さえられてしまう為それも徒労に終わる。

礼を尽くされていると言えなくもないが、彼女達の言うメイドとは何なのか、甚だ疑問に感じる。

先刻も幾度となく断つたのだが、結局風呂場へと押し込まれ現在に至る。

廊下で騒いでいた時に、階段から向けられたすずかの視線が妙に痛かった

「どうかしましたか？」

「あ、いや。何でもありません……。」

確かに左腕は満足に動かせないし、赤い布を濡らすのは良くない。正確には如何とも付けられないのだが、やはり不確定要素は避けたい。

そうなると体を洗うのも一苦勞。昨晚までは濡らしたタオルで体を拭くだけに留めていたのだが、その作業さえ思う様にいかなかった物だ。

しかし、やはりこの状況は宜しくない。

本当にガキなら良かったのかもしれないが、如何せん異性への意識ぐらいは有る訳で。

言ってしまうば“微妙な年頃”なのだ……いや、この表現自体微妙ではあるが。

（ はあ。 ）

声にもならない様な嘆息を漏らす。

所在無く首を回して風呂場の中を見渡した。

磨りガラスの窓が大きく取られ、部屋全体の趣きは白。

黄色灯を点けてはいるが、それ抜きでも明るい印象を受ける。

浴槽が乳白色、床に青味が入り、壁は薄くマール模様走る

と言うか、恐らく部屋全体が大理石。

俺が寝ていた部屋と同じで、連一人で使う様には思えない程広い。

半ば埋め込まれた形の大きな湯船には一体何人入れるだろうか。

思えば、屋敷は装飾から調度に到るまで、あらゆる物に贅が尽くされている。

今日々にぞぐわぬ大きな洋館と言い、二人のメイドを仕わせている事と言い。

掛け値無しの金持ちなのだと、湯に浸かりながらこの様な所で、改めて思い知らされるのであった。

そうして日も傾き。

住宅街へと向かう車の中。

俺の隣で忍さんがハンドルを握っている。

黒塗りの・・・ではなく、白いセダンが出て来た時には内心ほっとした。

格好は身の丈に合った物に着替えている。

新調して貰ったスニーカーに、サイズが少し大きい深い黄土色のカーゴパンツ、上もやはり大き目で白い半袖のＴシャツに薄い灰色のパーカーを羽織っている。

これは忍さんが気を使ってくれた結果だ。

左腕は先日と同様に包帯を巻き、袖は通さず首から吊っているのだが、これならば前腕が見えるだけで、それも白の上ではそう気にならなかった。

とは言え、能々見ればやはり太いし肘も低い。少しでも誤魔化す為にと、サイズの大きい物を選んでくれている。

もう少し背が伸びるまでは、今の様に白基調の上から一枚羽織る形になるだろう

「あ、朝に言い忘れてたんだけど。

士郎の学歴はアメリカで飛び級して中卒って事にしてあるから。」

「・・・・・・は？」

そんな俺の思考はとんでもない一言に吹き飛ばされた。

はつきり聞き取れてはいたが、もう一度頭の中で反芻する。

中卒、飛び級、アメリカ、学歴

（・・・・俺の？）

「１１歳だと義務教育の期間でしょ。

悪いんだけど、やっぱり学校には通わせてあげられないから・・・・。
」

確かに今朝の戸籍では１１歳となっていた　誕生日も思い出せないと伝えていた為、此方に来た３月３１日にしてある。

法律上は通わねばならないが、一般教養を粗方習得した人間が行く所ではないだろう。

別段そうする必要性も感じなければ、こうして改めて断って貰う必要も無し、寧ろ感謝しなければならぬくらいだ。

「ありがとうございます。」

「こういう時は、そう言われると複雑なのよね……。」

(……?)

何やら呟いていたが、車の音に掻き消され上手く聞き取れなかった。顔を覗き込むのも失礼かと思い、視線はフロントガラス越しに外へと向ける。

俺から掛ける言葉も無く、車内は再び沈黙に支配される。

そうする間にも景色は流れ、一つ角を曲がった所にそれは在った。住宅街にそぐわぬその光景に酷く目を魅かれる。

右手に咲き乱れる満開の桜花が。

沈む夕陽に焼かれながら空を分つ。

その赤い姿は寧ろ、河原を染める彼岸花の様で。

そして其処で、車は止まる。

「着いたわよ、この右の家ね。帰る時には電話してちょうだい。」

「……え？ あ、はい。」

一瞬遅れて忍さんの方を見遣り、言葉に詰まる。
その満面の笑顔に、何やら“邪な物”を感じるのですが。
居た堪れずドアを開け、地に足を下ろした。

そうして礼もそこそこに、その扉を閉めてしまった。
途端にエンジンを吹かし、車の影は瞬く間に遠く離れて行った。

降りた先、視線を上げれば丁度門先に立っていた。
左右に延びる石垣が長い。後ろの家々の倍近く有るだろうか。

対する俺は身一つで。

折箱の一つでも持つて来るのが礼義とも思えたが、そんな物は誤魔化しに過ぎない。

取り敢えず謝って、そう言った事は二の次だ。
抑々、客人の俺が然々出費をせがむという訳にも

「・・・って、ちょっと待て。」

自身の懷中物を思い返してそれに気付いたが、時既に遅し。
謝るだけなのだから、それこそ数分足らずで済む事だ。

此処まで車で片道十分、それを帰ってしまつては二度手間になる。

『電話してちょうだい。』

しかし、携帯電話は勿論の事、小銭の一枚も持つてはいない。
其れ処か、月村邸の電話番号を知らなければ連絡の入れ様が無いのだ。

（　　ぐ、あの人は・・・。）

何て茶目っ気に溢れた事をしてくれるのだろう。

思いたくはなかったが、あの顔は間違い無く態とやっている。

警察は却下、色々と面倒が待っていそうだ。

金は自販機の下でも漁れば十円ぐらい落ちているだろう・・・途轍もなく惨めだが。

しかし、あの様子では電話帳にも登録されていないか。

真直ぐ歩いて帰れば2時間掛からないぐらいだが、一度目にした地図や通った道を忘れないと言った特技は生憎と持ち合わせていない。

（やっぱり、頼むしかないか・・・。）

眼前に掛かる表札は“高町”。

気遣いと言えなくもないその悪戯が、家の門を無性に高く見せ、呼び鈴を鳴らす事を酷く躊躇わせるのであった

「ぼく、家に何か用かしら？」

「・・・うわあっ!？」

一体どれ程の間逡巡していたのか。

突然の横からの声に、珍妙な声を上げてしまった。

其方へ振り向くと、一組の男女が此方をまじまじと見ている。

“家に”と言う事はこの人達が

「すみません、衛宮士郎と言います。先日は・・・」

「・・・おおつ！ 君が士郎君か、よく来てくれた。
立ち話もなんだろう、まあ中に入ってくれ。」

「・・・。。。」

そう言つて此方の言葉を遮ると、男性は扉を開け中へ入つて行つた。流石に取り残される訳にもいかないので、俺も急いでその後へと続く。

門を潜ると正面に玄関が在り、右手には広い園池が繕い立つ。

前栽に色とり取りの花が植えられ、その脇には大きく泉水が設けられている。

母屋は二階建てで、庭の感じから見ても奥に広いのだろう。

奥には別棟 直観的に其れが道場だと感じられた。

此方からは縁側だけが見えている。開けられた戸の中には板張りの廊下が覗き、恭也さんの名を呼ぶ声が漏れていた。

後ろから促され、俺も玄関戸の敷居を跨ぐ。

中の造りは一般的な和洋住宅とでも言えようか。

月村邸には如何しても見劣りするが、十分立派な屋敷であつた。

けれど何よりも、胸に沁みるのは郷愁

そして。

「君は・・・。」

「・・・あつ。」

再びの際は、ある意味で望み通りに。

こうして戦場ではなく、日常での再会を果たした。

S i d e : 恭也

玄関には件の少年“衛宮士郎”が佇んでいる。
彼は先日の仕合の顛末に、深々と頭を下げて陳謝した。

「顔を上げてくれ、あれは俺が未熟故の結果だ。」

「けど・・・。」

俺は手を上げてその先を制する。

確かに、彼の言いたい事は分からないでもない。
彼が我を失わなければ俺達が戦う事も、まして怪我をする様な事など無かった筈だ。

だが、俺にとって怪我をする事自体がそう珍しい物ではない。
筋や関節を痛めたりは勿論、真剣での鍛錬による刀傷も少なからず残っている。

知らねば負い目に感じてしまつか、折を見て話すのも良いだろう。

「あ、あれ・・・士郎くん、なんで??」

「へー、キミが・・・。」

「な、なのは？・・・って、当たり前か・・・。」

（むっ・・・。）

後ろから美由希となのはが顔を出して来た。

しかし、二人はもう名前で呼び合っているのか。

すずかもそうだったので、それに影響されただけかもしれないが・

・まあ、今は良い。

「士郎君は月村の家に住む事で決まったらしい。

それで、こうして改めて挨拶に来てくれたんだ。」

「あ、初めまして。衛宮士郎です。」

彼の戸籍を用意したと忍から聞いていたので、差し障りの無い理由を付けてやる。

目配せすると挨拶を返したので、彼にしてもそれを受ける心積もりなのだろう。

「私は美由希。恭ちゃんの妹で、なのはのお姉ちゃんね。よろしく、士郎君。」

「士郎君、よろしくね。私は高町桃子、お母さんって呼んでくれていいわよ。」

こつも殊更に強調されては苦笑いが漏れてしまう。

彼は後ろから両肩に手を置く母さんの言葉に、どう返した物が困っている様子だ。

下駄箱の戸を引いて一組のスリッパを並べながら、父さんも自己紹介を。

「高町士郎だ。よろしくな、士郎君。」

さあ、取り敢えず上がってくれ。」

そうして予想通り、目を丸くしている少年を促す。

僅かに躊躇う様子を見せたが“お邪魔します”と一礼して靴を脱いだ。

場所を玄関先からリビングに移し、各々の席に着く。

士郎君には隣から椅子を一脚持ってきて、テーブルの空いた一辺にそれを置いている。

誰もが切っ掛けを探す中、真っ先に口を開いたのは母さんだった。

「そう言えば、晩ご飯は食べて来たのかしら？」

「いえ、帰ってからですけど、その・・・電話をお借りしても構いませんか？」

思えば、彼一人で来ているとは奇怪な話だ。

徒とも考えられるが、こうして電話を借りるという事は、やはり忍かノエルに送られて来たのだろう。

しかし、それならば近くで待っているか、家に上がるかすれば良い物を。

（まさか　　）

「月村さんには私が連絡しとくから。士郎君は座っててちょうだい。」

「はあ・・・すみません。」

（ああ・・・本当にすまない。）

士郎君、入れられる連絡は多分君が思っている物とは違うだろう。

“ 晩ご飯は家で食べてもらいますから ” との声が聞こえた気がした。本人の知らない所で話が進んでいくのは哀れだが、今回は諦めて貰うしかない。

そうして母さんはそのままキッチンへ向かい、俺達は話を続ける。
美由希や、特になのはが居ては切り出し難いだろう、あの日の事を俺から軽く説明する。

勿論、真剣を使っていた事や血を流す様な怪我であった事は伏せてだが。

「ふえー。凄いね、士郎くん。剣道の有段者でも勝てる人なんてほとんどいないって、お兄ちゃんのお友達が言ってたのに。」

（赤星の奴だな・・・俺と五分五分で打ち合える癖によく言う。）

剣道においても、心得の無い俺では反則を取られ兼ねない。

しかし、何でも有りの、一瞬で勝負が決する実戦であれば、御神の剣士は無類の強さを誇る。

恐らくあいつも“ 剣道家 ” ではなく “ 剣術者 ” として評価しているのだろう。

「ああ・・・あれは武器の相性が良かったと言うか・・・。」

「うーん、それも一度見てみたいかな。」

刀剣の事になると些か目の色が変わる、美由希のこれは良くない癖だ。

採集という行動に移さない内は目を瞑っているつもりだが……。彼は言葉尻を濁し、此方に目を向けた。

「あれは忍が保管しているから、必要なら出して貰うといい。」

「……はあ。」

「恭ちゃん、無視しないでよ。」

不満の声が上がるもそれを聞き流す。

忍に保管するよう指示したのは俺だ。

双剣自体を色々と調べてはみたが、やはりただの鋼だった。

刃物を持つと人が変わるなどフィクションの中の話だが、万が一という事もある。

しかし、一緒に暮らす以上、有耶無耶にしたままでは爆弾を抱えるのと同じ事。

ノエルが同席すれば、そう不味い事にはならないだろう。

（取り敢えず、渡して様子を見るか……後で連絡を入れておこう。）

当の本人は如何にも落ち着かない、ばつが悪いと言った印象を受ける。

本々俺に謝りに来た彼としては、こうも歓迎されては奇怪な気分なのだろう。

父さんは変わらず土郎君の様子を
心の内を探っていると言っ
た所か。

「さあ、ご飯が出来たわよ。」

そう言いながら母さんが大きな盆を持って戻って来た。
席を空けてから、僅かに10分と少しが過ぎただけ。
下拵えを済ませているとは言え、相変わらず見事な早業だ。

「じゃあ、俺はそろそろ……。」

そうして席を立とうとする土郎君の前に、箸、茶碗、平皿と次々に
並んでいく。

彼は椅子を少し引いた姿勢の儘で固まっていた。

「月村さんには伝えてあるから、ゆっくりしていつて。」

「……..は？」

やはりこうするつもりだったか……いや、忍がそうなる事を見越
して、この時間に連れて来たのが原因と言えるが。

時刻は六時半、丁度飯時だ。
既にすっかり日も暮れていた

客人を交えての夕食は賑やかに進み・・・この場合、一騒動あったと言ふべきか。主に桃子が騒いでいた訳だが。

片手では大変だろうと詰め寄られ、彼は左腕が義手であると告げた。結果、目に見えて変わったのは腕を吊っていない事だろう。家の中では気にせず使つて構わないと言う形で決着した。

そうして食後のお茶を飲み終わると銘々に分かれていく。

今は娘達が皿洗いを、土郎君はそれをぼんやりと眺めている。

こうしてなのはに男友達が出来たのは喜ばしい。

家や店で出逢うのは、どうしても年上の相手が多いのだ。

特定の誰かの名前は未だ聞かないが、そう言つた所に至る前に、学校以外でも同年代の異性と触れ合う経験をしておく事が大切だ。

幸い彼は、心根の優しい純朴な少年だ。直に相對してそれがよく分かつた。

こうして一人できちんと謝りに来ている事にも好感が持てる。

恭也に優るとも劣らぬ腕を持ち、人格的にも及第点。

いずれ俺の前へ頭を下げる者居るとすれば、彼の様な人物であつて欲しいものだ・・・まあ、それとこれとは別の話だが。

ふと、部屋の隅から恭也に呼ばれた。

俺も席を立ち、その後が続いて廊下へと出る。

「父さん、彼になら御神の事を伝えても構わないんじゃないかな？」

（ああ・・・そうだったな。）

そう、それは決めていた筈の事。

初めて彼の事を聞かされた時から。

改めて息子に諭されてその覚悟が決まった。

「恭也、それは俺の口から伝える。少し・・・彼と話がしたいんだ。」

「

俺と“同じ銘”^{かこ}を刻んだ少年と

部屋に戻ると、テーブルにその姿が無い。

慌てて周囲を探ると、暗がり小さな背中が映った。

独り、縁側に腰掛けている。

その背中がどうしようもなく寂しかった

その傍らに寄り、声を掛けた。

虚ろな姿は、まるであの時の妹のようで

「・・・隣に座つても、いいかな。」

彼が此方へ言葉を返す事は無かったが、僅かに頷いてくれるのを認めた。

その瞳が何かを見ている事に気付き、視線の先を追う。

道の向かいに咲いた桜は。

丁度、今が満開だった。

「・・・夜桜と言うのも、中々綺麗だな。」

俺達には何時もの光景であり、別段見入る事も無かったが、彼はまるで魅入られたかの様に、ただ一点を見つめていた。

「はい 此処は、俺には温か過ぎる。」

(・・・っ!!)

静かに瞼を落とし、ぽつりと呟かれたのは、俺の不安を体現したかの様な一言だった。

ならば今度こそ、手遅れになる前に

「士郎君、少し話をしよう・・・嘗て“御神”と言う名の一門が存在した。」

返事を待たずに言葉を続ける俺へと少年は顔を向ける。

伝えるのは、ある兄妹が道^{おれたち}を違えたあの日の事。

それは、二人の剣士の昔話／彼にとっての予表

御神。それは人の命を護り、奪う事を生業とする一族。

この近代に在りながら、銃器ではなく刀を振るう異能者達。

彼等は裏に於ける守護の象徴であり、同時に脅威でもあった。

事件が起こったのは一堂に会する結婚式。

老若男女を問わず、正しく一族全員が参列していた。

そして、彼等はその祝いの席で皆殺しにされる。

御神と言つ存在を脅威に感じたテロリストの手によって。
本来為されるリスクコントロールが偶々行われなかった為に。

それが十五年程前の話、難を逃れたのは本当に一握りの人間だけ。
偶々その場に居なかった二人の剣士。そして、彼等は異なる道を選^ぶぶ。

用意されていたのは“復讐^{かこ}”か“平穩^{みらい}”かを問う選択だった

「それ、は……。」

「そうだ、そうして“平穩”を選んだのが……俺だ。」

茫然と此方を見上げる少年の前に、俺は一つの懺悔^{つみ}を口にした。
あの日、一人でも気付いていれば。俺が、もう少し気を回していれば。

防げたかもしれない惨劇だった 否、防げた筈だ。

（だが、そんな仮定に一体如何程の意味が有る？）

皆の墓参りをすれば悲しいと思う。

アイツを護^{まも}つてやれなかったのは今でも悔やまれる。
けど、別にただそれだけだ。

「それは……随分、非道い事なのかもしれない。」

「……。」

美沙斗は、残された唯一を自ら手放し、独り闘っている。

士郎君は、死者に贖うコタエを出す為に進み続けるだろう。

墓前に酒を供え只、眼を瞑る　俺の弔いは何と軽い事か。

だからかもしれない。わざわざ実入りの安定しない、危険な仕事を続けていたのは。

出来る力が有るからという理由ではなく、許しを求めるという原理から

不破が裏社会で為した事、何もその全てを語る訳ではない。
そうする必要もまた、無いのだろう。

一族の血塗られた歴史は、俺達が背負うべき物。

其れは、彼が或る世界を胸に刻んでいる様に。

その裡には、既に一つの望みが根付いている。

ならば俺はただ、彼に見えていない選択肢を示してやるだけ。
前を向いたままでも、隣に居てくれる誰かの存在に気付ける様に

「それから何年かして、俺は桃子と結ばれた。

“ずっと笑っていて欲しい”という一つの約束と共に。」

その言葉に、深い意味が有った訳じゃない。

ただ、俺の進む道は後にも先にも悲しみが満ちていたから。
日常の象徴である彼女の笑顔は俺にとっての救いだった。

「だが八年前になるか、俺は仕事の中で大怪我を負った。

・・・本当に、生きているのが不思議に思える程のだ。」

それは、なのはが生まれて直ぐの事。

俺はイギリスで上院議員を務める親友、アルバートの護衛に就いていた。

起こったのは爆弾テロ　　白昼の市街地での事だ。

それが将に行動へ移される寸前で、俺は気付く事が出来た。

ただ、場所が悪かった。守らなければならない人々が余りに多過ぎたのだ。

周囲に犇めく民間人、議員達、アル、そしてその娘フィアッセ。

俺は迷わず、犯行グループの中へと飛び込んだ。

正面の二人を打ち据えた所で、後ろに連鎖爆破の為の爆薬が設置してある事に気付く。

浅く地面に走る導爆線へと刀を振るいながら、顔を上げて愕然とした。

其処には、俺達の限界とも言える現実が在ったから。

一族の皆が一つの爆弾で殺された様に“神”でも何でもない一人の人間では、火が点けられたそれを止める事は出来ない。

そうして、起爆薬が俺の目の前で炸裂した

「ボディーガードという仕事に就く以上、命を落とす覚悟は出来ていた。

周りにも、俺が死んだ時の事を考える様にはさせていたから・・・。

それで、皆も覚悟が出来ている物と勘違いしたんだろうな。」

結果から言つと、俺は事態の鎮圧に成功した。

俺自身が間に割って入る事で誘爆を防ぎ、犯人全員をその場で取り押さえて。

奇跡的に護衛対象の誰一人として傷付く事は無かった　ただし、

その代償として俺が怪我を負ったのだ。

事件の後、初めに目にしたのは白い天井だった。

血を流しながらも無茶を続けた所為で、俺は気を失ってしまったらしい。

近くの病院に運ばれ、それから丸一日眠り続けたのだと医師が話してくれた。

そして。

「病室が夕暮れに染まる頃だった・・・入口に、桃子が立っていたのは。」

その姿は。酷く歪で、儚かった

そう、彼女は決して泣かない。

たとえどんなにココロが痛んでも、苦しくても。

ずっと笑顔を張り続ける／続けて来た

ただ、俺との約束を守る為に。

そしてその日も。唯々、其処に佇んでいた。

継ぎ接ぎだらけの、張りぼての笑顔を此方へ向けたままで。

彼女に“幸せでいて欲しい”と思ったのは紛れもなく本心からだ。

だが、それさえも。全ては俺の身勝手だったのだろう。
その願いは飽く迄、俺にとつての救いであつて、彼女にとっては苦行でしかなかった。少なくとも、俺が自らを傷付ける選択を続ける限りは。

それに、俺は気付いてやる事が出来なかった。
自分の事しか、見えていなかったのだ。

「・・・声が出なかったよ。その時、漸く気付いたんだ。
俺が彼女を、どうしようもなく苦しめているという事実に。」

そうしてその日、俺は剣を置いた。
自分にとって一番大切なモノを守る為に

S i d e o u t

「どうして・・・それを、俺に？」

長い、長い昔話を経て、漏れたのはたった一言だった。
俺と同じ名を持つ三児の父親、彼の過去は俺と似ている。
理不尽な死、偶然得た生、そして

「俺は、これも一つの道だと思ってる。
あいつの気持ちは分からないでもないが……。」

そうだ、選択肢は二つ有った。

今語ったのは平穩、俺が選ぶのは
求めているのは過去への贖罪

後ろに進む事が出来ないから前を向いて
それは十分に分かっている、それでも
この身が歩むは迷路の延長線

（俺が知りたいのは、そのコタエ）

だが。

「……土郎君、俺からあいつについて話してやれる事は無いんだ。」

そう言われて、少なからず落胆は有った。

“この人は／この場所は” コタエを知っているのだと。
胸の伽藍を埋めてくれるのだと、何故かそう感じられたから。

語られたのは、たった数行の事実のみ。

まるで他人では答えを示し得ないのだと

けれど、其れは先よりもずっと。

この胸には克明に／この胸に刻銘を

女性の名は御神美沙斗、旧姓不破。歳の離れた実の妹。

夫は御神の当主であった静馬。しかし、それも長くは続かない。彼もまた同じく、爆破テロによって命を落としていた。

彼女の胸に在ったのは悲しみ、やがてそれは復讐心に替わる。

残された一人娘を士郎さんに託し、自身は闇社会へと身を投じる。初めの数年は知り合いの伝手で動向を探り、会いに行く事も出来た。

しかし、今ではそれも途絶えている。無論、相手からの音沙汰も無い。

恐らく生きてはいる・・・そしてこれからも、唯独り戦い続ける。テロ組織“龍”を、一人残らず“消し去る”までは

娘というのは恐らく美由希さんの事だろう。

恭也さんも養子か、前妻の子か。そうでなければ二人は歳が合わない。

だが、美由希さんを託され、それを受け入れた。それが意味するのは

「・・・止めようとは、思わなかったんですか？」

この考えは余りに短絡的だ、止めない筈がない。

それでも尚、彼女は止まらなかったのだろう。

しかし、どちらにしても余りに救われない、誰もが。

けれど。

「俺はあいつを止められなかった……いや、止めようとしなかった。」

この選択が正しい、頭の片隅ではそうも思っていたんだろうな。

一般人にならば“そんな事をして亡くなった人達が喜ぶのか”などとも問えようが。

生憎と彼等にとって人を殺す事は手段の一つでしかないのだと。

決して綺麗な存在ではなく、血は血で贖う宿命にあるのだと言
う。

静馬は違っただろうが、とその後付け足して。

そして、
冴え返る花夜に沈黙が流れた。

俺には“人を殺す”という行為は未だ分からない。

何度繰り返そうと、誰も明確な答えを示してはくれないのだ。

もし、其処に感じているモノが有るとすれば。それは多分、嫌悪と悲痛。

（俺と、その人が歩む道は）

「何も……違わないさ。」

「えっ？」

声に出ていたのだろうか、思わずそちらを振り向く。

見上げた姿は変わらず、僅かに微笑みさえ浮かべている。

土郎さんは目を瞑ったまま、諭す様に言葉を続けた。

「人の命は山よりも重く、羽根よりも軽い……聞いた事は無いかな。」

「……中東の諺ですか。」

愛する人を殺された悲しみは何よりも重く、同時に仇討ちの為の自身の命は羽根より軽いという意味が込められた言葉
俺がそれを知っていたとは思えないが、確かに其処に触れる物が有る。

理由は何にせよ人の命を奪う以上、背負わねばならない現実なのだと。

「あいつは……一番大切なモノと共に、自分の未来を捨てた。
その時間はあの日で止まったまま、未だ答えを得られずに？ いている。」

(……ああ、そうか。)

“お前のイノチの重さは如何程か”

この人はそれを問うているのだ。

そして、俺ではコタエを出せないだろうと
彼女にとって亡くした最愛の人の命は、自身のイノチみらいよりも重い。

ならば、此の身はどうなんだ。

あの日、この胸を抉った想いは。

あの場所に、置き去りにした人々の願いは。

“ソレはオレのイノチよりも才モイのか

”

「・・・あの日感じた痛みは、悲しみは。紛れもなく俺の一部だ。」

士郎さんは一度紺碧を仰ぎ、此方へ頭を向けてそう口にした。
過去を捨てないと。それを抱いたまま生きていると。
世に在りし現し人は、はっきりとそう言い切った。

「そうして君が死者を悼む様に。生なきる事ことに苦くるしむ君の姿を悲しむ人もいるんだ。」

ああ、きっとそれは正しい。

あの子は、俺の為に泣してくれた。

あの人達は、俺を迎える為に手を尽くしてくれた。

(何よりも、それが俺には)

「今の君には・・・帰りを待っている“家族”が居るだろう?」

そして、その目は俺だけを真直ぐ見据えて。

きっとその瞳の中に、別の誰かを見ている

それは先日までに比べて少し肌寒い春宵。

其れは僅かに肌寒い冬の月夜

記されたのは過去／未来という黙示録。

刻まれたのは一つの理想／結末

（けど、俺は・・・。）

見上げた月は、未だ高かった

月村邸、原作より位置変更。海鳴の外れに。
とりあえず5kmぐらい？

細かくは未だ検討してませんが、徒歩でも何とか行き来出来るぐら
いに。

とら八では高町家から何と40km離れているらしく、自転車で行
き来するには平均20km/hと仮定して2時間、往復4時間・・・
恭也の根性に感服します。

第六話、月村家及び高町家での一幕でした。

テーマは「Family：家族」なんですが、何か鬱エンドまっ
しぐらな感じが・・・。

大丈夫、本編は一気に明るくなりますから！

個人的には鬱展開の方がタイプする手は進みますがね。

まあ、そうじゃない所があればとも言えますが。

それでも鬱エンドは認めねえ。Z　oとか特に認めねえ。

いや、別にアンチじゃないです。ただ“認めねえ”。

皆で（トンデモ）ハッピーエンドなんて贅沢な事は言わない。

ただ、何と言っても頑張った奴には、それだけ報いるモノが有って
欲しい。

とは言え、本作に関しては最終的にワタクシが納得すればそれで良
い訳で。

A'sからStSの間とかその後とか、鬱ルートに入るかも……いや、入るべきだ。

その辺りはオリジナルか、他作品を入れる事になるのかなあ……。まあ、暫くは健やかに育ってくれ、士郎君。

・・・話を戻しまして、メインはやはり後半でしょうか？（文量的な意味ではなく

話は重めで、読んでみてもウェイトはそちらに感じてしまいます。心理学的には最初が印象に残る筈なんですが……。あ、恭也が居ましたね。

士郎さん達の話を手くまとめられたかは疑問。

まあ“とらハの方”“アニメの方”どちらの“リリなの”でも詳しくは語られてない部分なんで、多分に創作（と言う名の妄想）が入ってますがね。

加えて、昔語りは文調が過去形ばかりになりがちで書きにくい。

“ ”の中みたいに端的に纏めてしまえばかりではつまらないし……。

ぬう、精進が足りませぬ。

それと、日常パートはどうにも気だるい感が抜けない。

やっぱり難しいなあ……。こちらも精進あるのみですね。

しかし長い。実に長く仕上がった。

本当に字数の縛りはどこへ行ったのやら。

途中で切る事も考えはしたんですが、それではどうにも尻切れトンボ。

どうしてもこの話で最後まで納めたかったです（納まっているかは別

まあ・・・ねえ。短いよりは良いんじゃない？

先日確かめてみたところ、五話も携帯では1ページに納まらない。

一層の事、開き直って二万字までにしようか？（既になっている訳ですが

今回も六話・1・2と切るのは流石にどうかと思い、結局現状で投稿。

実際読まれている方々としてはどうなのでしょう？

字数多過ぎとの文句が多ければ何か考えますが。

最後に、次話から無印に入るか否か悩み中。

学校始まってからが本来なんですが、そっちは土郎君に関係のない事。

日取りのには始業を4月6日に予定しているので、その数日後？

4月に入っても学校に通っている気配が無いのを疑問に感じたかもしれないませんが、6日が教育委員会調べによる標準的日程な訳で（知るか

学校生活はそこまで詳しく書かない為、正直何時始めても良いのですが。

区切りの良いこちら辺で始めた方が綺麗かとも思ったり。

う、ん・・・。取り敢えず、書いてから決めます。

しかし、後書きまで長いとは・・・。

（駄目だ、眠れない。）

高町家を後にし、此方へ戻って来たのは八時過ぎの事だ。それから歓談もそこそこに、部屋で物思いに耽っていた。

気付けば既に夜は深く、取り敢えず床に就いたのが、さてどれ程前の事だろうか。

時計の針が頂点に差し掛かったところで、目が冴えるのは明るい所為だとカーテンを引き、それからは見ていない　暗闇の中では見る事も出来ないが。

眠れない理由が何なのか、本当は分かっている。

頭の中であの人と話した事が延々繰り返されているのだ。

（あんな事、聞かなければ良かったのか・・・？）

問い掛けの答えは返ってこない／未だにコタエは得られていない
そうしてもう一度振り還る事で、意識は再び覚醒する

「正義の味方って、何ですか？」

高町士郎、あの人の昔話を聞き終えた時、俺はそう口走っていた。

その時だ。

凄惨な過去を語る間も、決して揺るがなかったその感情が、確かに此方へと向けられているのを感じたのは。

其処に在ったのは苛立ち、或いはそれをも超えて怒りや敵意だったのか。

本当に一瞬の事で、勘違いだと言われれば信じてしまいそうな程小さな。

けれど、感じたのならそれは嘘じゃない

「それが、君のコタエかい？」

言葉が返された時には、既に穏和な微笑みに戻っていた。

けれど、俺はその後続ける事が出来なかった。

直前の残像でも見せられていたのか。

それとも、その問い掛け自体に

彼から伝えるべきは既に仕舞い。

俺から切り出す術も無ければ、互いに口を開く事は無く。結局、帰り際に挨拶を交わしたただけだ。

だが、確信している。

あれ以上踏み込んでも、決して答えは貰えなかったと。それがあの時向けられた切っ先^{カンジョウ}の意味だと分かるから。

けれど、その理由は未だ分らない

頭を振りながらベッドから降りる。

何の道、落ち着くまでは眠れもしないだろう。

縁窓の方へと目を向けると、僅かな隙間から月明かりが零れていた。

ガラス戸を推すと、其処にはバルコニーが続いている。
俺は手摺りを背に、その場に座り込んだ。

昼間とは打って変わり、外の空気は冴え返っていた。
しかし、それも頭を冷やすのには丁度良い。
こうしている間にも背から、足元から熱気が抜けて行く。

見上げた空には弦月が揺れ。

手を伸ばしても、真実それを掴む事は叶わない。
さやかに煌めく星影は遙か。

だからこそ、今も其れに魅かれるのか。

（焦ってた・・・って事か。）

そして、それを得られるのはまだ先なのだと。
“この世界”で初めに確かめた筈の事を思い返す

時ならず、中天より青白の燐光が降りた。

思っや、視界に無数の火花が散った。

「づっ！・・・が、あっ・・・！！」

ドクン ドクン

、
。

幾重に覆われた左腕から激痛が流れ込む。

其処には耳鳴りケイコクを伴って

まるでもう一つの心臓が付いているかの様に、ドクドクと脈打ちながら。

あの日と同じ、これが三度目の覚醒

（ つ、くそ・・・何だつてんだっ！ ）

痛みのイメージは、正しく内側から食い破られるそれだ。

それでいて、ねつとりと舐め回される様な寒気が走る。

体内を蟲でも這いずり回っているのではないかと思える程に。

「うつ・・・。」

それを想像してしまい、吐きそうになる。

どんなにリアリティを欠いた話であっても、今の俺になら起こり兼ねない。

左肩に他人の腕が付けられている事こそがその最たる物だ。

思えば動く様になるに連れて、段々とその事を意識しなくなっていた。

それこそ、本当に“義手”であるかの様にさえ感じてはいなかったか。

一層、今日までの事が全て“夢”だと言われた方がずっと自然ではないか

「何を・・・馬鹿な。」

頭を振って下らない妄念を振り払う。

現実には、こうして抑える右手の下には。
冷たく硬い鉄塊が在るではないか。

だから。

弱い自分^{ココロ}に。

もう一度、戒めを。

「……………ん、寒つ。」

そうこうする間に、痛みは幾分か治まってきていた。
呼吸を整えながらも背中を抜ける夜風に震え上がる。

嵐の中を走って来た後の様に、シャツはぐつしよりと濡れていた。

頭を冷やすつもりが、体の芯まですっかり冷え切っている。

流石に何時までも此処に居る訳にはいかない。

立ち上がり、ズボンに付いた埃を払った。

（ 戻ろう。 ）

最後にもう一度だけ、闇天を仰いで。

其処にはやはり、燦然と星々が輝いていた。

こうして、今日と言つ一日が終わる。

冷たさも、温もりも。

全て胸に仕舞い込んで。

そして再び、其の身は無明の闇に沈む

E p i s o d e 0 7 ・ ひと日の終わり ｝ B e f o r e ;
E s i d u A L S ｝ R

S i d e : 高町士郎

彼が家を後にしてから既に数時間。

俺は再び縁側に座して、独り桜を眺めていた。

「あなた、湯冷めするわよ。」

「ああ・・・。」

座敷の方から桃子が声を掛けてきた。

思えば、風呂から上がって結構な時間が経っている。

明日も早いのだ、いい加減そろそろ休まねば と、気付けば彼女が隣に腰掛けて居た。

「・・・桃子？」

「あの子の事、考えてたの？」

言葉にするまでも無く、その通りなのだろう。

取り分け彼の最後の問い、それに俺は答える事が出来なかった。

いや、寧ろ“答える訳にはいかなかった”と言った方が正確かもしれない。

「ああ・・・少し、思う所が有つてな。」

「聞いてもいいかしら。」

「・・・。」

さて、如何話した物か。

俺自身、まだ言葉に直し切れないのだが

『正義の味方って何ですか』

強いて言うならば。

誰にも有つて、何処にも無いモノ。

立場が変われば見方も変わり、価値観の差異は分かれ道に繋がる。

確かに、一般論や俺にとってのそれを話す事は出来た。

だが、彼が求めているのは普遍的な意味でのそれだ。

口に出来る言葉は、その全てが欺瞞に過ぎない。

「彼が徒の子供なら、それでも良かったんだが・・・。」

子供は空想の中の正義の味方に憧れる。

それが自分か、或いは自分を救いに来る誰かなのかは別にして、けれど何時かは、それが幻想に過ぎないのだと気付く日が来る。

しかし、彼は力を持っている。

懣それを真実として、通してしまえるだけの力が有るから。

間違える事は許されないノ然れど、其処に正解は存在しない
つまり、解答を示せば必ず“赤”が付く問題なのだ。

そして、俺はそれを伝える事が出来なかった　　否、また、しな
かった。

あの時、彼にとって“コタエ”を出す事が絶対律なのだと分かった
から。

その足元を崩してしまつては前に進めなくなる。

ならば、ある意味で仕方が無かつたとも言えるのだろうか。

問題は、彼の根底に在るモノセイギとは何なのか。

其のヤミは果たして正義と呼べる代物なのか

周囲が幾ら説き伏せようと、結局は本人が納得しなければ首を縦に
振る事も無い。

加えて何時か、その幻想に絶望した彼が何を思い、何を為すのか。

そして、最悪コタエ自体が決定的に“外れて”しまつた時に。

もし、その原因が自分に在ったとすれば、その時は

幸か不幸か彼は賢い。語つてしまえば加速する。

そうでなくとも、切っ掛け一つでどんどん進んで往くのだろう。

“その時が来てしまつて、俺に彼が止められるのか。”

そんな疑問が頭から離れず、彼には何も伝えられなかった。つまりは懼れているのだ。子供にして恭也と戦って見せた、その力に。

「抑々、自分の息子どころか、他人の娘にまで“業”を背負わせようと言う俺が……」

彼を“其処”から救いたいなんて思うのは、傲慢だったのかもしれないな。」

「そうかしら。悲しいものは誰にだって悲しいわ。」

だから、その手を取るのが誰であろうと関係無いんじゃないかしら？

良い思いから生まれた物なら、それもきつと善いモノよ。」

「……………」

其処で、先程まで黙って話を聞いていた桃子が口を開いた。何を思い、為した事であるかが必要なのだと　ならば。

美沙斗の様に出口の無い迷路を彷徨^{シゴク}つて欲しくなくて。

美由希の様に残される者を増やしたくなくて。

或いは“善”であつたのか、それを知る術は無い。

だが、其処に在った思いは。

此の身に残された“良心”に他ならない。

（そうだな。それは、きつと　　）

「それからもう一つ。確かに血は繋がってないけれど……」

美由希は“絆”で繋がった正真正銘の家族よ。」

「っ!!・・・はは、その通りだ。」

全く、桃子には敵わない。

こうして悩んでいた事さえ馬鹿らしくなってくる。

だが、それで良いのかもしれない。

俺から伝えるべき事は全て話したつもりだ。
それを如何取るか、後は彼次第なのだから。

「絆で繋がれた家族、か・・・。」

「ええ・・・。」

そうして、謳う様にその言葉を口遊んだ。
ずっと離れた屋敷で眠る彼にも届く様に。
其処に一つの想い^{ねが}を乗せて。

(なあ、士郎君。君は“家族”を捨てたりしないよな)

S i d e o u t

あの晩から三度目の朝を迎えた。

暦は四月六日、世間の学生達は今日から動き出す。

勿論、忍さんとすずかも例外ではない。

時刻は五時半を回った所、そろそろ準備を始めて良い時間だ。

しかし、俺はこうして未だに寝間着の儘で。

クローゼットも開けずに部屋の片隅で頭を抱えていた。

目の壁に掛けられているのは黒の上下から一式。

一般的に言う正装なのだが、式に参列する訳ではない。

ところで、スーツと言うのは中々に面白い。

見手の心境によって連想する物がこうも変わるのだ。

大学の入学式に臨む忍さんならば友人達の姿が浮かぶだろう。

縁の薄いすずかには冠婚葬祭、或いは教師や会社員と言った所か。

因みに俺はと言うと・・・強面にサングラスの大男。

目の前の服も、所謂“黒服”にしか見えない訳で。

こうなった経緯を思い返しながら、深い溜息を吐くのであった。

「・・・本気、ですか？」

そんな問い掛けに、忍さんは力強く頷いた。

抑々、準備を終えてから持ち掛けて来る辺り、断られる事は想定していないのだろう。

俺自身、世話になっている月村家には何か礼をしたいと常々思っ

いるのだが、流石にこれは常識的に考えて如何なものか
その様な問答を繰り返したのが昨晚の事だ。

事の発端は先日と同じ場所、自分にも家事を手伝わせて欲しいと持ち掛けた。

これに忍さんはどちらともつかない反応だったが、ノエルさんが強く反対する。

曰く、月村の一族、客人、どちらにしても家事をさせる訳にはいかないと。

加えて、自分達だけでも十分手は足りていると　　まあ、言い分は尤もだ。

然りとて、怪我が完治している以上、日がなごろごろしているのは失礼だ。

しかし、俺の様な子供、元い不審者では働ける場所が無いのもまた事実。

となれば家の中で何かするという結論に達するのは必然と言える。
結局その場は、数日中に“何か”考えてくれるという形で収まった。

（その結果がこれか・・・。）

詰まる所、俺にすずかのボディガードをしろと言うのだ。
最早何度目になるか、再び溜息が零れる。

忍さんの言いたい事は分からないでもない。
飽く迄、ノエルさんは忍さんの専属メイドだ　　現状、一手に担っている感はあるが　　外出するとなれば、当然其方に付く事になる。
となれば、すずかにはファリンさんが・・・それが些か不安な訳で

ある。

誘拐事件など起きようものなら、すずかと一緒に拉致され兼ねない。本人には申し訳ないが、何処かしどけない所が有るのも確かなのだ。実際、屋敷で飼っている猫達に手玉に取られているのを何度か目にした事がある。

あれがスタンダードだと思いたくはないが、やはり不安である。

そう言った意味では、ボディガードを付ける事自体に文句は無い。しかし、果たしてそれが俺に務まるのか。

あの日こそ人並み以上に闘えもしたが、もう一度それが出来るかと問われれば疑問だ。

懋出来たとしても、あの時の様な殺人衝動に襲われては堪った物ではない。

もし抑えられなければ、過剰防衛では済まず傷害事件になり兼ねないのだ。

（ 止めよう、今は・・・ ）

全ては仮定に過ぎず、そうである以上確かな答えも出せない。

問題は、すずかがなのはやアリサと親しくしており、外出が増えていると言う事実。

確りしているようでまだ九歳。良家の御令嬢を一人で歩かせる訳にもいかない。

自分にそう言い聞かせながら、上着の黒衣に左腕を通した。

S i d e : 忍

「士郎、おはよう。」

部屋の戸を開けると、廊下を歩く背中が在ったので声を掛ける。
黒い影もそこで立ち止まり、此方を振り向くと挨拶を返した。

「おはようございます、今朝は早いんですね。」

「・・・それだと私が寝坊助みたいじゃない？」

まあ、間違っではない。

いい歳して一人で起きられないのはどうなのかと、常日頃から感じてはいるのだ。

それでも、こうして口に出されると思う所も有る訳で、透かさず言葉後を捉える。

返答に窮してうるたえている辺りは歳相応に思えるけれど。

朝食にはまだ少し早い、散歩にでも行く所だったのだろうか。

二度寝もせずに何とも爺臭い・・・とは言え、恭也と同様この子の場合も強ち否定出来ないから嫌だ。

「あはは、冗談よ。女の子には色々と準備が有るの。」

「・・・はあ、そんな物ですか。」

すずかのボディガードをして貰う以上、士郎にも同じタイムスケジュールで動いて貰う事になる。

そして、大凡の内容を確認し合ったのが昨晚の事だ。

その時に、起床は六時頃と伝えていた為に漏れた率直な感想だろう
今日に到るまでの私の振る舞いへの考察も加味して。

「それは置いといて、スーツのサイズは大丈夫かしら？」

「はい、丁度良いです。態々しませんでした。」

彼が身に纏っているのは歪な黒服。

特注でも作れない様な代物であるが、家には優秀なメイドが居るため事無きを得た。

シャツの左腕は落として、上着の方は大人用をなお太く・・・などと、店先で頼んではどんな顔をされるだろうか。

（ あ、そうだ。 ）

思い当たる節が有り、士郎をその場に残し部屋へと戻る。

手に取ったのは一つの小包、中に入っているのは一種の医療機器だ。昨日の段階で届いていたのだが、すっかり渡しそびれていた。

「士郎、これ。一人でも付けれるか試してみて。」

「・・・これは？」

「ちゃんとしたサポーター、スーツに白い包帯じゃ合わないでしょ。」

尤もです、と頷きながらそれを取り出し肩に掛けていく。
腕は広く布で覆い、肩、肘でそれを留める造りになっている。
ワンタッチで付け外しの出来るベルトが大変便利だ。
加えて、実際には脱臼などの問題を抱えた人が使用する事を前提に
しているので、そうでもなければ容易く着脱出来るだろう。

ネックは畳んでもポケットに入り切らない事だろうか。
案外、私服で居る時は包帯の方が便利かもしれない。

あれこれと思う間に、早くも付け終わっていた。
その様からはハンモックを連想する・・・勿論、腕が人で。
もう一度、お互い頷き合ってから今度はそれを外した。

「今日はどうする予定なの？」

「朝は取り敢えず、図書館に行くつもりです。」

廊下を並んで歩きながら、隣に声を掛ける。

こうして改めて見てみると、スーツ姿も案外似合っている。

まあ、内面を知っているからこそその印象かもしれないけれど。

これに関して言えば髪の色に依るところが大きいのではないか。
黒ではどうしてもお坊ちゃま然としてしまうが、この子は赤味のキ
ツイ茶色。

顔立ち自体は普通の子供と変わらないけれど、それも幾分大人びて
見えた。

「・・・あれ、まだ続けるの？」

「まあ、抜けていた所を一通り見ておこうかと。」

「なるほどね。」

先日、書斎を使っても良いかと聞かれた時は何事かと思ったけれど、考えてみれば、まず知識の再確認をしようと言うのは当たり前のことだ。

私の方は酷く機械系に偏っているので父の書斎の鍵を渡し、そのまま昨日、一昨日は缶詰め状態だった。

あの部屋の蔵書は、それこそ学校なんかの小さな図書館と変わらない。い。

加えて文字通り、西も東もなく世界中から集められた書物が納められている。

顔を出した時に見た限りでは、寧ろ日本語の背文字が少なく感じられたぐらいだ。その所為で今日も本の虫になる羽目になったのではないかと邪推してしまう。

「道は大丈夫かしら。」

「はい、地図を借りています。」

特に私が心配する必要もなさそうだ。

全く以って、手の掛からない弟君である。

学校には行かせられないと伝えたけれど、ある意味それは正解だったかもしれない。

学校、特に小中学校は卒業する事で得られるアドバンテージも殆ど無く、所詮は勉学を強制する場に過ぎない。

自らを律する事が出来る者からしてみれば、課外活動か社交の場、謂わば暇潰しにしかならないのだ。

人格形成こそが大切だ、などと言った意見は建前上の戯言に過ぎない。

それが不十分である事は、不登校十万超という事実が示す通りだろう。

そもそも上辺だけの付き合いで、真実彼を変えられるのかも疑問だ。子供が真実純粹で居られるのは精々小学校の低学年　丁度、すずか達の年頃が限度である。

来歴は不明、片腕に異常を抱え、自分から友人を作ろうとするタイプでもない。

利害を知り、付き合う相手を選び始めれば、士郎は間違いなく“残る”側だ。

語らなければ周囲も深く知ろうとはせず、自ずと腫れ物扱いになっ
ていく。

（まあ、私が言えた事じゃないけどね・・・。）

さて、私達一族は“徒のヒト”と深く関わらない様にするのが原則である。

秘匿の上での問題は勿論の事、取り分け最大の原因は“違う時間”
を生きているから　つまりは寿命が長いのだ。

二十歳前後、個体として成熟した所から老化が急激に遅くなり、最終的には人間の数倍は生きる事が出来る・・・ギネスもびっくりで

あろう。

今だからこそ言えるが、以前の私はとんでもない根暗少女だった。誘いを黙し、引く手を払い。何時も柵の内側に籠っていた。

結局は怖かったのだ。

知られる事が。そして、拒絶される事が。

ニンゲンじゃない事は、私にとっては劣等感にしかならなかった。だってそうだろう。少数だから潰される、“異端”だから狩られるのだ。

ノエル、すずか、ファリンと家族が増えるにつれて、その傾向は一層強くなっていった。

その後、幸い私は恭也と知り合う事が出来た。

そして段々と“普通の”女学生になりつつある。

思えば、すずかの手を引いてくれているのがなのはちゃん
恭也の妹とは。

（世間は狭いって言うか・・・それとも運命ってヤツかしら？）

この場合は、高町家、或いはあのご両親に縁があると考えた方が良
いのだろうか。

そんな事を考えながら階段を下りた所で、洗面所から小さな影が
出て来るのが目の端に止まった

「おはよう、二人とも早いね。」

「…………おはよう、すずか。」

二人揃って、それに遅れて言葉を返した。
私達の様子に、すずかは疑問符を浮かべている。

「・・・そんな物、ですか。」

隣から再びそんな言葉が聞こえてきた。
さつきは冗談のつもりで言ったのだけれど。
こうして朝一番に皆が揃っているとは、珍しい事もある物だ。

「・・・そんな物よ。」

廊下の時計は、漸く六時 やはり、朝食にはまだ早い。
そんな遣り取りに、すずかは益々首を傾げるのだった。

S i d e o u t

朝食の席、食事の時間は無言の内に過ぎていく。
テーブルには俺達三人が腰掛け、ノエルさんとファリンさんは料理
を運んだ後、それぞれ主人の後ろに控えている。
今日に到るまでと何処も変わらない光景。

ただ一人。

すずかだけは喉に小骨が刺さった様な顔をしていた。
加えて先程からちらちらと此方を盗み見ている。
そして、其処にファリンさんが声を掛けた。

「すずかちゃん、どうかしたんですか？」

「えっ！？・・・うん、何でもないよ。」

忍さんは然らぬ体で食事を続けている。
俺自身気付いてはいたのだが、敢えて触れない様にしていた。
何と言っても、原因は俺だ。

とは言え、これ以上引き伸ばしても仕方が無い訳で。
況して、こんな詰まらない事にすずかが悩んでいると言うのも忍び
ない。

「すずか、今日から俺がお前のボディガードに付くからその積も
りで居てくれ。」

「・・・え、あ、うん。そうなんだ。」

止むを得ず、努めて何でもない事にそれを口にした。
別段騒ぐ様子も無いので、一呼吸置いて食事を再開する

（ふむ、納得してくれたようで幸い・・・）

「「・・・って、えええええ〜！！？」」

(・・・ええー。)

訳も無く。

二呼吸置いてから、食堂に絶叫が響いた。
その声に内心小さく反抗してみるが詮無き事だ。

「お、お姉ちゃんっ、ホントなの!？」

「ええ、本当よ。その為にスーツも用意したんだし。
すずかだつて、何時までも私の後ろを付いて回る訳にはいかない
でしょ。」

「う、うん・・・それはそうだけど・・・。」

それなら、と忍さんは説き伏せに掛かる。
本来ならそれで丸く収まる筈だった。
しかし、其処に想定外の声上がる。

「私はクビですかっ!？」

「「「「・・・。。。。。。」」」」

空気が沈黙に凍り付いた。

自ずと三人の視線は忍さんに集まる。

「・・・って、そんな訳ないでしょっ!」

「そ、そそ、そうですか。」

良かった、とファリンさんがその場にへたり込む。

成程こう言った所が不安なのだと、一人納得してしまった。

「忍お嬢様、すずかお嬢様。お時間も有りませんので。」

「そ、そうね、ありがとう。」

微妙な雰囲気ですぐに固まった儘の俺達は、静観していたノエルさんの声に動き出す。

あの儘放って置かれたら如何なっていたのか気にはなるが、言葉通り時間も無い。

これが不思議な物で、朝は半時間程早かったにも拘わらず、既に予定通りの時間運びになっている。まあ、俺は外を歩いて回って来た訳だが。

この場に冷静な対応の出来る人が居てくれて助かった。

「全く、あなたはもう少し落ち着きなさい。」

「うう・・・すみません、お姉さま。」

ノエルさんは如何にも呆れた様子で溜息を吐きながらファリンさんを立ち上げらせると、お茶をお淹れします、と言葉を残して厨房の方へと下がって行く。

これまで、仕事に臨むきりりとした顔しか見た事が無かったので、その様子には少なからず驚かされた。

それはさておき。

ノエルさんには家事を手伝う事を反対された訳だが、如何もボディガードは許容範囲内に在るらしい。

昨晚の話し合いの場にもいた為、それが何故かを考えていたのだが。

恐らく、此方は手が足りているとは言えないから。

加えて恭也さんと言う前例が有る為、仕事を渡す事への抵抗が薄いのか。

或いは“家事でない事”、この一言に尽きるのかもしれない。

抑々、メイドがボディーガードをしていると言うのも奇怪な話なのだが・・・いや、それさえも完璧にこなすであろう事は見当が付くが。

「でも士郎君、なんで突然ボディーガードなの？」

「ん？まあ、色々有ってこうなった。

バス停まで送るから、その時にでも話す。」

「そ、そうだね・・・今は時間も無いし。」

そうして今度こそ、俺達は食事を再開した。

新年度、朝一番から何とも締まらない空気が漂っていた。

そう、回天の刻が迫っている事に。

この時は未だ、気付いていなかった

ラ艦内。

無数の計器が轟めき、何処か薄暗い印象を受ける一室。

其処に妙齡の女性が二人、並んで作業に臨んでいた。

先程からキーを叩き続けているのはエイミィ・リミエッタ。

弱冠十六歳、栗毛のショートカットには未だ幼さが残るものの、この艦に於ける実質的なナンバー3である。

対照的に、茶を飲みながらモニターを眺めているのがリンディ・ハラウン。

提督にして部隊の指揮官、つまりは艦長を務めているのが彼女だ。

透ける様な翠色の長髪を後ろで束ね、落ち着いた拳措は何処か大人としての魅力を漂わせる。 実際、十四になる男児の母親なのだが、実年齢よりも幾分若く見えよう。

二人が女性である事を考慮せずとも、大変優秀なキャリアであると言える。

先日、定例報告の為に本局へと帰還し、現在は休暇中である。

とは言え、新たな任務も既に拝命しており、明日からは再び次元の海を渡る事になる。

彼女達はその準備の為に、こうして皆よりも一足早く出向しているのだ。

次空管理局、それが彼女達の属する組織の名である。

“次元空間”に文字通り星の数多存在する世界を管理、維持する為に設立された機関だ。

地球とてその世界の一つに過ぎない この場合、宇宙と言った方が正確だろうか。

次元空間と宇宙の関係は、感覚的には紙の裏と表だ。

その間には本来越える事の出来ない壁が有り、それを可能とする技術こそが“魔法”と呼ばれるものである。

加えて次元の名が示す通り、一面の“裏”に対して“表”が多数存在するのだ。

我々が太陽系と呼ぶ十数から成る惑星群の範囲で見ても、彼等は何千として観測している。

それこそが、管理局が数百の星々の管理を可能とする所以である。

さて、今度はトランプでも想像して貰いたい。

裏側はいつも同じ柄だが、捲ってみれば其処には52の表が存在する。

勿論、表に多次元で裏が存在する可能性も否定は出来ない。

しかしながら、彼らが航行出来る裏側は次元空間唯一つである

「失礼します。艦長、お呼びですか。」

部屋の後ろの扉が開き、一人の少年が挨拶と共に部屋へと入ってきた。

黒髪に整った顔立ちであるが、やはりそれは幼い物で体格的にも未成熟 到底この様な場所に相応しい人物とは思えない。

リンディはサイドデスクにカップを置くと、椅子を回して其方に体を向けた。

「ご苦労さま、クロノ。久しぶりの休暇は楽しめたかしら。ずっと家に居たみたいだけど、偶には街に出てはめを外さない駄目よ?」

「十分楽しみましたので気遣いは不要です。

局員が居ないとは言え、余り私的な話題はお控え下さい。

それと、計器の周囲ではカップをご遠慮いただくよう進言した筈ですが。」

クロノ・ハラオウン、他でもない彼女の息子である。

その若さにも拘わらず管理局屈指の実力を持つ執務官であり、魔導師ランク 魔法を戦闘手段として行使する者の戦闘能力を測る公式な格付け はA A A +。

大人を含む局員の中でもA A Aランク以上は5%に満たない事を考えれば、その非凡さが自ずと知れよう。

「もう・・・つれないわね、防水だって完璧なのに。

そうやって頭ごなしに否定するから余計な争いが起きてしまうのよ?」

「それとこれとは関係ありません。それで、話と言うのは?」

その場の様子だけを一見すれば、鳶が鷹を生んだなどとも揶揄されようが。

彼の場合、真面目である事が取り柄であると同時に、少々度が過ぎている。

これも不器用な子を持つ母親からの、一種のコミュニケーションと言えよう。

「・・・エイミー。」

「はいはい、これですね。」

しかし、そんな表情も話題が変われば一変する。

其処に浮かぶのは紛れも無く、指揮官のそれであった。

隣から声を掛けられたエイミーは一度作業の手を止める。

そして、パチパチとキーを打つ音と共に、モニターに二つの報告書が上げられた。

「先日観測された小規模次元震についてですか　　っ！？
未登録ロストロギアの輸送事故・・・。」

「事故自体は次元空間を航行中に起こった物だけれど・・・。
この二つの案件、座標がほぼ一致するわ。こんな偶然って有るのかしら？」

「・・・・・・・・。」

ロストロギア　　過去に滅んだ超高度文明から流出するオーバー
テクノロジーの総称であり、取り分けその産物を指す事が多い。
その大半が解析不可、乃至使用に危険を伴う為、主に管理局がその
管理、保管を担っている。

現場での取り扱いや、その回収は技術面に特化した専門機関が管理局には存在する。

この艦にしても、戦闘を主眼に武装局員を乗せた部隊である為、本来そう言った物は畑違いなのだが、それが持ち出されると言う事は即ち次元犯罪が絡む事を意味する。

現実的に専門外である筈の前線がその対処をせねばならない
往々にして悩みの種になりがちな代物である。

「今朝、その発掘を行っていた一族から通報が有って議題に上がったそうよ。」

けれど、先方は既に回収に回ったらしくて、局が動く事を渋ったらしいわ。」

「面子ですか・・・下らない。」

そう吐き捨てて、少年は資料を読み進めていく。

この情報のソースは管理局提督、レティ・ロウラン。

リンディとは同僚であり、友人でもある。多忙な中でも機会があれば会っている事を鑑みれば、親友と言って良いかもしれない。

本局の運用部に勤務しており、部隊の配置を取り仕切る立場上、事件、事故に依らずほぼ全ての案件に関する情報を有している。

そんな彼女が機密のリークと言われても可笑しくないギリギリの行為を続けねばならないのは、偏に管理局全体の繋がりの弱さに在る。こうして様々な情報を多角的に分析してこそ、現場に於ける不測の事態を未然に防ぐ事が出来ると言う物だ。

「次元震、ロストログア、輸送事故。」

三つの要素の内二つでも其処に事件性を疑わなければならないわ。」

「・・・事故ではないと?」

「少なくとも、何かがあるのかもしれないわね。」

「・・・・・・・・」

取るに足らない推測かもしれない　　事実、上層部はそう切って捨てた。

しかし、彼女の中では断定。或いは確信にさえ成りつつあるのだろう。

その言葉を聞いていた二人も、重苦しい空気に息を呑んだ。

「先日の次元震は観測班が動いただけで、その調査が私達の任務の中にも入ってるわ。」

言ってもグレードは低いし、上から順番に回っていくしかないけれど　　」

「本星は第97管理外世界、そう言う事ですか。」

勿論、他の案件について手を抜く訳ではない。

しかしながら、実動を、それも火急に要する案件とは、その概ねが災害救助などの戦闘を伴わない物だ。

本当にそれだけならば、戦闘を前提にした装備も訓練も不要と言えるが、そんな中で彼等の様な武装部隊が存在するのは、やはり次元犯罪への睨みと言った意味合いが強いだろう。

その点に関して言えば、彼の言葉も一面の真理である。

「レティも同じ事を言っていたけれど。」

根拠にしては如何しても弱いし、増援は当然貰えない。

あなたには負担を掛けるかもしれないわね・・・。」

所詮は可能性に過ぎず、現実に対処すべき案件は他に幾らでもある訳だ。

上の決定に逆らってまで強行する様な局面でもなければ、それに従う事しか出来ない現状は、宛ら組織の大きさ故の硬質とでも言えよう。

そうして些か沈んだ様子を見せる母親に、少年は事実^にに氣遣いを込めた言葉を向ける。

「……心配要りませんよ、アースラのクルーは優秀です。勿論、その艦長も含めて。」

「クロノ……ええ、そうね。期待しています、クロノ・ハラオウン執務官。」

少年はそれに敬礼で返すと、背を向けてそのまま部屋を後にした。扉が閉まるのを見届けた後、彼女は椅子に深く凭れ、隣で作業に戻ろうとする少女にも声を掛けた。

「エイミー、あなたも少し休んだらどうかしら？」

「そうですね……それじゃあ、お言葉に甘えて。」

言外に、一人にしてくれと。そうして部屋には独りが残される。

彼女は溜息と共に正面へと向き直り、脇に置いたカップへと手を伸ばした。

既にそれも温くなっているが、渴いた喉を潤す分には丁度良いのだろう。

「……馬鹿ね、逆に気を遣わせるなんて。」

そう独り言ちたのは自身への嘲笑だろうか。

ロストロギア それは彼女にとって仇敵^にとも言うべき物だっ

た。

管理局に勤める以上、避けては通れない相手であるが、未だにその過去は振り切れていない。

こうしてその存在が目前に現れる度に、失う事への不安が彼女を押し潰す。

今も、部下の前では決して見せない儂さを呈していた　しかし、それを曝け出せる相手はもう居ない。

彼女自身、自らの心の内を知ることこそ、首を振って思考を切り替える。

視線は正面のモニターへと向けられ、そして

「一体、何があると言っの・・・。」

“　　地球。”

聞き慣れない現地名称。
小さく、それを呟いた。

初も、知らぬ間に。

星の歯車は転輪す。

遅々に、然れど促々と

第7話、遅れてすみません。

まあ、学業優先なのでその辺は察して下さい。

しかし、またしても一話の中で雰囲気ギャップが・・・。

特に、土郎さんから土郎君への切り返しが悪い意味で凄まじい（おい時間通りに追っていくとこうなってしまったが、拘り過ぎなのだろうか。

加えて文章量。初めの頃なんか五千とかも在るし、序章全体で調節するか？

或いは未熟なこのままを残すべきか（何の記念だ

この話で管理局陣が初出。繋ぎに過ぎませんがね。

リリなのでは管理局が来るのが途轍もなく遅いのですが、ユーノの来る来ないに關係無く、普通に考えて通報は有った筈。

さて、この話を無印に入れるか悩んだけど、最初やはり“彼”からでしょう。

・・・ぶつちやけ出番も少ないだろうし（悲しいかなそれが現実次回から漸く第一章、無印編開幕決定。

余談ですが、タイムスケジュールは・・・

6：00 起床

6：30 朝食

7：00 準備
7：30 出発
7：40～45 市バス停
8：00～05 スクールバス停
8：15 学校到着

・・・ぐらいを想定しています。

自分なんかは起床から登校まで食事込みで平均二十分弱ですが、優雅な生活と呼ぶからには、これぐらいの時間的ゆとりが欲しいものです。

通学一時間超えは小学生にはキツイ気がするので、スクールバス停は比較的学校付近に位置付け。

実際、塾まで歩いて通う描写からも、市街地とそう離れてはいない事が窺えます。

市バス停からスクールバス停の間は、月村邸から住宅地までの十分+停留等で五分。

実際、地図でも書いて（妄想して）みれば良いのかもしれませんが、一つの市なんて真直ぐ走ればそんなに大きくない訳で。

まあ、こんなもんが妥当かとも思ったり。

彼は誰時、夢魘^{くらやみ}が尚も押し包み。

其は遠く、寐る“彼女”の胸にこそ逆夢を。

奈落へと沈み逝く林道は風に揺れ。

喬木が宛ら生きた闇穴と為りて。

その間隙に、二条の魔風が奔る。

然はあれ、其処に“色”を帯びて。

“黒”と、“緑”と。

その二筋が寄りては離れ、往かず、付かず。

交わる度に、闇夜を照らす眩い閃光が散った。

能々見れば、影は禍々しい異形の化物。

片や、光は本の幼い子供が発した物である。

しかし、少年は大の男にも勝る速度で。

草木の生い繁る暗中の悪路を疾駆する。

睨み据える視線の先には黒色の背が収められ。

彼が紛れも無く追う側である事を示していた。

そして、鬱蒼と繁る樹々の開けた一角。

暁闇を仰ぐ其の場で、両者は足を止めた。

廻る陽は山の端を赤く染めるが。

東雲の空、未だ煌めく太白を右に託し。

玄天に揺らぐ月影が少年の姿を照らす

男にしては些か長めの金髪、中性的な相貌には先程同様、緑の光が揺れる。

上下は袖も裾も短く切られ、その上に見慣れない意匠が施された胴着を重ねている。

取り分け、何より目を引くのが膝まで届く外套、端など如何にも煤けた風なそれを羽織い、胸の前で留めていた。

その風采はこの国の人間からしてみれば、ある種異様に映っただろう。

実際、彼は“この国”の者でなければ、“この世界”の生まれではない。

名をユーノ・スクライアと言う。遺跡発掘を生業とする“スクライア”の一族で、それ故に定住する居場所^{セカイ}を持たない謂わば流浪の民だ。

さて、そんな彼が息を切らし、傷だらけに為りながら。

夜も明け切らぬ頃、この様な場所で“魔物”と戦っているのは何故か。

言うまでも無く、原因は茂みに蠢く黒い影にこそ在る。

正確には、其れを魔物と・・・“生”と呼ぶ事は出来ない。

宛ら純粹な“魔”とでも評するのが適切であろうか。

“ジュエルシード” 彼等一族がつい先日発見したばかりの未登録ロストロギア、それは一見すると綺麗な宝石の様に思える、指先程の小さな一欠の結晶に過ぎない。

それも、少年は遙か往昔の書物を紐解く事で其の名を知り、加えて其処には如何に危険な代物であるかが克明に記されていた。故に。発掘を終えた直後、其れ等を管理局へ委譲する運びとなったのだ。

しかし、それが門送りとなる。
事故が起きた、不幸な事故だ。

何の危険も無い旅路だと、注意を怠った事に起因するのかも知れないが。

結果として“貳拾壺”の災厄の種は一つの星へと降り注いだ。
選りによって、管理外世界の惑星“地球”へと

事故が起こったのは此方の時間で二日と少し前。

そして、それから大よそ一日が過ぎた頃になるだろうか。

積荷と共に発った同胞から、報せの一つも無い事が不審に思われ始めたのは。

確かめようにも彼等の行方は終ぞ掴めず、急遽組まれた後発隊が同じ航路を辿った。

誰もが最悪の結末を予感する中、やがて船は彼岸へと行き着く。
奇しくも、それは管理局の制空域まで後僅かと言ったところだった。
逢ったのは爆発の残滓、幾許の遺物・・・無慈悲にも、時つ海には

その爪痕が歴々と刻まれていた。

間も無く、その凶報が一族の皆の下へと届く。

悲嘆に沈む一室には、少年の姿も在ったが。

彼は別段取り乱しもせず、只管に宝石の行方を探った。

ただ闇雲に影を追うだけでは、砂中の一粒を拾うも同じ。

故に、気流ながれと風向ふうきを読み解く事を選び、やがては一つの仮説に至る。

“既に自分達の手の平セカイから零れ落ちてしまったのではないか”

そして、僅かに数時間前の事だ。彼の苦心は漸く実を結ぶ。

正しく風に乗った柳絮の種子。羈絆を失い、宙に漂う中で。

知らず国境を跨ぎ、不可侵の遠山里ほしへと流れ着いていた。

其処には不審な魔力反応も見られず、この件は不慮の事故と断じられる。

しかし。

少年は残る事態の究明を周囲に任せ。

己が身一つ、渦中の世界へ跳び込んだ。

唯その手に“赤い宝石”を握って。

彼の頭を過つたのは悪い予感だった。

然れど、それが間違いではなかったと知る。

そう、“想いの種”は既に発動していた。

確かに、其の状態も決して完全と言える物ではなかった。
魔力とは煙と同じで消散していく物、それ単体で空間に留まる事が出来ない。

今も影は広がる端から千切れては消えて行く／その都度種子が新たに芽を出して刳る

差し詰め、パイプも無しに直接給油し続ける燃焼機関。ガソリンはただ漏れで何時爆発するかも分からないが、その効率は規格に比べればずっと劣る。

此の遺失物も、生物という確たる受け皿が。或いは、其の奔流の舵取りとなれる者が在ってこそ真価を発揮するのだ。

そして、彼が真実恐れているのは起こり得る最悪の事態、爆発・・・
“次元震”こそであった。

然れど、果てに重ねて天は翳り。

元より少年の表情は決して余裕の有る物ではなかったが。
事此処に到って、それが一段と険しい物へと変わる。
そればかりか、其処には明確な焦りさえ覗いていた。

そう、既にこの瞬間。

互いの立場は逆転していた。

狩る側と、狩られる側と

少年は内心、悪態を吐く“万全の状態であれば”と。

彼の魔導師ランクはA。本来、この状況を納めるだけならば十分な素養である。

にも拘らず今現在、彼から感じられる“魔力”は本当に微弱な物であった。

それもその筈、先刻まで居た世界から此処まで超長距離の次元転送を行った訳だが、設備的補助も無しにそれを行うのは一級の魔導師でさえも相当に消耗する行為なのだ。

結果、未発動の・・・つまり、唯の宝石の状態のジュエルシードを一つ回収する事に成功したが、簡単な休息さえ取ろうとはせず、そのまま搜索を強行した。

間も無く、幸か不幸かこうして二つ目に遭遇する。

長時間に亘る強行軍が彼の体力と神経を磨り減らし、コンディションは極めて悪い。

さらに言えば、彼が得意とするのは飽く迄も後方支援 仮にも魔法学院で魔法教育を修めてはいるのだが それ故に、攻性魔法と括られる物を極端に習得していない。

詰まる所、一人で戦場に赴くスタイルではなく、故に狂える魔獣を抑え込む手を拱いていた。

そんな極限状態に在る彼を突き動かすのは、たった一つの感情“責任感”。

曲がりなりにもジュエルシードの発掘チームに於いて主任を務めていた。

“自分が其れを見付けてしまったから。”

強い自責の念から、彼は災いの種が齎す“禍”を極端に恐れ、こうして己を殺し、事態解決のため身を粉にしているのだ。

それも、今は限りに。

一陣の旋が荒び、彼の外套が大きく後ろに靡いた。
それは宛ら追い風の如く／それが彼にとっては向かい風

理性を持ち得るのか、或いは本能でも宿っているのか。
暗黒から小さな影を捉えていた朱い双玉が一際妖しく光った。

対して、彼の右手に輝くのは赤い一粒。
ジュエルシードを抑える為に必要な兵器。
オーバーテクノロジーと言っても過言ではない、技術の粋。

『 ！ ！ 』

キイキイト、酷く耳障りな金切り“音”を発しながら。
黒い影は茂みを跳び出し、赤い月の下へと踊り掛かる。

しかし、少年も然る事ながら・・・否、事態はある意味で彼の
狙い通りに。

其の姿が視界に収められた時、既に持つ手は正面へと掲げられ。
宙空には金緑の幾何学模様が二重、三重と映し出される。

「妙たる響き、光と為れ。許されざる者を封印の輪に！」

此の時。最早、彼自身は止まった車に等しかったが。
それも正面から対向車両に時速百キロで衝突して来られれば如何か。

当然の事ながら大惨事、お互い徒では済まないだろう。

詰まりは、文字通りそれをしようと言うのだ・・・無論、馬鹿げた方法ではある。

しかしながら、その様な手段を求める程に絶望的な戦況でもあった。

幸いにして、理性の未熟な其れは彼の思惑に気付く事も無く。

或いは、本能以敗北が無い事を悟っていたのか。

凶^{まが}つ星を背に跳び上がり、今将に少年へと降り掛かる　　！

『　　！！』

「ジュエルシード、封印っ！！」

そして、白光が闇の現を覆った。

「くっ・・・！！」

空を揺るがす轟音と共に、凄まじい衝撃が少年を襲う。

それも尚、傷付いた右腕を酷使し。皮は削げ、筋は切れ。

やがて、行使者^{かれ}を守る為に“理性^{インテリジェント}を持った魔導^{デバイス}端末”は命令に背く。

魔法陣が一層強く輝いたかと思うや、外敵を大きく弾き飛ばした。
肉塊^{まじよく}を散らしながら這うほうの体で、捕らえ損ねた其れは逃げ出して往く。

「・・・えっ!？」

しかし、それに驚かされたのは彼の方だった。
或いは腕一本差し出せば捕らえる事も出来たのだろうか。
そんな考えが頭を過ぎるが、何よりも。今、その心を襲うのは虚脱感。

膝を、掌を地に落とし。見詰める先では影がどんどん小さくなる。
やがては、其の姿も深い茂みの中へと消えて行った。

「逃がし、ちゃった・・・追い掛け・・・なく、ちゃ。」

既にその身は満身創痍、再び追い詰められるだけの体力は無い。
それ許りか、絶望に打ち拉がれた彼からは立ち上がる気力さえも失われつつある。

しかし。

段々と重くなる瞼には、その心中を嘲るように味爽マイソウの様が映し出される。

そうして肘は折れ、上体が完全に冷土へと沈む。

それでも。

今、この儘では居られない。

“アレ”は危険な存在なのだと。

彼の理性は頻りにそれを訴える。

だから。

そんな物は万に一つ・・・いや、億人億人に一人。

正しく一縷の希望とでも言えたのだろう。
“魔法文化”の存在しないこの世界では。

『誰か・・・僕の声聞いて。』

特定の誰でもなく、ただ“念”^{コエ}を飛ばす。
残された一握りの魔力、その届く限りに。

それが、彼に出来た最後の抵抗。
本当に心許りの僅かな可能性に縋って

『力を、貸して・・・魔法の、力を・・・。』

そして、確かにその声が。
“彼女”^{キコエテ}には届いていた

Episode 08・賓人來たりて } First Cont
acts }

「それじゃあ、いつてきます。」

「ああ、気を付けてな。」

そう言つてにつこりと此方に微笑むと、すずかはバスから降りて行く。

停留所では既に生徒達が幾人か並んでおり、その傍に大人の姿も見える。

教師とは考え難いが“Parent-Teacher Association”所謂PTAと言う奴だろう。

俺が降りるのは道を別れて更に先の“風芽丘図書館前”なので、付き添いは此処までだ。

加えて忍さんにも、此処から先は学校側に任せておけば良いと言われている。

ボディーガードとして付いたは良いが、正直する事も無かつた。

海鳴の街は平和その物であり、それ自体は至つて良い事なのだが。

抑々、考えてみれば街中、それも日の出ている内から荒事になるなど、通常は考えられない。それを万が一に備えて付いていると言ふべきか。

此処までの主な仕事は、お嬢様すずかの荷物持ち、お嬢様すずかとの雑談……以上。

或いは小姓ならそれでも構わないのだが、今一つ警護の為に動いている感を得られないのが悲しい所である。

さて、十分も経たない内にアナウンスが目的地への到着を告げる。他の客の最後尾で運賃を払うと、バスから地に足を下ろした。

こうして公共交通機関を利用できるのも金の有つてこそ。

昨晚、経費兼小遣いと言う事で紙幣と硬貨の入った二つ折りの黒い財布を、この黒服に合わせて渡された。

その際に中を検めると、万札二枚に細かい所で一万の計三万が納められ。

それも毎月渡す上に、足りなくなったら言えとの事で、詰まり単純に日割りで千円。

貰い過ぎだと抗議はしたが、必要経費であるとそのまま受け取る運びとなった。

しかし、市バスは定額二百円、往復しても四百円。

食事は家に帰って来るか、出歩くなら弁当の数を増やすと言われているので、外食も無ければ半分以上が残る事になる・・・やはり、貰い過ぎと言わざるを得ない。

今も三千円程を手元に残し、後は部屋の引き出しに置いて在る。若い内は金を貯めるとも言うが、それはまた別の話だ。

とは言え、こうして一人悩んで解決する問題でもないので歩みを進めた。

案内板に従い歩道から階段を上った先、ガラス張りの大きな建物が目に映る。

Ｌ字型に二棟が繋がられ、図書館にしては何と言うか・・・モダンな外観である。

中に入ると左手に受付が置かれていたが、本を借りる予定も無ければ、真っ直ぐ蔵書の方へと足を向ける。

立派な施設とは対照的に、目に付く利用者の姿は疎らだ。

開館間も無い朝早く、況して平日なのだから当然であろうか。

建物自体は五階建て。吹き抜けの広々とした読書スペースは外からの光がガラス越しに降り注ぎ、その対面に無数の本棚が並べられていた。

見上げていた目線を正面に戻し、勝手の分からない館内を歩き始める。

（まあ、下から順番に見て回るしかないか・・・。）

其処に明確な理由が有った訳ではない。そう、ただ何と無く。本を“探す”為に案内板を“探す”、と言うのがイヤだった。

そうして開架へと足を向けるが、幸いその文字を一番奥に見付ける事が出来た。

“法 / Law”

憲法、法律、法令等々。言うまでもない、其れだ。

一昨日からの二日間を使わせて貰った書斎には、経済学や商学から、文学、哲学まで本当に多彩な本が置かれてはいたのだが。

国内の書物、取り分け標準的な物の数が極端に少なかった。

忍さんには申し訳ないが、希書珍書で一般常識の確認は出来ない訳で。

現に今、俺が手に取るのは棚の一角を占有して置かれた国内法の基本。

同時にその全てであると言っても過言ではない、法典“六法”。

その全篇を読破しようと言う訳ではないが、注意すべき箇所のみを確認する

「ふう・・・。」

早一時間になろうか、右肘だけを上げて凝り固まった体を伸ばす。

マナー違反ではあるが、本棚の前に立つたまま読み耽っていた。
左手で本を持ち、右で紙を捲る訳だが、サポーターのお蔭でこれが
存外にしつくり来る姿勢だった。

まあ、それは良いとして。

結局、この場に足を運んだ意味は殆ど無かったと言える。
何となれば、条項が記憶と寸分^{キロク}違わない物であったのだ。

恭也さんが平気で刀を振るっていたり、割と危ない世の中なのかと
考えもしたが・・・“銃砲刀剣類所持等取締法”。

忍さんが行った戸籍の改竄は“公正証書原本不実記載”に相当する
だろう。

どうも、俺の周りに居る人達を基準に判断しない方が良さそうであ
る。無論、それを咎める気も無ければ、感謝さえしている訳だ
が。

加えて判例集などを見る限り、正当防衛にはやはり“程度”が設け
られていた。

まあ、実際にそうなってしまったとして、十歳そこそこの小僧が大
の男を返り討ちでボコボコにしたなどと、何とも冗談めいた珍事と
して取り上げられようが、月村家に迷惑は掛けられない。

ボディガードをするのは良いが、あの剣^{ぶき}を使うか否かも一度相談
する必要があるだろう。

壁に掛けられた大きな時計は九時半を指している。

今日は始業式とホームルームだけなので二時限終わり。

十時半頃に迎えに行く予定なので、移動を考えても未だ三十分は余
裕が有った。

そうして当ても無く館内を彷徨く内に、ある一角で足を止めた。
見上げる先に在るのは一冊の国語辞典、それを手に取りぱらぱらと
流し読みにする。

しかし、その手も然る一行に留まる。

“せいぎ【正義】”

- 一、正しいみちすじ。人がふみ行うべき正しい道。
- 二、正しい意義または注解。
- 三、社会全体の幸福を保証する秩序を実現し維持すること。

思わず、自嘲的な苦笑が漏れた。
再びこんな事を繰り返している自分に対して。

それでも

“本物の正義の味方になって見せる”
その言葉が、この胸には確かに刻まれていた。

(・・・馬鹿か、俺は。)

唯自問だけを繰り返す、めざめのアクト過ぐ世の闇を振り払う様に。
表紙を持つ手に力を込めると、音を立ててそれを閉じた。
手にした一綴じを書架へと戻し、指は本の背に掛けた儘で。
一度目を瞑り、首を振ってから頭を上げた

(・・・ん?)

一瞬、視線の先に“ダレカ”の姿が映った気がした。再び影を探すが、僅かな棚の隙間では一段先が覗くだけである。何と無くそれが気になって、前の方へと歩みを進めた。

そして、その足は直に止まる。

視線の先に在るのは車椅子に乗った一人の少女の姿。

黒に薄く茶の差す髪を肩までで整え、歳は見た所すずか達とそう変わらない。

今日、此処に居るといふ事は、普通の学校には通えていないのだらう。

今は如何にも必死と言った様子で棚の上段へと手を伸ばしている。傍に親は居ないらしい・・・周囲の大人達も気付いているだろうに、先程から視線を逸らすか、物影へと消えて行くばかりだ。

(はあ・・・見てられないな。)

このカラダも他人の事は言えない状態なのだ。

今朝はバス、図書館と比較的落ち着いた場を通っているが、繁華街に出れば後ろ指を差される事も有るだろう。

それが俺自身に対する物ならば一向に構わないのだが、彼女の様な普通の少女がそんな目に遭うのは気に食わない。

態とらしく一度溜息を零し、其方へと足を向けた。

Side : はやて

「ん．．．。」

窓辺から差し込む光が眩しくて目を覚ます、いつもと同じ穏やかな朝。

彼女の目覚めは何時も独り

今では全く動かない半身を引きずりながら、ベッドの脇に置いた“足”へと体を移す。

そはにいる
手を貸すべき“ダレカ”が居ない

車椅子を漕いで部屋を出ると、直ぐに在るのは団欒リリィンクの間。

けれど、そこにはいつも薄暗闇の冷たい沈黙が染み渡っている。
まな板を叩く音であったり、テーブルで新聞をめくる姿であったり。
そんなモノを思い描く事もあったけれど

そう、私には両親が居ない。

物心の付いた頃にはもうその姿は無かった。

顔も、声も忘れてしまった．．．初めから覚えてなかったのかもしれない。

ただ、そういう人達が居た筈なんだと、知識の上でだけ理解している。

頭の片隅。微かに残っているのは黒い衆会、私もその中の一人だった。

訳も分からず、ただ周囲に促されるままに動き回っていた数日間。それが大切だった筈の誰かとの、永遠の別れを意味する“儀式”だったのだと。

それを理解したのは、ずっと後の事になる。

今ではこうして料理をするのも、新聞を読むのも私独り。

一年ほど前までは親戚の人なんか来てくれたりもしたけれど。取りあえず、一通り自分で出来るようになってからはそれも断っている。

子供の癖に生意気な事なのかも知れない。

それでも、その人達は家に帰れば“家族”が待っているのだ。

自分の所為で一緒に居られる時間を奪ってしまうのが何よりも嫌だった。

この場合、私が親戚の家に行くのが一番早い解決方法なのかもしれない。

とは言え、この家であつたり、街であつたり。それなりに思い入れもある。

幸い、生前父の世話になったという海外のおじさんが、子供の私には出来ないお金や不動産の管理をしてくれているので、今はそれに甘えさせてもらっている。

けれど、それさえ言い訳なのかもしれない。
本当はただ、待っているだけなのかも。

自分をこんな酷い“ゲンジツ”から、連れ出してくれる誰かを

（・・・あほやな。）

我が事ながら苦笑いが零れてしまつ、そんな物語みたいな事があるものかと。

思い出せない昔を懐かしむのは後ろ向きだと思つけど、あり得ない未来像ばかり夢見るのだって、同じくらいに馬鹿らしい。

物語が作り話に過ぎない事、つまり現実でない事ぐらい理解している。

“神様”なんてモノも居なければ、結局は全部自分でやるしかないんだと。

それもこの足では満足にできないと言つのなら。

せめて、アリエナイ世界をユメミルぐらいは。

もしかしたら居るかもしれないダレかを待つぐらいは。

それぐらいは、許して欲しい

（・・・さてと。）

簡単に朝食を済ませて、外から玄関のドアに鍵を掛けた。

私にとっての生活の場は主に四カ所。

この家と近所のスーパー、週に一回の病院。

そして今から向かうのが、学校ではなくて図書館。

今日から学校が始まるんだと、道行く人が話しているのを聞いた。

世間で言うところの、“普通に”勉強して“普通に”遊ぶ生活。フツウの子供の毎日という物に少なからず憧れもある。だからこそ、私にはそれが酷く縁遠かった。

図書館には勉強のために・・・と言えれば格好も付くけれど、悲しいかなそこまで熱心でもなければ、童話なんかの本を借りに行くだけだ。

本屋に行けば今風な子供向けの漫画であつたり、少し年上向けで良ければ小説なんかもたくさん在る訳だけど。

それをしないのはお金が勿体ないと言うよりも、それが嫌いだから。別に読んでいてつまらないとか、そういう話ではなくて単にキライなのだ。

そこに出て来る子達には“普通に”学校に通つて、“普通に”家族と笑い合う様子が、さも当たり前前の日常であるかのように描かれている。

絶対に手の届かない魔法の世界は見ていて面白いけれど、“もしかしたら”そうやって過ごせたかもしれない日常は見たくない・・・だから、イヤだった。

さて、目的の場所は風芽丘図書館。

家からほんの十五分程の距離にあるので大助かりだ。もちろん、歩いて行ければもっと早いんだろう。

取りあえず中に入り、受付の司書さんに会釈しながらカウンターへと寄っていく。

すると、私が着くよりも早く席を立ち、車椅子の後ろの返却する本

を取ってくれた　　今ではすっかり常連なのだ。
けれど、少し前に勤め始めた新しい人達には、顔を逸らされてしまった。

（ま、ええねんけどな・・・。）

それも慣れている事。普通に考えれば親が傍に居る筈だし、無理に構う必要もない。

街に出れば好奇の目を向ける人も居るけれど、基本的には避けて通られる。

痛ましいとか、そんな形容が私には似合っているのかもしれない。

つまり、可哀そうだけど、誰にしてみても迷惑な厄介者。

“触らぬ神に祟りなし”とでも言うのだろうか。

好きこのんで厄介事を増やそうなんて奇特な人も居ない訳で

（・・・あかんあかん、朝から暗いわ。）

これでは折角の良い天気も陰ってしまおう。

祝いの式には晴れが似合う、まさかこんな事で迷惑を掛ける訳にも
いかない。

取りあえず笑顔を繕って、廊下の先へと進んで行った。

ウツシだされた
投影された心中は、結局泣きそうな力才の儘

目当ての本棚に着くと、読み終えた本のタイトルを追っていく。
面白いかどうかは読んでみなければ分からない事で、基本的には目
に付く物から一冊つつ順番に読んでいる。

（・・・しもた、上の段やった。）

視線が棚の端に到ってそれに気付いた。分かっていたらさっきお願いしたのに。

自分では四段目より上には手が届かない・・・いや、体を伸ばせば何とか取れそうでもある。

もう一度戻るのも面倒だし、少し危ないけれど仕方無い。少し前のめりになり、左手に力を込めた。

（もう、ちょい　　）

「おい、危ないぞ。」

「ひゃっ！？　「・・・っ！！」

そんな声が、横から突然掛けられた。

驚いた私は肘置きから手を滑らせ、そのまま前に倒れ込む。思わず目を瞑ったけれど、床にも棚にもぶつかる事は無かった。

おそる恐る目を開けて顔を上げてみれば、赤い髪の男の子が此方をじっと見ている。

気付かない内に、声の主が間に滑り込む様な形でしっかりと抱き留めてくれていた。

「・・・すまん、驚かせた。怪我してないか？」

大丈夫だと・・・それだけのことが、中々声に出せない。後ろからゆっくりと転がって来た車椅子が足元に触れる。そうして、ようやく我に返った。

「 おおきに。 おかげ様で何ともないです。」

いつまでも凭れているのは失礼だと思ったけれど、お互い動くことが出来ない。

それが私の返答を待っているんだと気付いて、取りあえずお礼の言葉を向ける。

良かった、と頷きながら。 その子は車椅子に戻る手を貸してくれた。

「すまん、今のは俺が悪かった・・・本、取ろうか。」

そう言つて、男の子は申し訳なさそうに本棚の方へと視線を送った。 そんな彼にもう一度感謝を口にして、端から二冊を取ってもらった。

改めて見てみると歳はそう変わらないけれど、おかしな格好をした子だ。

かっちりとしたスーツなのに左腕を首から吊っているし、片手だけの黒い手袋。

その姿にはどこことなく違和感を覚える。

「 ああ、これは義手なんだ。」

サイズが合つてなくて奇怪しいから、こうしてるけどな。」

見られているのに気付いて、種明かしというか。

苦笑いを浮かべながら彼自身の歪を教えてくれた。

なるほど言われてみれば、左腕が右よりもずつと長い。

合わせて腕を上げて、それがちゃんと動く様子も見せてくれた。

「学校には行っていないんですか？」

車椅子を押してくれている男の子に言葉を向ける。

あの後、本を借りて帰るだけだと伝えたら、用事は済んでいるので送ってくれるという事になった。

前を向いているから見えないけれど、今は普通に両手を使っている。

「ああ、飛び級で中卒って事になってる・・・一応。」

何と言うか、本当に物語の登場人物みたいな子だ。

言葉後が気になるけれど、それを尋ねる間もなく問い掛けが返された。

「君の方こそ、通っていないのか？」

「あはは・・・私はこんなですから。」

藪蛇だった・・・そんな風に思いながら足を叩いてみせる。

しかし、お互い“きみ”などと呼び合っているのも可笑しな話。折角こうして居られるのだから、遅れてようやく自己紹介を。

「八神はやて言います。平仮名で“はやて”、変な名前やろ。」

「・・・そんな事無いぞ、良く似合ってると思う。

俺は
」

(・・・?)

そこで一度、何故か言葉を詰まらせた。

どうかしたのか気になって頭を後ろへ向ける。

何て事はない、ぼうつと空を見上げる男の子が居た。

そしてそのまま、私ではない“ダレカ”に答えるように。

この場に居るもう一人、他でもない彼自身に語りかけるように。まるで忘れていた事を思い出したように、一つの名前を呟いた。

「エミヤ　　そう、衛宮士郎。」

・・・名前で呼んでくれれば良い。」

私の方へと視線を落とし、今度は驚いたような表情を見せる。どうかしたか、と問われたのに作り笑いを返して首を振る。そう、そんな事よりも。今は大切なことに思えたのだ。私の名前を似合っていると言ってくれた彼には

「士郎君。私も名前で呼んで下さい。」

「む・・・了解した、はやて。敬語を使う必要も無いぞ。」

「さよですか・・・あゝ。さよか。」

取って付けたように言い直したのが可笑しくて笑い合う。

今度は本当に心からの。

そうしてゆつくりと道を行きながら、取るに足らない談笑は続く。
こうして居られるのが何よりも。

燦々と降り注ぐ陽の光が、今はとても心地良かった。

けれど、楽しい時間というのは直ぐに過ぎ去ってしまう。
見慣れた十五分の光景は、途切れた記憶のように終点^{しま}だけが置かれていた。

「・・・この家や。送ってもらてありがとうな。」

「そうか。しかし随分大きいな、一人だと色々大変だろ。」

二人で右手の塀越しに家を見上げる。

視線の先に在るのは住み慣れた白い家。

士郎君の感想はもつともだと思う。

実際、二階までは手が回っていないし。

「まあ・・・慣れっこや、部屋はぎょうさん余つとるけどな。」

「はは、はやてに拾われてたら此处に住んでたかもな。」

「あはは、それも悪ないかもしれん。」

そうだったら良かったのに、と

けれど、そんな“もしも”が無くたって。

こうして出会えただけで十分嬉しかった。

それ以上は過ぎた物とでも言うべきだろう。

ここに着くまで、私は決して他人に話さないような事まで喋っていた。

私と同じで病^{イタミ}を“抱えている”事が見て取れるから、安心したのか
もしれない。

士郎君もそれに気を使ってくれたのか、同様の事を話してくれた。

足でなければ腕でもなく、其の小さな胸の裡側に

それは両親わかれの事であつたり、歪カラダの事であつたり。
気付いたら月村シラナイの家に居たとか、どこまで本気なのかは分からないけれど。

こうして私の事を見てくれているのが。ただ、何よりも嬉しかった。
或いは少年にとつても、其れが救いとなつたのだろうか

だから。

「・・・また、会えるかな？」

「そうだな、縁が有れば」

別れ際、心から零れてしまった感情が口を吐いた。
普通にさよならして、縁が有ればまた巡り会う・・・それで良かった。

こんな事、言つつもりじゃなかったけれど。

肩越しに後ろを見上げた私の顔を覗き込んだまま、彼は言葉を詰まらせる。

そして、本当は一番聞きたかった“未来”ヤクソクを口にしてくれた。

「・・・あゝ。いや、また来る。」

「・・・んっ、約束や！」

別に、何かから救ってくれた訳じゃない。

ただ、今朝みたいに気分が沈んでいる時に。

孤独を忘れさせてくれる“誰か”が居るのが。

“本当の意味で”私を見守^{となりにいて}ってくれる誰かというのが。
何よりも、温かく感じられたから

（ヒーローか・・・おるもんなんやね。）

やがて、その背中はずがって行く。

最後に、少し離れた所からもう一度だけ手を上げて。

私はその姿が見えなくなっても、ずっと路を眺めていた

S i d e o u t

「
で、どうしてあんたはそんな格好なわけ？」

「はは・・・まあ、色々“遭^あ”ってな。」

「ふん？」

前に行くアリサが素朴な疑問を投げ掛けて来る。

釣られてなのはも此方を振り返るが、対する俺の返答は如何にも等閑だ。

何となく、などと答えては怒られそうだったので言葉を濁した。

「えっと・・・土郎君が私のボディガードをしてくれる事になって、それで」

「うんうん、土郎くんが居てくれたら何かあっても安心だよね。」

「・・・ん、そうなの？」

・・・のだが。さすが今朝の騒動とその経緯を簡単に説明してくれた。

其処に深い意味が在る訳でも無し、三人はそのまま談話に没頭していく。

さて、俺が図書館を発ったのは十時前。それからはやてを家まで送るのに十五分。

地図で見る限り学校への道程は一キロ弱、十分も有れば着くだろうと考えていた。

しかし、何と言っても子供の足。結局、二十分近く歩く破目になった。

思えば、行けると判断した根拠が不明瞭。それこそ、直観とでも評すべき物だ。

腕から流れ込んだ知識と、自分のそれとの区別が曖昧になっているのだろう。

それはある意味で“自分の物”に為ったとも言え換えられるが、部分的な齟齬までカバーし切れていないのが悲しい所だ。

これでは、良いのか悪いのか判別し兼ねる。

とは言え、そのお陰か地図を読むだけで此処まで迷わず辿り着く事が出来た。

道中、傍を通った公園の時計で十時半を回ったのを確認していたが、幸いにして、すずか達が歩いているのを見つける事も出来た。この結果を思えば“良かった”と言つべきなのかも知れない。

そして今、向かっているのは街中の学習塾。

すずかとアリサが通っている其処に、今年度からなのはも列席するそうだ。

今日はこの後、講師への挨拶も兼ねて下見に行く事になっている。

其れはさておき、先程から如何も視線を浴びている気がしてならない。

制服の一団の中に異分子が居るのだ、当然と言ってしまえばそれまでだが。

しかし、それも想定していたような好奇や侮蔑の類ではない。

強いて挙げれば“敵意”に近い。何と言うか・・・背中に刺さる。

周囲を見渡すと、視線は一斉にさっと退いていった。

（はあ・・・何だかな。）

今まで如何していたのか詳しくは知らないが、無事に過ごしているのだ。

俺が余計な諍いを呼ぶ様なら、寧ろ来ない方が良いかも知れない。

そうして内心溜息を吐きながら、今度は辺りの景色を眺めた。

聖祥の学区は臨海公園の一角に広がる園林で都心部と区切られてい

る。

こうして見渡す一面も建物は疎らで、緑の方が幾分多いように感じられた。

排ガスと娯楽に塗れた市街地よりも、学習環境には適しているだろう。

まあ、子供達からしてみれば別の言い分も有るだろうか　など
と思いながら。

ぼうつとしていると、アリサが突然駆け出した。

「こっち、こっち。」

「どうしたの、アリサちゃん？」

「ここを通ると塾へ行くのに近道なんだ。
ちよつと道は悪いけどね。」

そう言つて林の方を指差す。獣道とまではいかないが、かなり細い脇道だ。

左右は鬱蒼としており、昼間だというのに本の先までしか見通せない暗がりが続いている。

（ふむ……。）

ポケットから疊んだ地図を取り出し、位置を確認する。
其処にすずかとなのはも一緒になって覗き込んできた。

成程確かに、林沿いを歩いては大きく遠回りする事になる。

「……よく気付いたな。」

「ふふん、優秀な人間は日々坦々とは生きていないものなのよ。」

（まあ、そう言えば差し支え無いけどな。）

この場合“開拓”と言った方が適切な印象さえ受ける。

如何せん、地図を見る限り丸い記号が延々と続いているのだ。

舗装など為されている筈も無く、土は剥き出しの儘。

幸い、人が通る為か殆ど草は生えていなかったが。

「いや、本当。地図にも載ってないのにな。」

「うん・・・そういうのは危ないんじゃないかな。」

「アリサちゃん・・・。」

俺の言わんとする所を察して、なのはが難色を示す言葉を投げ掛ける。

すずかは特にこれとは言わなかったが、向けられた視線は何処と無く冷たい。

それにアリサも些か怯んだが、お返しと言わんばかりの勢いで俺に指を突き付けた。

「こ、こいつが居れば安心なんですよ！」

「はは・・・まあ、確かめたんなら大丈夫だろ。」

警護としては失格だが、街中の小さな林で熊や猪の類が出るとは考え難い。

小冒険も娯楽の一環。俺からしてみれば、無理に止める様な事ではないと思う。

後ろで立腹のお嬢様を放って、一人先に脇道の方へと足を向ける。思う所も有ったが、そのまま俺は暗中の分岐路へと踏み込んで往った。

「・・・どうしたの？」

「なのは？」

林の中へと分け入って、そろそろ半ばに差し掛かった頃だろうか。二人の声に足を止めて後ろを見遣ると、なのはが呆けつと立ち尽くしていた。

両脇の緑も随分と濃くなったように感じられ、既に入り口は遠く、先も未だ見えてこない。文字通り、四方が闇に覆われていた。

「・・・え、ううん、何でもない。」

数秒の間を置いて、なのはは言葉を返しながら此方へと走り寄って来る。

すずか達の呼び掛けに応えたと言うよりも、正しく“我に返った”と言った感じた。

二人は首を傾げていたが、その様子に少女は苦笑いを浮かべている。調子が悪い様にも思えず、俺達は歩みを再開した。

しかし。

「・・・あ。」

重ねてなのは足が止まる。
それも、暗がりの中を覗き込みながら。

「なのは、如何かしたのか。」

「今、何か聞こえなかった？」

その・・・声、みたいナ・・・。」

俺が言葉を向けると、今度は胸に当たる一つを口にした。
すずかとアリサは顔を見合わせ、疑問の表情を浮かべるが。

投影された幻像は昼間の幽闇に沈み。

常夜の荒野は一里を越えて尚冴やかに“影”を射通す。

「ん、別に・・・。」

「聞こえなかった、かな？」

二人だけではない。勿論俺の耳にも、声など届いてはいない。
可聴域の差、或いは“第六感”と括られるモノか・・・それは別に
して。

木の葉が奏でる風波は寂寥に浮かび。

声無き“コエ”が狂瀾の畝と成りて駈け寄る。

彼女は何かを探しているのだと。

理由もなく、何故かそれを確信した。

知らず、俺は持ち得る“感覚”の全てを研ぎ澄ましていた。

『 ！！ 』

警告、アンノウン確認。

光も届かぬ三町先、黙しつ唸る手負いの獅子。

六つ割りの二つが、確かにその姿を捉えた

（ ！！・・・何だ、今のは！？ ）

そうして、再び此の場に立ち返る。

気付けば片膝を突き、頭蓋を驚掴みにしていた。

“ 、 ”

先日の 反応と推断、警戒態勢

へ移行。

「 づつ・・・！！ 」

小さな影が三つ、こちらへと近づいて来る。

視覚が、聴覚が定まらないノニヲシテイタカガ、ワカラナイ
“ダレカ”のコエが、聞こえた気がした。

脳漿を握り潰される様なイタミが奔るノアサグロイ、オオキナ

テガミエル

段々と、世界は色を取り戻し始める。

『それは亡くしたパズルの一欠片を埋める為の。』
目を醒まし掛けた“第六感”^{チカラ}が迫り来る危機を告げる

顔を上げれば、此方を覗き込む姿が映った。

『今度こそ少女達を巻き込む事はユルサレナイ。』
その為の手段と結果が、頭の中には無限に浮かび上がる^{ヒタリウデ}キザマレテイル

撃を。

対象接近。敵性体と想定の上、迎

「くっ・・・三人とも、余りこの場から離れるなよっ!!」

「・・・え、士郎君!？」

未だ感覚の希薄な足を鞭打ち、立ち上がる。
制止の声を振り払い、俺は暗闇へと跳び込んだ。

その瞳には、再び鈍色の光が燈されていた

S i d e : なのは

「・・・ちよつ、どこ行くのよ士郎!」

しゃがみ込んでしまった士郎くんが、立ち上がったかと思うと。
私達に言葉を残して突然林の中へ跳び込んで行ってしまった。
ここを離れるな、と だけど。

『助けて・・・』

「・・・あつ!?!」

「なのは!」

「なのはちゃん!?!」

気付けば、私も林の中に踏み入っていた。
彼の背中を追い掛けるように“コエ”の方へと走り続ける。
辺りを見回せば、地面が所々へこんでいたり。
まだ葉っぱの元気な木が何本も倒れている。

(やつぱり・・・昨夜見た・・・!)

変な夢 知らない男の子と、オバケの夢。

今朝はそれが何なのか分からなかったけど。

今は・・・多分“ダレカ”が、叫んでいるんだと。

助けて欲しいって、私を呼んでる気がするから。

『助けてっ!』

「ちょっと、なのは!？」

息が切れる。

木の根につまづきそうになる。

後ろからはアリサちゃんの声が聞こえた。

それでも。

「は、はっ、多分・・・こっちの、方からっ！」

私の足は止まらない。

走るのを止めようと思えない。

助けてって、聞こえてくる“声”が。

段々大きくなっているのが分かるから。

やがて、薄暗い林の中に目が眩むような光が見えてきた。

ずっと太陽を覆っていた木々が、何故かそこだけは晴れている。

永遠に続くように感じられた樹の海の中でも、確かに燈る一筋。

ようやく見つけたその灯りを、私は必死で手繰り寄せた。

「あ・・・。」

そうして、陽の光の下で。

やっと“その子”を見つけた

「なのはっ！もう・・・あんたまでどうしたのよ、急に走り出して。

「

「い、ごめん・・・けど、この子が・・・。」

しばらくして、アリサちゃんが追いついて来た。

私はその子をそっと抱き上げて、後ろを振り返る。

「 ? フェレットかしら・・・怪我してるみたいね。」

「 うん・・・どうしよう? 」

「 あゝ、もう! こんな時にすずかまで居なくなってるし! 」

私たちの声がうるさかったのか、眠っていたその子が頭を上げる。
小さな緑色の目。その下に、“赤い光”が覗いていた。

(これ、宝石・・・?)

紐を通して首から掛けられた綺麗な丸い石。

瞳に映された其の影は妖しく瑩ひかりを湛え

不思議な色を放つ一粒から目が逸らせない。

吸い込まれる様に少女の指先が触れた

その瞬間。

『

! ! ! 』

「っ! ? 」

頭に写し出されたのはいつか見た光景。^{ユメで}

違ったのは空に浮かぶ太陽と。

焼き付いた背中も見知ったダレカ。

^{スケソコ}どこかで。何か、恐い“コエ”を聞いた気がした。

S i d e o u t

往くは黒、躍る五体が宛ら宙を裂き。

轟々と、風切り音が両の脇を掠める。

暗闇の中へと跳び込んで、どれ程経っただろうか。

風景は異常な速さで散切れて消えるが、息を乱す事は無い。

踏み切る一足が草土に十尺を刻み。

双眼^{しせん}は空隙を縫う様に射通す。

肩から提げられた諸刃^{しよじん}の剣／此の身は傍らに“亡霊”を宿す
それは頭の片隅に仕舞い込んだ“二枚合わせ”の可能性。

だからこそ、こうして確かめる機会を望んではいなかったか。

(・・・・・・・・) (

絶えず迷宮には、二重の旋風が木霊する。

その一つ、まるで黒板を爪で掻いた様な不快な音。しかし、其れが何故か“コエ”なのだと確信出来る。

『 ！！ 』

其の“奇声”が、一段と近くなるのを感じた刹那。

左手に、一丁の拳銃が握られているのを視た気がした。

撃鉄を落とせ。

「・・・っ。」

妄想を振り払いながら、“刃”を覆う“治具”を取り去る。

今の俺にとって、唯一の武器とはこの隻腕ツルギに他ならない。

そうして三間先、木々に遮られた其の姿を映す事は出来ないが。

確かに其処に在る事を知るノ手に取る様に其の動きを追う事が出来る
さらに二つを数えて、漸く其の影を捉えた

『 ！！ 』

「 なっ！? 」

相對して、イの一番に漏れた声は驚愕。

大の男を遙かに超える巨軀は、呼吸の度に（・・・・・・）大きく

揺らめき。

真つ黒な獣毛の中、妖しく恍ひかる“目”と“口”が見出される。

異形の怪物を前に、可能な限りの記憶を手繰り寄せるが。

如何に時間を費やそうと、得られた結論が変わる事も無く。

そうして一所で足を止めた俺に向かって。ソイツは血に染まる赤い
“クチ”^{ナニカ}を、人さえ吞める程に大きく開いて見せた。

（動物！？違う・・・コイツは、もっと違う“何か”だ・・・
！！）

その恐怖とも別種の衝撃に我を取り戻し、後ろへ跳び退いて距離を
離す。

得体の知れない相手に、素手で立ち向かうのは余りに危険だ。

（何か、武器を　　）

撃鉄を落とせ。

「・・・っ、またっ!？」

辺りを見回す頭の中で、幾度と無く妄言が繰り返される。

撃鉄、単純に“銃の撃鉄”^{ハンマー}の事ではないのかも知れないが

“撃鉄を落とせ。”

（だから　　銃なんて持ってない、つってんだろ・・・くそっ!
!）

^{カタワラの}姿の見えないコエの主に向かって、そう吐き捨てながら。

倒れた樹の枝。右の腕程ある切片を左で掴み取り、大地を蹴った。

その瞳は千々に乱れる色彩を宿した儘で

“亡くした力”を取り戻す、因は元より眼前に。^{よすが}

弓手の烙印こそが、泉門の逆手形と為りて招く。
然れど、永牢の鉄扉を開く“鍵役”だけは。

此の時、此の場には居合わせなかった

第八話。漸く無印開幕宣言を出させていただきます。

如何も原作とは程遠い感じに仕上がってしまいました。

さて、このまま士郎君が魔法少年をやらかすか？

それもこれも、なのはが目立たないから・・・いや、高町家の朝を描いても良かったけれど、そんなのアニメでめっさ詳しく語られてるし、別段補強すべき部分が無い所は削ります。

異論は認めます・・・が、あくまで主役は士郎君ですから。

そもそも、リリなのアニメ版は視聴している事を前提に書きますから、それと同じ文章を転写されても読んでいて詰まらないでしょう。いや、それ以前に見てない人は読んでないか？

そうになると、やはりやはり。

中身の方は相も変わらず、日常パートに苦心。

仕上がってみれば真ん中の遅鈍さが酷い（ぶっちゃけ要らなくね？いや、前の話を書いてた段階では、はやてサイドは今の半分ぐらいを想定していたんですが、書き始めると切りが良い所に行き着くまで思った以上に長引いてしまっ。

うん・・・そもそも、この段階ではやてを出そうとしたのが失敗でした。

再編する事があつたら、ばっさり削ってしまいそう。

さて、その初出のはやてなのですが。

イメージ的にはA's時よりも少し弱い感じで。

半年の間に彼女だって成長している訳ですよ。

私生活等の詳しい部分はまたその内に（下手するとA's直前かも。今回は飽く迄その導入、はやてに主眼を置いた出会いの場面だけです。

ところで、はやての会話以外の部分を関西弁にしたらとんでもない事になった。

言葉が汚いわ、漢字使えないわで・・・男ならそれでも構わないんだが。

それをはやてに使わせる勇気も無く、結局ほとんど標準に差し替え。やはり文章と音声では印象が全く違う物なのだと（ちゃうもんなんやと・・・締まらねえ）思い知らされた今日此の頃。

脳内で自前変換して下さい！

しかし、一人称に甚だ違和感が。

「家：うち」とごっちゃになって、可笑しく感じるんだろうな。実際どうなのか。関西人でも分からない物は分からない訳で。勿論はやては愛しているが、これだけはどうしても慣れねえ。

始めのシーンでユーノが襲来（黙れ）したのですが、原作のリンデイと違って別段日本で夜を明かした様子も無く、文字通り身一つ（+レイジングハート）で乗り込んで来た感じ・・・しかし、原作は縮んでるから良いとして、ユーノは着替えとか換金出来る物とか、少なくとも野営の用意ぐらいして来いよな。

なのはに拾われなけりや野生児生活・・・まさか魔法使って盗みを働くつもりだったのか？それは流石にインモラルが過ぎるだろう。

時間的には・・・事故発生。輸送部隊が帰還しないため後日調査。後に事故発覚と言った感じを想定。

ミッド―地球は設備ばっちりの個人なら数分、乃至数秒で行き来出来る様子。

戦況に関しては長距離転送 魔力枯渇 戦闘敗北といった流れで。そうでもなければデバイス無し（或いはストレージを持つてゐるのか？）状態でも十分実戦に耐えられるユーノが、隙だらけの戦闘初めてな、果てには運動神経が残念な小学生でも勝てる相手に負けるとは考えにくい。

加えて、原作の種と異なり、ジュエルシールドは物理的な意味で実害有り。地球に来て一週間とか、それどころか見ている限り（死人の出ない奇跡の街とは言え）1、2日でも十分危ない。可能な限り早い方が自然であろう。

あゝ、一層の事、種飛来直後ユーノ襲来にしまえば良かった。まあ、今更どうしようもありませんが。

ちなみに余談ですが。

映画のコミックスでは管理局に許可を取りに行く描写があります。それだけ慎重な対応を取れる余裕があれば、初戦で敗北することも無し。

上述した色々な準備であつたり。一人で赴くのも愚、仲間を引き連れて行くとか。

そついった事にも当然考えが及ぶ筈。

加えて、敗北の原因は魔力の結合不良・・・的な物になっていますが。どうもアニメ版とは少々異なる様子。

まあ、本作には関係無い事です（おい

Side: なのは

「院長先生、ありがとうございました。」

「「ありがとうございました。」」

「いいえ、どう致しまして。」

今、私達が居るのは住宅地の外れにある動物病院。
林の中で“あの子”に出会ってから三十分ぐらい経ったと思う。

269

衰弱していたけれど、幸いそれほど酷い怪我でもなくて。
先生からは二、三日すれば元気になると聞いている。
今日はこのまま預かってもらえると言うことなので。
ご好意に甘えさせてもらって、私達は病院を後にした。

「・・・お嬢様、御用はお済みでしょうか。」

戸を開けて外に出ると、鮫島さんが待っていた。
そう言えば、アリサちゃんも電話で呼んだのだと。
此処まで送ってもらったのを今更のように思い出す。

「急ぎの用はね。それじゃ、塾まで。」

「畏まりました。」

道路の脇に止められた一台の黒いリムジン。

その外観は決して派手と言う訳じゃないんだけど、街中ではそれが何よりも目立っているように感じてしまう・・・それも、今ではすっかり見慣れているんだけど。

ぼうつとそれを眺めていると、アリサちゃんが車の中から声を掛けてきた。

「二人とも、早くしなさいよ。」

「アリサちゃん、今日じゃなくても・・・。」

「予定通りで、いいんじゃない？」

「・・・・・・・・・・。」

私からの提案は却下され、すずかちゃんと顔を見合わせる。そうして一度頷き合ってから開かれたドアの中へ。招かれるままに私達も乗り込んだ

「あのフェレット、首輪みたいなの付けてたし。もしかして、どこかのペットかしら。」

「そうだね、逃げてきちゃったのかな？」

走り出した車の中、話題は自然とあの子の話になる。

何をにおいても取りあえず、緊急の問題が一つ。
今日は良いけれど、明日からどうするのか。

「うーん・・・家は部屋の中まで犬がいるしな。
すずかの家も猫がいるから難しいわよね?」

家は食べ物商売だから、原則としてダメだと思う。

飼い主さんが見つかるまでの間だけなら大丈夫かもしれないけど。
やっぱり、お父さんとお母さんに相談しないことには決められない
訳で

「・・・・・・・・。」

(・・・・・・・・?)

どうしたのだろう、すずかちゃんがさっきから黙ったままだ。
左の方を見てみると、座席にもたれて窓の外を眺めていた。

ガラスに映った顔は無表情で、それに少し怖い印象さえ受ける。
車に乗ってから・・・・・・・・ううん、乗る前からずっと。

「・・・・・・・・すずか?」

「えっ・・・・・・・・な、なに?」

返事が無いことをアリサちゃんもおかしく思ったんだろうか。
声を掛ければ、当然こつちを振り向いたすずかちゃんと目が合う。
それに何となく気まずくなって苦笑いを浮かべていた。

「にやはは・・・・取りあえず、家に帰ったら相談してみるね。」

「おねがい、なのは。」

「あ・・・ごめんね、なのはちゃん。」

さて、差し当たったての結論は無事に出されたんだけど。
アリサちゃんはさっきから、そわそわして落ち着かない様子。
私としても、すずかちゃんの方がどうしても気になってしまう。

「それにしても士郎のやつ、何だったのかしら。
ボディーガードとか言ってたのに一人で帰っちゃうし。」

「うん、その・・・ごめんね。」

「も、もう。あんたが謝ることないじゃない・・・。」

振り返られたのは今日のこと、それもすぐに途切れてしまった。
笑い掛けてくれたすずかちゃんの顔はどこか暗いままで。
そう、どうしてなのかも私は

「あっ・・・。」

気が付けば、また外の方を向いてしまっている。
それにアリサちゃんが小さく溜め息を漏らした。
それっきり、不思議と会話が切り出されることはなかった。

私は一人、ただ目をつぶって。
思い返すのは“あの後”のこと。

しばらくしてから、すずかちゃんも私達のところに着いて。
真っ先に茂みへ飛び込んだ土郎くんの姿だけが欠けていた。

『用事があるから、先に帰るって。』

ただ、それだけの伝言を残して

それからしばらく三人で話し合って、鮫島さんに電話をして。
延々と続いた林道から抜け出して、海鳴の街を見ていると。
彼は本当に帰ってしまったんだと・・・何となくそう思えた。

けれど。

“本当にそれだけ？”

頭の片隅で冷たい自分がそんな疑問を投げ掛ける。
二度見えた“幻”が、どうしようもなく。

ワルい未来を想像させてノイヤな過去を思い出させて

知らないダレカ。血に塗れた赤い腕なんて。
すずかちゃんの沈んだ表情に、そんな物は夢だって割り切れない。

見知ったダレカ・・・家族が傷付くのは何よりもコワイ。

だと言うのに、傍らに誰かがいてくれれば。

この沈黙さえも、いつそ心地好い

はつとして、隣の姿をうかがった。

すずかちゃんは相変わらず窓の方を向いたままで。

この耳に届くのは、風を切る音。エンジンの回る音。

語り掛けてきたのは思い出の中、置き去りにしたダレカ

良くない考えばかりが頭に浮かぶ・・・それに独り身震いした。
だから私も同じように、この風景を眺めていたと思った。

（土郎くん・・・大丈夫、だよな・・・。）

覗いたのは、晴れ間の広がる青空と。

視線の先には夜の帳が敷かれ、仰いだ空は鈍色。

賑やかな街並みに、行き交う人影は数多。

色を無くした世界が“嵐”の到来を告げていた

S i d e o u t

E p i s o d e 0 9 ・ 天に散らす弟切の種 ｝ A d u m b r a

t e ; A s S o w e d : }

光も届かない檻の中、顔の無い隣人は影を映す。

遍く空木の遮蔽を越え、双眼は獣の背を射抜く

屏身びょうしんの刻む九重が一瞬にも、永遠にも感じられた。

刹那に収められた、無窮の銘文がそれを錯覚させる

二重奏から幕が上がり、響く旋律は幽遠の常動曲。

皮切りを同じに大地を蹴り。枝を打ち、足を下ろす。

カラダが軽い・・・そう、全てはあの時と同じ。

踊る黒衣が野生の獣を思わせ、其の背は暴戾ボウレイの凶気を顕に。
肉を斬っては繋ぎ合わせ。其れも尚、此の身の限界は未だ先と

知る。

往き交う事も既に四度。その都度、数キロは有ろう左腕を打ち付けた。

“ナニカ”に当たった確かな手応えと共に、直ぐ様後ろを見遣れば。
狂える獣は動きを止め、先に触れた影の輪郭が僅かに歪む。

しかし、ソイツに怯んだ様子は終ぞ見出せず。

事実、ダメージを与えられてはいないのだろう。

戦いの決着が一向に見えて来ない。

(・・・けど違う。問題は)

気付けば俺は、再び樹を背に足を止めていた／辿り着いたのは唯一の過去キオク

視線の先。見据えた影に、瞼の裏から重なるのは。

禍津日の、杯から零れる六十億。器を染める黒い影。

“ 撃鉄を落とせ。”

「 づつ．．．。」

アタマが割れる．．．治り掛けた熱病をワスレカケぶり返している。ジゴク

蜘蛛の巣が如く、途切れる事の無い情報の波は裡側から神経を灼く。セントウリロン

耳を劈く甲高い金切り“ 声 ” に、外から脳が揺さぶられる。

（ 問題なのは、この頭の方．．．！！ ）

鼓動の様に度々溢れる奔流が俺の意識を塗り潰す。

空の右拳を強く握り締め、一瞬飛び掛けた理性を繋ぎ留めた。

痛みに歯を食い縛りながらも、決して頭を落とす事の無いように。

だがしかし、定石に沿った追撃は無く。

ソイツも同様に足を止め“ 呼吸 ” を整える．．．此方の様子を伺うように。カタチ

剩え、其の赤い切れ端。口に位置するナニカの形を変えて見せた（
気味が悪い）

それがまるで、俺を嘲笑っているかの様にも思えて（吐き気がする）

この動物とは似ても似つかない何か・・・だと言つのに先程から。
コレに似たナニカの残像が、脳裏に浮かんでいる気がしてならない

『 ！ ！ ！ 』

「くっ・・・！」

ダン ガツ ザザツ

少年の右拳が緩むのを待つていたかの様に。

そうして五度^{ふたたび}、二人の黒い影^{ケモノ}が交錯した。

然れど、其の幻像^{イメージ}が影を結ぶだけの時間は持ち得ず。

唯々、虚像の映るう焦点だけが過熱して往く

もしも、少年が夜明けに“夢”を見ていたならば。

映し出された残影と、其の余りの差に愕然としたかも知れない。

緑の光を纏う少年に追われ、路も選ばず林の中を徒々彷徨い回り。

樹に身を打ち付けながら辛々逃げ延びた・・・そんな姿は何処にも
無い。

明確な理性で以って、己に仇なす外敵と相對する。

それどころか、一噛みを与えられるだけの“牙と爪”さえ持たない。
本来ならば取るに足らない矮小な存在をこうして齧る様に追い回す。
それは宛ら狩りを楽しむ森の領主、元より逃げ道など用意されては
おらず。

なれば“弱者”の辿る末路は、支配者に摘み取られるのみ

しかし、彼の前に続く路は。無限に続く、火罪^{ツミ}の果て。
唯一設けられた除刑日さえ、空白に収まるのは一つの幻像^{バツ}。

“撃鉄を落とせ。”

頭蓋の裡、唯々響いていただけの聲が。

今は、確かに“両耳／理性”まで届いている。

呪文の様に、只々唱えられる其の繰言が。

今は、如何しようも無く“神経”を逆撫でする。

基本となる骨子を想定し。

構成された材質を

「・・・うる、さい
」

「
！！」

其の“声”が、一段と近くなつたのを感じた刹那。
左手に、一丁の拳銃が握られているのを視た気がした。

ゴッー！

「
ぎっー！！」

そして。

耳に届いたのは鈍い音。

半身を刃物で刺された様な痛みが襲う。

それに、思わず声が漏れた。

気付けば足が地を離れ、体は宙を舞っている。

一つの瞬きの後、地面を三度転げ回り。

左肩から樹の幹にぶち当たった。

僅かな空白、抜け落ちた記憶は容易に思い至る。

弛緩した左の指に握られた枝は中程で折れ、六度目に追撃が有った事を伺わせる。

無様な事だ、受け切れずに棒切れごと弾き飛ばされたのだろう。

(くそっ……。)

悪態を吐きながら思考を切り替える。

こうして何時までも転がっていても良い標的だ。

両腕を弾条に立ち上がり 其処で異変に気付いた。

(……居ないっ!!)

そう、 “森の領主” は如何なる時も気紛れで。

元より此処は逸楽の狩場、興が冷めれば立ち戻るのみ。

そうして、霞すら残さずに掻き消えた影。

見渡す双眼が再び其の背を捉える事は無く。

未だ闇に隠れているのか、或いは本当に逃げ出したのか。
頭の中で思考は錯綜するが、それも直に頓挫する。
少年は居る筈の無い少女の声を聞いた

S i d e : すすか

“ 余りこの場を離れるな ”

士郎君はそう言ったけれど。結局、私達は林の中に飛び込んでいた。
始めこそ、なのはちゃんも士郎君を追い掛けているのかと思っただけ。
れど。

こうして段々と、二人が進む方向は左と右にずれてきていた。

林と言っても街中に危ない動物なんて居ないとは思う。

それでもこの道に入ってから、なのはちゃんの様子もおかしいし。

最悪、そばに居れば“力”を使って助ける事が出来るかもしれない・

・ ・ ・ だけど。

(ごめんなさいっ！)

それ以上に、何となく悪い予感があったから。
なのはちゃんとアリサちゃんに心の中で謝って。

私は二人から離れて走り始めた

ニンゲン
“フツウの子供”なら、きっと追い掛ける事も出来なかったと思う。
“夜の一族”わたしたちは様々な面で先天的なアドバンテージを持っているから。

それは彼方の足音を聞き分けられる聴力であつたり、闇を見通す暗視であつたり。

“人は潜在能力の半分も発揮できていない”

そんなどこかで聞いたような迷信じゃなくて。それが本当なのかも別の話で。

そもそも根本的に性能が違う。それこそ、病院で調べられると困るぐらいに。

取り分け、私やお姉ちゃんは一族の血が濃いので、肉体的な能力は子供の私でも大人の“ヒト”と同等か、それ以上……だと言うのに。

(つ、速い……!?)

林道を走り抜ける彼の足音が遠くなる。正直、想像以上だった。

考えてみれば何もおかしい話ではない。士郎君は恭也さんと正面から戦えた。

恭也さんはノエルと同じぐらい強いらしい……詳しくは知らないけど。

そうになると当然、彼についても同様の事が言える。

お姉ちゃんを守っているノエルに私が敵うはずも無ければ。

段々と、士郎君との距離は離されてしまっていた。

『

』

「ん……。」

それからしばらく走り続けて、何だか耳鳴りがしてきた。
こうして全力を出すのは久しぶりだったからかもしれない。
幸い、足は何ともなかったので、特に気にもせず走り続ける。
折り良く、彼も足を止めていた　　その時。

ガッ

(・・・えっ!?)

耳に届いたのは、ナニカがぶつかり合う音。
それが死合の始まりだと直感した
いやに湿った空気が頬にまとわり付く。
そこに血の匂いを錯覚した

再び誰かが傷付こうとしている。

今度は誰が？

ついこの間、家族になったばかりの男の子。

誰のせい？

今朝になって、私のボディガードを言い出した彼が。
何のために？

だから。

「・・・士郎君っ!!」

私達を守るために、暗闇へ飛び込んだ少年の名前を叫んでいた。まだ、この声が届くような距離じゃない事は分かっていた。ううん。聞こえたって、きっと彼は戦う事を止めたりしない。

その事を理解^{シッテイル}している。

それがどうしようもなく“コワイ” / “しい”

(・・・っ！)

途端に息が乱れる。

それも疲れからじゃない。

一段と胸の鼓動は早くなっていた。

イヤな自分、本当に。こんな事ばかりを考えてしまう。

それでも、この感情をどうしようもなく愛おしく感じてしまった。ほんの最近まで諦めていた、私には居なかつた特別な“ヒト”。

彼が私のために戦ってくれているのが、何よりも しかったから。

そして。

延々と続く孤独の迷宮を越えて、ようやく辿り着いた出口に待つ背

中。

呼吸を整えながら、そこに一人たたずむ少年の名前を呼び掛けた。

「……っ、は……土郎君。」

「……すずか！大丈夫だったか！？」

こちらを振り向いて、どこか驚いた表情のまま。
気遣う言葉を掛けてくれる彼の方へと歩み寄る。

こうして無事で居てくれたのに、ほっとしたのも束の間。
その立ち姿に、悪い予感が間違いはなかったんだと。
そう、ここに来る前から気付いていた事を再確認した。

「ど、どうしたの、その格好！？」

彼の服は土芥にまみれて、肩や膝が擦り切れてしまっている。
それはさっきの“戦い”が、如何に危険な綱渡りであったのかを物
語り。

こうして平気で立っていてくれたのが、酷く幸運な事のように思え
た。

けれど。

彼は自分の姿を立ち返ろうともしないで。
ただ、この場に居ない二人の事を気に掛ける。
不要な心配を掛けなくなかったのかもしれない。
そこに、私でも分かるほど空っぽの平静を装って。

「・・・なのはとアリサは？」

だから、私は自身を恥じた。

良かったと思つてしまった。

それは、至つて自然な事

^{ダレカ}皆が危険に晒されていると知りながら。

然れど、少女は大罪と断じる

私は彼の顔を見て、^{かぞく}皆が頭から抜け落ちた。

心に渦巻く瘡^{ねづ}がそれに拍車を掛けて

「その・・・あっち、かな。」

「心配だ、行こう。」

一度、静かに目を閉じて、耳を澄ませば。

暗がりの中、コエのする方へと持ち上げた指は。

内心の戸惑いを写したように震えが止まらない。

彼はしばらく逡巡した後、ただ短く言葉を返して。

「あの・・・土郎君、これ。」

そこに落ちてたんだけど。」

「・・・っ!？」

その背中。遠く去り逝く誰かに、追いつがるように声をかけていた。

伸ばした右手に握るのは、彼がさっきまで持っていた筈の黒いサポ

「ター。」

それに一瞬だけ、酷く驚いた様子を見せて。黙って目をつむり、その場で足を止めた。

「・・・ああ、ありがとう。」

「う、うん・・・？」

私から受け取った黒い布を、彼は腕に巻き付ける。

何となく、その言葉の奥に彼の心を覗いた気がした。

徐に抜き身の刀を鞘へと収める

ゆつくりと一呼吸置いてから、私に微笑みかけてくれた。

向けられた瞳の中には今朝と同じ優しい色^{タタカイ}が燈っていた。

鰐鳴^{タタカイ}が告げるのは死合の終わり

そうして、今度こそ。

私達は陽の当たる方へと足を向けた。

S i d e o u t

『すずか、林を出るまでは離れて付いてるから。そうだな、取り敢えず電話で誰か大人を呼べ。』

『うん・・・士郎君は?』

『この格好じゃな・・・済まん、先に帰る。』

小さな主との短い会話を最後に。

夜明けを迎えた林を抜け、俺は独り帰路に着いた。

服に付いた塵を払い落としてから、向かったのは近場のバス停。
歩いた方が人目に付き難いとも考えたが、朝夕のラッシュ時でもない。

そうは変わらないだろうとバスを選んだ 仮に、徒を選んでい
れば。先に発ちながら後に帰ると言う妙な事態になっていた訳だが。

「・・・って、それなら呼びなさいよ。」

「いえ、その・・・今回の件は俺の不始末ですから。」

屋敷に戻り、その一室。

テーブルの対面、何時かと同じ位置取りで座るのは忍さん。
俺は言葉を返しながらも、右手に握ったペンで弧を描く。

「・・・出来ました。」

「ん、見せて。」

卓上に差し出されたメモ用紙を見ながら。
忍さんの顔には引き攣った笑みが浮かぶ。

「ごめん、土郎って案外 「いや、本当にそんな感じなんです。」
「・・・そう？」

そうして、思わず口を突いたであろう続く言葉を遮った。

視線の先では相変わらず、苦笑いを噛み殺した表情が覗いている。

手にした一枚には、一メートルを示す尺と。

その倍程の縦横を取って、縁取りの荒い何やらが描かれていた。

“目”と“口”に相当する部分には輪郭の簡単なそれらが置かれる。

（まあ、分かるけどさ・・・。）

如何にも子供の落書きに思えてならないが。

技法を駆使したところで見映えはそう変わらないだろう。

俺がしているのは他でもない、先の一件の報告だ。

手早く描いたそれは、紛れもなく林で遭遇した黒い影。

口頭では上手く伝えられず、こうして絵を描く事になった

ま

あ、それもきちんと理解して貰えているのかは疑問が残るが。

さて、それも一段落して話題が変わる。

「左腕は大丈夫だったの？」

「そう、ですね。あの時は何とも思わなかったんですけど

」

言われて己の半身を見遣り、その歪を再確認した。

こうして動かそうとすれば、思う通りの軌道を描くが。

二の腕を引く筋も、握った拳の感覚も相変わらず希薄。半ば無意識の内にあの様な戦闘を行えたのだから不思議だ。

「今は・・・殆ど変わり無いですね。」

「そつか・・・。」

それ切り、室内から会話の声が消える。

忍さんは俺の描いた“奇妙な動物”を睨んで唸っているが。対する此方は酷く手持ち無沙汰で、時計など眺めてみる。

カツチカツチと、小さな振り子が等間隔を刻む天には十一時半。このまま黙っていても本当に後半刻も止まってしまいそう。抑々、こうして部屋に残っているのは用件が有ればこそ。

視線を正面に戻し、俺は漸く重たい口を開いた

「その・・・すみませんでした。」

このスーツ、折角用意して貰ったのに。」

変な物を与える家とは考えられない。何にしても只と言う事は無いのだ。

弁償する事も叶わなければ、せめて頭を下げるのが筋であろう。

「ああ、気にしなくて良いのよ、そのつもりで用意したんだし。仕立てたノエルだって、それを謝られても困るでしょ？」

「・・・はあ。」

言われてみれば、手足を伸ばした時に引っ掛かる感じも全く無かった。
激しい運動を想定していない、市販のスーツでは如何なるか分からない。

そうした意味合いも含めて“そのつもり”と言っているのだろう。

しかし、まさかノエルさんが仕立ててくれたとは思わなかった。
確かに、あの人ならば頭を下げられても良い顔はしないだろうが。
折角の好意なのだ、後できちんと謝っておこう などと考えていると。

「もう一着は仕上がってるから、替えが出来るまで無茶は控えてね？」

「・・・・・・はあ。」

続け様に語られた言葉への返答に窮する。
準備が良いと言うか、気になる点その一。

（・・・・何故に黒服？）

思えば、すずかは俺がスーツで居る理由をボディガードに結び付けていた。

それを尋ねたアリサ達にしても、返答として一応は納得出来るらしい。

“ボディガード＝黒服”とする一つの構図は如何も国民共通のようだ。
ステレオタイプ

今朝は取り分け何を思うでもなく、用意されたこの黒服に腕を通したが、警護に付くから私服ではいけない等と極めた法も無い訳で・・・。

そんな如何でも良い事に思考を沈めていると、今度は忍さんの方から引き上げられた。

「ねえ士郎、気を使う必要なんて無いわよ。」

$$\begin{matrix} \lrcorner \\ \text{え} \\ \llcorner \end{matrix}$$

思いも寄らない切り返しに、俺は思わず言葉を失った。
 全ては本心から出た物だ、間違つてもお為ごかしなどではない。
 ならば当然、それにも意味が有つたのだらう　だが。

(
・
・
・
あ
あ。
)

此の胸の内、確かに感じられるのは、俺が本当は何を必要としているのか。

結局、確かめられていない二枚合わせの。

そう、だから。これは謂わば一つの賭けだ。

「……はい、すいません。」

静かに瞼を落とし、最後にもう一度だけ反芻した。

三日前から先刻に至るまで、幾度と無く頭を過ぎつた一つの考えは、この家の中、平和に暮らす“家族”を思えば、今のまま胸の内に仕舞つて置くべき物なのかも知れない。

$$\begin{pmatrix} \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \end{pmatrix}$$

この左腕ツルギではなく、あの双剣こそが“諸刃の剣”ではないか。

思い至る黒と白が、脳裏ユメデミルを掠める時は何時だって刀身を血に染め

て。

もしもの時、辛々繋ぎ止めた“黒い衝動”を再び抑え込めるのか。
今、此の時です。少女達が朱に沈む姿が瞬く裏に浮かび上^{イル}がる。

それでも。

「・・・俺が持ってた剣なんですが。」

俺は可能性を選び取った。

勿論、其処に迷いは有った。

けれど、それも全て呑み込んで。

再び開かれた世界、映すのは守るべき人。

そして同時に、彼女が俺に宣託^{セントラク}を示す。

ただ、この人の目を見てみると“それ”は間違いだと・・・何となく、そう思えた。

少年を見詰める青に湛えたのは“姉”、或いは“母”だったか

「置いてあるけど・・・どうかした？」

「あの剣が、必要なんだと思います。」

今のままアレに出会ったら・・・俺はさすが達を守れない！」

自然と語気が、握る拳が強まっていた。

視線の先、テーブルに置かれた一枚の紙切れに踊る奇妙な落書き^{...}。

“ソレ”と相對したからこそ、馬鹿にした様な姿にも恐怖を見出せる。

だから、求めたのは一對の力。

陰と陽。浮かぶ幻像はこの左腕に何よりも好く馴染にあづむ。目を覚ました時には既に手元に無かった黒と白の双剣。高町恭也、必要なら出して貰えと彼は言った。

「・・・・・・・・。」

答えの返らない問い掛け。

通常は剣一本で如何なる訳でもないだろうが。

此の身に限って言えば、何が契機と為るかも知れない。

それは俺だって分かっている。

いや、“何か”が変わる事を確信すればこそ。

こうして無理を承知で頼んだのだ。

再び、俺達の間から会話が無くなった

S i d e : 忍

『彼が必要だと言ったなら、例の双剣を返してやってくれないか?』

思い返していたのは、恭也から貰った一本の報せ。

是非も無い、元々あの子の物・・・それもちよつと違うか。
価値の有る物であろうと、本人が望まない物を無理に持たせる事は無い。

元の持ち主は少年を大火事から救い出したその人だ。確認すべき相手が生きているのか、抑々存在するのかも分からなければ、結局は本人次第と言った所だろう。

『その時が来たら、もう一度家に呼んで欲しい。』

士郎が高町家を訪れた、その晩の事。

それが意味するのは戦いの再開。

何時になるか分からない、と冗談めかす私に。

彼は珍しく言葉を詰まらせながら、続けてそれを告げた。

“その時”は思っている以上に早く来るのかも知れないと。

望んだのは何でもない未来、あの日の心残り。

結局、有耶無耶になつてしまつた少年との決着。

それが言葉に影を落とすのは、或る人の抱いた予感。

高町士郎、少年と同じ名前を持つ彼の父親・・・あの人と話したのだと。

帰ってから士郎の様子が何処と無く奇怪しかったけれど、その理由を知った。

そして、電話越しに伝えられた未来はこうして現実と為った。

（全く・・・あの人には敵わないわね。）

「・・・忍さん。」

「んっ!？」

そんな風に思い耽っていると、正面から彼に呼び掛けられた。不意を突かれて、思わず情けない声を返してしまう。

「ごめんなさい、考え込んでたわね。」

「いえ・・・。」

遅れて取り繕っても部屋の空気は何となく緩んだままで。けれど丁度良い、私は暗い“未来”にするつもりなど無いのだ。それも取り敢えず、締まった顔を装って言葉を続ける。

「そうね・・・今すぐ使う訳じゃないでしょ、後で用意するわ。」

此方へ一度、頷き返して席を立とうとする彼を。

引かれたままの椅子、向けられた背中を引き留めた。

「ねえ士郎、お昼までは暇かしら？」

「そうですね・・・すずかから何も無ければ。」

「そう、なら丁度良かった。」

あの子からはアリサちゃんの所の鮫島さんに送って貰うとのメールが有った。

この子が自分から“余暇”に相当する予定を入れるなどとは思ってもない。

詰まりはこう返すであろう事が容易に想像出来る訳で・・・全く、我が事ながら白々しい限りだ。

「あなた、随分と汚れた格好よね？」

「まあ・・・そのまま、お昼つてのは不衛生よね？」・・・
はあ。」

間髪入れず畳み込まれ、返答に窮する彼を尻目に。

私が外へ声を向けると、ノエルとファリンが入って来る。

ドアの前で待っていたのではないかと思わせる僅かな合間の事だ。

「ノエル、ちょっと物置に入るから付き合って。

ファリンは昼食までに土郎をお風呂に入れて頂戴。」

「畏まりました。」

「了解です。」

「・・・・・・・・・・・・・・は？」

口早に出される指示に、一人だけ間の抜けた声を漏らしている。

手の掛かるこの小さな“少年”おとこに、私あねからの小さなイジワル。

何時かの焼き直し・・・立場が逆なら私だって頭を抱えただろう。

事実、彼は額に手を当てて、一つ溜息と共に呟いた。

「
　　なんです。」

さて、私の考えは何も直感や印象ばかりに頼った物ではないのだ。

彼には申し訳ないけれど、その行動は半ば“監視”に近い形を取らせて貰っている。

信じていない訳ではない。寧ろ確信している、彼は決して裏切らないヒトだと。

だからと言って、安全策に手を拱くつもりも無かった。“彼”がどうであれ、外的要因に其れが揺らぐ事だって考えられる 勿論、彼の“影”も含めて。

蒔いた種は刈らねばならない・・・良くも、悪くも。この件は私の蒔いた種、周囲の反対を押し切って。ならば、もしもの時には私が刈り取らなければならないから。

すずかはこの事を知らない。ファリンもアウトだ、あの子達は優し過ぎる。こう言った事には嫌な顔をするだろうし、それで万一彼に知られてしまつては元も子もない。

この新しい関係を円滑に進める為に、曝すところは晒す。“秘す^{かく}べきところ”は徹底して隠さなければならない。そう、それがお互いの為でもある。

そうして今日に至るまで監視を続けた結果だ、彼が一人で居る時の行動は三つ。

朝の散歩に始まり、衣食住と言った必要事項、そして夜遅くまで眠りもせず物思いに耽っている・・・と言うか、ぼうつとしている。確かに、それを必然とする原因も幾らかは思い当たる。

根本的に時間が無かつた事、此処も未だ彼にとつては他人の家に過

ぎない事。

更には、真実親しい友人、家族。そんな存在が欠けている事などが挙げられよう。

これは私見だが、今の彼の姿は本来の在り方ではないように思う。概して手持ち無沙汰な様相を呈し、恐らく全ては一つの日課ルーチンの延長なのだ。

“亡くした記憶／欠かくした記録”は臆気ながらも彼を動かしている。日常の言動、取り分け有事の立ち振る舞いからそれは明らかだった。詰まり、今の彼には自身の予定を組む為のカード自体が抑々不足している。

勿論“左手”にはまだ山札が残っている。ただ、それは違うように思えた。

謂わば、“過去しっばい”を白で隠したキャンバス。左腕の主、獄中の救い手がどんな人物だったのかは分からない。けれど、下に在った“未来りそく”と同じ物を描く必要など無い筈だ。

それも、今から私がしようとしているのはその絵の具を剥がす様なもの。

何を“描きたい”のか、それさえ分からない彼は追々何とかしていくつもりだった。

けれど、苦渋の末に。彼は自ら迷惑めいわくになる事を選んだのだ。

確かに、それもすずか達を守る為と言う条件付きではあったけれど。戦いがあつた事を伺わせる少年の姿、紙に描かれた奇妙な動物。

彼にとって、今回の一件は想像以上に深刻なのかも知れない・・・それでも。

一歩前進だと、あの子達の近くに置いたのは間違いではなかったと確信した

カチッ カチッ

すずかも家に帰り、陽は西に傾き出す。

不安を抱いた儘での昼餐は瞬く内に過ぎ去った。

そうして再び戻った部屋の中、重苦しい沈黙が染み渡る。

「・・・士郎、どうかしたの？」

無言の儘、だらりと両腕を下げた少年。

両の掌に握られるのは黒と白、陰陽を示す鋼の剣。

テーブルの前で目を瞑り、唯々佇む彼に声を掛けた。

「・・・・・・・・。」

返事は無い。

早まったか、と頭の中で早鐘が鳴り響く。

思わず腰を落として後ろのドアを確認した。

再び視線を前に戻せば、その右端には見慣れた白い服。

万一に備えて、こうして付いていたノエルの肩が映る。

その立ち姿。別段“武器”を出した訳ではない。

けれど、この子が前に出たのは臨戦態勢を意味する。

抑々“人”並みの相手であれば、両腕が“凶器”となるのだ。

それに冷静さを取り戻して。もう一度、彼の背中に声を掛ける。

「 士郎、大丈夫なら返事をしなさい！」

「・・・あ、はい。どうかしましたか。」

言いながら、少年は此方を振り返る。

ノエルと二人、彼の気の無い返事に頭を抱えた。

まあ、この心配が杞憂に終わったのは良い事なのだけれど・・・。

「それで、どうなの？」

「何と言つか・・・重い、ですね。」

一キ口超を柄で持てば、そこそこ重たく感じるでしょうよ。

肩を竦めて、盛大に溜息を吐きながら壁際へと歩み寄る。

それも士郎は疑問を顔に浮かべ、目をしばつかせていた。

「はあ。まあ、いいわ。」

持ち運びにはこれを使って。」

其処に立て掛けていたのは一メートル近くある、黒くて長い鞆。

持ち上げてテーブルに置くと、ゴトリと見た目に反した重い音を立てる。

その正体、ファスナーの下からは重厚な造りの“鉄の箱”が顔を出した。

「えっと・・・これは？」

「ご想像にお任せするわ。目を離す時は、ちゃんと鍵を掛けてね。」

流石に普通の鞆を使わせる訳にはいかない。大き目のアタッシューケースなら、何とか入らない事もないけれど、それはそれで“如何にも”過ぎる。

手元に在るのは先刻、倉庫から引つ張り出して来た逸品・・・勿論、特注品。

満面の笑みで鍵を渡すけれど、土郎の表情は何となく引き攣っていた。

（まあ・・・無理もないか。）

ガラガラしたポリエステル製の概観は一見すると野球のバットケースを思わせた。

けれど、それにピッタリ嵌められた匣が“カモフラージュ”に過ぎない事を物語る。

蓋を開けてみれば、其処には空洞が広がる　　今は彼の双剣に合わせた敷居が設けられているけれど。

因みに、本来の使い道はライフルケース。

たとえばらせる物であっても、バレル長以上は確保しなければならぬ。

従って、24インチを超える様な大きな物になると洒落が効かないのだ。

通常は軽量の素材を使うけれど、想定した使用者を思えば何の支障も無いだろう。

それも、元は十キロを超える厚い底板が入っていたのだ、要するに盾の代わり。

故に、ケースだけでも三キロ弱。それに関しては頂けないけれど・・・まあ、刃物や拳銃相手なら使いようも十分在ろう。

やがて、話題は後の事に替わる。

「あ、そうだ。忘れない内に言っとくけど。
週末に一度、恭也の所に顔を出してあげてね。」

「はい。あの家で良いんですか？」

「ええ、庭に道場が在ったでしょ。」

私からの問い掛けに、土郎は思い返しながら一度頷いた。

高町家には何度か邪魔しているけれど、実の所、道場に踏み入った事は無い。

謂わば神聖な修行の間、こうも怠惰な私が居るのは何となく不釣り合いだろう。

それも、この子にはよく似合う。剣の道に傾倒するのだって素敵な事だ。

反面、恭也のような修行家フリークになって欲しくないと思ってしまうのは、やはり認識が甘いのだろうか。

「まあ、あなたにとってもプラスでしょ。」

その剣を“重い”と感じる内はね。」

「・・・はあ。」

言いながら、彼の右手から白の一振りを取る。
改めて持ってみれば、其れは確かに重たかった。

そう、この双剣を難無く振るった姿が、私の中に在る“彼の影”。

暗く沈んだ思考を振り払って、二刀を檻の中に収めた。
ボタン、と音を立てて手を掛けた鉄の格子が落ちる。

「・・・それじゃ、宜しくね。」

それも、胸に渦巻く想いが消える事は無く。

望んだ結果、杞憂に終わった末路。その思いさえも掻き消して尚
暗く。

短く言葉を残して、私は部屋を後にしようと。

背を向けたのは。隠したままの秘密、目を瞑ると決めた過ち。

けれど。

「・・・忍さん、すいませんでした。」

私は彼の言葉に足を止めた。三度目の陳謝。
昼時の、ノエルに向けた物とは異質の感情。

剥き出しの“怒り”と、“憎しみ”。

けれど、その矛先が抉るのは彼自身の心。

だから、彼が“誰”に対して、“何”の為に。
こうして頭を下げているのかは容易に思い至った。

「　　いいのよ、結果的に皆も無事だったんだし。」

「・・・・・・・・」

少女達を危険に晒した、警護^{かれ}が付いていながら。

そう、それは確かに事実だ。故に、彼は素直に頷こうとしない。けれど、それは飽く迄一面の物。私だって危険は予知^{しりあて}していた。

だと言うのに、此の背中に言葉は返って来ない。

（はあ・・・過ぎた事とやかく言つつもりは無いんだけどな・・・）

仮に、遭遇したのが獣ではなく、ニンゲンだったら。

あの子達の誰かが凶弾に倒れる様な事があつたとしたら。

それでも。やはり、彼はこうして自身の無力を呪うのだろうか。

彼の心の奥には、一つの罪^{かこ}が収められている。

其れは良い。ただ、これから重ねて往く過^{みらい}ちは。

それさえも、この子は全て胸に刻んで生きるのだろうか

結局、私は言葉^{コタエ}を待たずに部屋から去った。

何処までも溟^{くら}い“深淵”に、背を向けたままで。

彼が自分を赦せる日。真実安らげる場所を。

それを一緒に探すと決めながらも、私は酷く無力だった。

こうして今、彼の心に渦巻く闇さえ払う術を持ち得ない。

それが如何しようも無く、齒痒^{かゆ}かった

Side out

次元空間、管理外宙域。魔導航行施設“時の庭園”内部。

「無茶を言わないでくれ、管理局に齒向かう様な事は……。」

「

出来る、出来ない。はつきりして頂戴。」

モニターの明かりだけが照らす仄暗い一室の中、響く声は二つ。

一つは男性。画面の先に主賓が座つたのは数分前の事だ。

老年を迎えたインテリと言った風貌だが、酷く困惑した様子で。

返したのは女性。他でもない彼女こそが此の城塞の主。

苛立ちも露わに、世辞など知らんと許りに急ぎ立てる。

落とされた灯りの中、彼女の細い輪郭だけが浮き彫りになっていた。

「……今の貴方なら、そう難しい事じゃないでしょう。」

女からの要求は三つ。

一つは、管理局の或る部署。その本の数人への根回し。

管理外世界の観測班、彼らに“何時も通り”の仕事をする様にと。

二つ目に資金。それも、経済的な援助が必要だと言う訳ではない。

ただ、少々都合するのが厄介だった。管理外世界に在る星、青に浮かぶ島国の通貨。

そして最後に、その国で暫く滞在する為の住居。とある沿岸部の小都市に

飽く迄、彼自身は一企業の間人だ。

しかし同時に、それを行うに十分な権力を持ち合わせていれば。提示された条件を達せるか、その可否だけを言えば“可”だった。

『・・・分かった、君の言う通りにしよう。』

暫し思案に暮れながら。結局は男が折れた、それも仕方ない事。通信が繋がってから、会話のペースは完全に女の物・・・否、繋がる前から。

彼女が思い立ったその時から、こうなる事は決まっていた様な物だろう。

『暫く時間を貰うが』

「一週間で用意して、私には時間が無いの。」

『・・・・・・・・』

局の方は何も造反させる訳ではない、同じ部署内で異動させれば事足りよう。

その程度ならば適当な理由でも通る。後釜には息の掛かった者を置けば良い。

管理外世界にしても、“調査”の名目で幾らか管理局の手が入って

いる。

現地の金や、一時的な物であれば住居を確保する事も容易いだろう。

しかし、無理をすればそれだけ足跡を残す危険が増す。

それも、この女は十分な猶予を与えてくれそうに無い。

だからこそ、問題としたのは彼女の動機だったが

今日の切っ掛けとなつたのは何でも無い資料の一項。

彼女が今も尚、研究を続ける“遺失技術”関連の案件に対する考察。

其処に男の名前と“肩書き”が載つたのだ。

その時こそ、彼女は別段気にも留めなかったが。

今、手詰まりとなつて其れを思い至る。

調べれば会社の場所ぐらいは直に分かつただろうが。

女は其処へ会いに行くだけの手間を惜しんだ。

手元には繋がるのかさえ定かではない通信コード。

現実として、こうしてモニターは映し出された。

脅迫、教唆。此の場だけを見れば、罰せられるべきは女の方だ。

しかし、公式の場・・・つまり、裁判になつて困るのは彼自身。

なれば、彼女が管理局に捕まらないよう手を尽くさねばならない。

或いは口を封じて終えば早かつたのかも知れないが。

協力者、乃至“真実”を知る者が何人居るのかも分からない。

“過去”を隠す為に、更に大きな罪を重ねてしまつては意味が無い。

同様に、要求が比較的容易な物であつた事も重ねて災いした。

実の所、男の逡巡は全てが徒労だった。

彼女にしてみれば報復など何の意味も成さない。謂わば時間の無駄。詰まりは、このまま回線を閉じてしまえば良かったのだ。

とは言え、男にその確信が無ければ要求を呑むしか道は無く。

女にしても、敷いた網は随分と目の粗い物だった。が・・・それも“確信”が大き過ぎる故に生じた手抜きだったのかも知れない。

そう、男の不運は状況の全てが女に味方した事。

始まりが偶然であれ、こうなっては最早必然と言えよう。

それも男の蒔いた種であれば、因果応報とでも評するべきか。

抑々この二人。嘗て、同じプロジェクトに当たった“主任”と、その“補佐官”。

男と女の關係に在った事実も無ければ、本当に単なる元同僚だった。いや、その点を別にすれば“単なる”などとは決して思えない相手であろうが。

女の方は恨みこそ有れ、負い目など無い。

対する男は、彼女に口を噤んでいて貰わなければ、今の地位を追われる事にさえなり兼ねない。

元より、繋がっているのは当時の仕事に利用していた回線。

男がそれをこうしてプライベート用に残していたのは。

偏に“疚しい所”が有ったからではないか

永い時を経て互いに六十を迎えようと言う高齢だったが、当時の面影も十分に。

そればかりか、彼にとっても真実“忘れ難い”古傷きずであれば。

女の名をモニターに映しただけで、男の意識は彼方の昔日に飛ばさ

れた。

昔の話だ、事の発端は今から大よそ26年前。

彼女、プレシア・テストロッサはミッドチルダのとある企業に勤めていた。

男も顔負けの極めて優秀な技術者であり、結婚後には一児を授かった。

結局、夫とは離婚する事となったが、親子二人の生活にも概ね満足していた。

そんな日々に翳りを落としたのは一つのプロジェクト。

彼女は或る新型の魔力駆動炉、“ヒュードラ”の開発計画を引き継いだ。

その後、一口に何があったとは語れないが、結果だけ見れば計画は失敗した。

それも、未曾有の大災害。区画一つを呑み込む程の重大事故を伴っての幕引きとなった・・・幸か不幸か、現場は辺境であり、人的被害は“ほぼ”出なかったが。

“主任”と言う立場上、責任の一端は彼女にも有ったのだろう。

しかし、実際に現場を牛耳っていたのが一人の男であれば。

抑々、彼女は失敗を予期していたし、注進も繰り返し行っていた。

だと言うのに、組織は彼女を守ろうとはしなかった。

剩え事実を揉み消し、記録上の主任を唯一の悪とした。おんな

“安全管理を一任されてはいたが、其処には実が伴わなかった。”
たった一人、糾弾の叫びが届く筈も無く、事態は“男”達の思い通りに進んで往く。

そうして幾許の“賠償金”と引き換えに、押されたのは罪の烙印。要するに蜥蜴の尻尾切りだ。残酷な出来レース、その光景は宛ら魔女裁判だった。

やがて、男はそんな事件さえも己の糧とし、大企業の幹部にまで昇り詰める。

対する彼女は地方へ異動となり、僅かの後に表の世界から姿を消した。

そう、失った“モノ”は如何しようも無く取り返しの付かない。事故の報告書、その被害者の欄にはたった一行だけが。彼女の一人娘、アリシア・テストロッサの名が記されていた

『重ねて聞くが、本当に私を陥れる様な事では

』

モニターに映し出されるのは、本来顔も見たくないであろう男。或る意味で、彼女から全てを奪ったとも言える相手だった。だと言うのに。今になって、こうして連絡を取って来たのは何故か

「あはっ、あははははは！！」

『・・・！？』

それに突如、女は狂った様に笑い始める。

男は思わず絶句した。仮にも、昔の聡明さを知ればこそ。そうして呼吸を乱しながらも、続け様に胸中が暴かれる。

「・・・そんな事をして、何の意味が有るの。」

富、名誉。そんな物を取り返して一体何になるのかしら!？」

『では、何故……。』

「私は“全て”を取り戻すの。そう、私の　　っづう!！」

返す言葉を吐き切らない内に、女は激しく咳き込んだ。
いやに詰まる様な音、口を蓋^{おお}った手からは“滴”が零れる。

その時。折り悪く、部屋の呼び鈴が鳴った。

「……とにかく急いで、次の連絡も此方から入れるわ。」

『……善処しよう。』

それを最後にモニターは闇を映し、入れ替わりに部屋の後ろで扉が開く。

其処に立つ小さな影。彼女は差し込んだ一筋に目を眩ませた。

「……っ。」

「母さん!？」

女は思わず後ろに倒れそうになり、デスクに片腕を付く。
その様子に駆け寄ろうとする少女を反対の手で制した。
彼女を確かに“母”と呼んだ、長い金の房を揺らす少女。

「……何でもないわ、それよりフェイト。

あなたに取って来て欲しい物が有るの。」

「・・・はい。」

“フェイト”と呼ばれた少女は部屋の入り口で足を止め、唯一つ頷いた。

九歳か十歳か、その程度。まだまだ両親に甘えていたい年頃であるう。

それが遠慮勝ちに小さく縮こまって。先程から俯いたまま視線さえ合わそうとはしない・・・他ならぬ“母親”の前だというのに。

「やっと探し物が見つかったの、これが“最後”のお願いになるわ。今、準備をしている最中よ。資料には一通り目を通しておいて。戦闘になるかも知れないけれど・・・貴女なら簡単な事でしょう、フェイト？」

「・・・！！・・・はい。」

口早に、酷く一方的に。女は唯々用件だけを告げていく。

それも、先程と変わらない言葉が返された。その途中。

“サイゴ”と言ったのに、少女の表情が一瞬だけ崩れた。

暗い無表情の中、僅かに覗いた感情は“喜び”だったのだろうか。

そして、部屋から会話が無くなる・・・抑々、対話と呼べる物でもなかったが。

母親は“娘”の方を一瞥しただけで、扉に背を向けたまま退室を促す。

口振りは如何であれ、女の拳措には間違い無く“憎しみ”の色が覗いていた。

そう、この親子は明らかに異常だった。

確かに、彼女の出身世界でもあるミッドチルダは就業年齢が若い。子供の一人立ちも自ずと早くなるが、親子の繋がり云々は別の話だ。

少なくとも、自身の遣いで幼い我が子を戦地に放り出すなど、通常は考えられない。

許可が無ければ部屋にも入れず、手で制されれば足を止める

二人の間に漂う空気は、どちらかと言えば“上司と部下”を彷彿させる物だった。

親子らしい遣り取りと言え、少女が“母さん”と呼んでいた事ぐらいか。

しかし、無垢な少女は疑う事さえ未だ知らず。

母の冷たい眼差しさえ“眩しくて目を細めた”ものと勘違いした。そうして結局は、再び言われるが儘に走り回る事となるのだろう。

「・・・ええ、これで最後よ。」

もう少しだけ待っていて、アリシア。」

“アリシア”・・・一人残された暗闇の中、眩かれたのは一人娘の名前。

落とされていた動力の戻った計器が、光と共に再度静かに動き始める。

「あはは・・・あははははっ!!」

それに女は口の端を吊り上げて、狂った様に唯々嗤う。

いや、真実“癪^{くら}つて”いたのかも知れない。

再び映し出されたモニターの、灯った薄明かりに女の影が伸びる。其処に在ったのは、死人の様に痩せこけた青白い頬。口元の“朱”が唯一生の証。

大きく落ち窪んだ眼、その奥にぎらつく光は異様なまでの狂“喜”を帯びて。

その相貌は、正しく“魔女”の其れであつた

第九話、一応フェイトが初出・・・いや、これは流石にノーカウントか？

寧ろプレシア初出・・・まあ、今後は限りなく灰色ですが。

海鳴の方は四月六日も終わりを迎え、幕開けは一段落します。

無論、その裏側でなのはのリリカルになってますが。

加えて、ここから先は士郎君の戦闘もリリカルになりますかね？

隊長陣が半ばチート状態のSSSならまだしも、現段階で士郎君を最強にしてみましたのではナンセンスというもの。

やはり、なのはvsフェイトが無印の軸に在りますから。

士郎君視点は些かサイドストーリー集っぽくなってしまつかもしれませんね。

しかし、すずかが・・・桜？

いえいえ、『愛』に飢えているだけです。

そもそも、すずかはまだ九歳。

父母が傍に居ないまま育つて、普通に反抗期とかは迎えないのでは？

はやてだって平気なように家族の『愛』を求めていた訳で・・・。

家族愛？惚れている？実際、それらは紙一重かとも思ったり。

まあ、この先どうなるかは未定ということで一つ。

ところで、ラストの繋ぎ。

テストロッサ一家はリリなのでも幾分根暗な話。

解説部分、特に回想を大幅に削ったので、少し素っ気無いですかね？

（全く・・・“一口には語れない”って何さ。
後に回そうかと考えているんですが・・・じゃなきゃI n t でし
よ？

まあ、それは良いとして。

フェイトは普通に遠見市（海鳴ではない）に住んでますが・・・あ
りえねえ。

レオ レスならまだしも、普通の（間取り、内装を見る限りかなり
良い）高層マンションって戸籍も仕事も無い外人＋子供がそんな簡
単に潜り込めるものなのか？

加えて、日本円・・・いや、無いだろ¥¥¥

そんなこんなの結果、この話の裏設定的な物が出来上がりました。

研究室に籠もり切りのプレシアにそれらが用意できるはずもありま
せんし。

他の誰かが何とかするしかない。小説版同様、アルフに色々と偽造
させても良かったんですが、何かねえ・・・ぶっちゃけ、激しく似
合わない。

買い物とか貨幣の用意なら、我々が海外でそれをする感覚に近いで
しょうか。

一応、地球上第三（全く遺憾な事だ）の経済大国ですから、日本円
はミッドで用意できたとしても。書類整理（偽造ですが）になると
全く別の話な訳で。

実際、フェイトは国語の成績の方が壊滅ですし。そんなフェイトよ
りもアルフはお頭が緩い感じ。

プレシアの方は視野狭窄とは言え、目的を達する為の手はしっかり
講じています。

加えて、管理局対策。管理外世界とは名ばかりで、彼らの目は其処
にまで及ぶ様子。

実際、そうでなければ其処はアウトロウな犯罪者天国になってしま
います。

魔法だって容赦なく使いまくりな訳で、対策無しでは数日で見つか
っている筈。

総合すると、協力者が居たと考える方が妥当ではないでしょうか（
原作とは別にね

まあ、ぶっちゃけ本編には殆ど関係ありませんが（前にも同じ事を
言ったような？

個人的に、この雰囲気は気に入ってるんですがね。

余談ですが、結局地球の“単位”を使わせてしまった。

いや・・・だって、リリなの架空の単位って“ベクサ”しか知ら
ないし。

それも精々、分、時（hour）が適用限界だし、距離とかも不明
で・・・。

今後も普通の単位を使います。

それと、言い忘れていましたが。

第一章はPT事件解決までを予定しています。

つまり、闇の書事件は第二章と言うことになりますね。

ああ・・・無印すっ飛ばしてA'sとStS書きたい（おい

パチパチ　　パキツ

絶えず揺らめく小さな震^{おと}、気紛れに弾ける大きな響^{おと}。
頭蓋の中まで沸騰する様な酷い熱病に目を覚ました。

また、ユメをミている。

目蓋を開ければ、室^{むろ}の真ん中に唯独りで立っている。
辺りには無数の蠟人形が破棄され、今將に焼尽されようと。
変わったニンギョウだ・・・真つ黒で、面^{かお}の潰された。

いや、その力才を思い出せない。

天井まで染める赤、此処はきつと焼却炉の中だろう。
それも、如何してこんな所に居るのかは思い出せない。
何時か見た筈の朱い世界、いつか嗅いだ気がする死臭^{ニオイ}。
イツ力感じた様な呻き声^{ミミナリ}・・・イツカ、いつか、何時か。
今はもう、何も思い出せない。

ただ、心に焼き付いた火傷の痕を除いて。

直ぐ傍らではニンギョウが亦一体。
紅蓮に包まれ、そのカタチを変える。

テを伸ばす様に、クビを擡げる様に。

ハハ、これじゃまるで だ（キミガワルイ）

だから、気分が悪くなって。徒、此の場から逃げ去ろうと。

そう、スベテ“忘れよう”と。

けど駄目だった。手が、足が。頭さえ前に出せない。

辛うじて動かせた瞳を横に向ければ、其処には黒い

が（ハ

キケガスル）

二重、三重、もっともつと・・・何重にも折り重なって此の身に縋り付く。

だから。ソコはただ、ブキミなセカイ。

その一体、を上げて此方を見ているのは。

“赤い切れ端”を残した最後の一人。

そして、その“ ”が動いた。

“死ね”

「！！！！！！」

思わず、声にも生らない悲鳴を上げた・・・上げようとした。

だから、気付いた。喉が痛い、脚がいたい。

腹が、頭が、ヒダリウデがイタイ・・・甚い、遺体、異体。

そうして足元から溶けていく。

唯、双つの目玉を遺して崩れ落ちて逝く。

ダカラ、キツイタ。コノミハ、ニンギョウ。

先程まで其処に在ると思っていた物も。

その全てが“虚像”^{カガミ}に過ぎないのだと。

“死ねシネしね死死死死死”

（ はは、 ）

知らず、嘲笑が零れた。

だってそうだろう、気付いた所で全てが手遅れ。

けれど、口など疾うに融け去っていれば。

最早、それは形にも生らない。

そう、此処は不気味な世界。

其れを文字通り体現した、正しく地獄。

けれど、其処は空虚な世界。

胸裏の妄覚のみで彩った、真実に虚像。

だから思う。頭が溶けてもこうして考える事が出来るなら。

“今度は手遅れになる前に”気付きたいと（一体ナニに？）

夢から目覚める

中枢を欠いての思考は、抑々前提を見失っていた。
何の道、全て鎔け曝つて。総て忘れ去つてしまう。
唯一残された眼球に映るのは、中天に覗く暗黒の太陽。
何処までも昏い深淵が、静かに此方を見返していた。

Episode 10・ 昼の日中、微睡む凶星 〈Penumbrae〉

Die gro?en Verbrechen in der
Psychologie:
da? alle Unlust, alles Ungl?
ck mit dem Unrecht (der Schuld)
gef?lscht worden ist (man hat
dem Schmerz die Unschuld gen
ommen).
Diese Psychologie ist eine P
sychologie der Verhinderung,
eine Art Vermauerung aus Fur
cht.

心理学に於ける最大の過ち。

全ての不快、全ての不幸が“不正／罪責”に依って贖造される。苦痛から、無垢が奪い去られてしまうこと 即ち。

其れは阻止の心理学であり、恐怖に対する或る種の防壁である

カチッ カチッ カチッ

部屋の中には時計の刻む音だけが響く。

何時もと同じ、決まり切った静かな目醒め。

ただ、今日は頭の中までもが、すっかり空白だった。

誰が何をしていたのか・・・そう言った具体的な内容の一切が抜け落ちて。

この肉体と精神に残された、重たい疲労感が“悪夢”を見ていたのだと告げる。

何にせよ、こうしていても仕方が無い。俺は立ち上がろうと腰を浮かせた。

「・・・・・・っ!？」

刹那に、世界が反転した。

下腹部から込み上げて来る異様な吐き気に、嫌な汗が背中を伝う。

俺は堪らず膝を折り、ベッドの脇に屈み込んだ。

その瞬間、瞼に浮かんだ光景は。

純色^{あか}の世界に垂らされた、黒い一滴。

其れに対して、頭の中で警鐘が鳴り響く。

何時もの“夢”とは明らかに異質な、全く見た事^{……}の無い。
それでいて、どす黒い朱に染まる世界は酷く現実感に満ちて。

折り重なっていたのは、やはりヒトの。
そんなものは見慣れたつもりだった（その顔も思い出せないのに？）
けれど今は、心音が五月蠅い程に感じられる（それは一体“何”の
鼓動？）

「 か、はっ……。」

頭が割れる。胸が裂ける。

全身を貫く千の刃は血潮に溶け、体内を駆け巡る。
鼓動の度に訪れる苦痛が、俺の意識を塗り潰そうと斬り嘖む

“屋敷ノ檻”の外に出た。他人^{はやて}と出逢った、敵に出合った。

戦いの果てに敗北した。そして、此の掌に“剣”を取り戻した。
目醒めがルーチンから逸れた原因は嫌と言う程に思い至る。
いや、その全てが許されない事だったのかも知れない。

それとも、少女が“闘って”いた事に気付いていたのだろ
うか

何にせよ。今、その罰を。

「 つ、はっ……は、あ……。」

胸に、腕に爪を立て、叫んで仕舞いそうになる痛みを噛み殺した。
喚けば誰かが飛んで来ただろう。そうして隣で呼び掛けてくれるダ
レがいたら。

この傷みをぶちまけて終えば、或いは楽になれたのかも知れない
それでも。

此の“深淵”の奥に潜んだ黒い衝動を。

今は眠りにつく“怪物”を、表に出してはならないと。

きっと、其れは俺の手に余る・・・そう確信した。

視線を上げればテーブルの上には黒い鞆が。

今は唯、その鉄の匣に眠らせた一对の快刀。

其は未だ、傍らの鉄格子に瞑^{ねむ}り坐す

そう、それは“力”だ。

これで漸く、俺の戦いが始められる。

そうして再び剣を血に染める？

(・・・くそつ。)

再度、脳裏に浮かんだ幻像は酷く見慣れた物。
気付けば、十度と待たずに早鐘は止んでいた。

だから。

今は忘れようと。

薄暗闇の中、独り言ちた。

“覚悟が出来るまで聖骸布を捲いている”

アイツにそう言われた意味。

未だ“不完全”な此の身にも。

少しだけ、其れが見えた気がした。

「……………寝坊だ。」

今度こそ立ち上がり、振り返った背中。

掛けられた時計は十時半を回ろうとしていた。

S i d e : 忍

「 此方が事件の現場です。」

ご覧下さい、この大きく抉れた壁、倒れた電柱。

昨晚、此処で一体何が起こったのでしょうか。」

時刻はもう直ぐ十一時を迎えるけれど、私はリビングでぼうつとテレビを眺めていた。

画面に映るのは民放のワイドショー。“事故、いたずら、テロ、その真実は！？”とのとんでもないテロップが踊り、隅には遠慮勝ちに“L I V E”と在った。

取り沙汰すべき事件も少ない世の中であれば、撮影されているのは海鳴市。

それも、昨日すずか達が世話になったと言う“榎原動物医院”の標

識が見えているから驚きだ。

今朝も同じ様なニュースがあつて、あの子は林で拾つたフェレットの心配をしていたけれど。ゆっくりしている時間も無かつたので、取り敢えず学校に向かわせた。

そう言う私の講義は午後から。今はする事も無く、この通り暇にしている。

恭也と昼食を予定しているので、そろそろ準備に掛かつてもいいだろうか。

「忍お嬢様、冷めない内にお召し上がり下さい。」

「・・・ん。」

傍らのノエルに言われて、止まっていた手を動かす。

そうして少し温くなった紅茶を口に含みながら適当な返事を。

如何せん猫舌な私としては気にならないのだけれど、熱いのが本来だと言つて聞いて貰えない・・・まあ、それ自体は分からないでもないか。

さて、家の問題児は随分と遅い朝ご飯の最中。^{シロウ}

少し前にノエルから彼の様子を聞いた所だ。

酷く罵されており、起きてからも調子が悪そうだったと。

合わせて、本人が何時も通り振る舞っているので如何すべきか。

或いは彼にも、私達の様に“血に飢える”事が有るのだろうか。勿論、それに限定はしないけれど、本能的な衝動と言う意味でだ。その確証が無ければ、差し当たつて対応を変える必要は無いと伝えなければ。

監視を続けていれば、そう言った部分も何れは明らかになるのだからうか

(・・・ふう。)

それに内心、溜息が零れた。

こんな汚い真似は早々に終わりにしたいものだ。

まあ、させている当の本人が言うのも可笑しな話だけれど。

「あの・・・・・・・・。」

「どうかしましたか、ファリン。」

ふと、耳に届いた声に後ろを振り返る。

おずおずと、奥の戸からファリンが顔を覗かせていた。

手にしているのは薄いすみれ色の包み・・・すずかのお弁当だ。

「はあ・・・・・・・・。」

それに再び、小さく溜息を漏らした。

今朝、ファリンから渡されているのを確かに見たけれど。

此処に在る以上は鞆に入れ忘れて行ったのだろう。

全く、すずかが忘れ物なんて珍しい事もあるものだ。

とは言え、昨日帰ってから様子が奇怪しいし。恐らくその所為であろう。

“監視”については伏せているけれど、それも目の前で起こった事であれば。

あの子なりに思う所が有ったのかも知れない。

まあ、それは追々考えるとして。

取り敢えず、問題はこの場に在る弁当箱。

「私はもう直ぐ出るし、ノエルにも用事を頼んでるから。
ファリンには出来れば留守番してて欲しいんだけど・・・。」

「あゝ、そうですか・・・。」

それにファリンはしゅんとなつてしまった。

聖祥にも食堂が在るとは言え、折角作つた物なのだ。

三人で並んで食べるのに一人だけ定食と言つのも味気無い。
出来れば届けてあげたいのだけれど

「おはようござい、ま・・・す？」

「・・・。」

あれこれと考えている内にもう一人の闖入者が。

話が見えず首を傾げているけれど、代行には持つて来いだ。
入口に佇む姿を見ながら、私達は三人で頷き合っていた。

S i d e o u t

「兎に角だ。その鞆の中を検めない事には通す事も、返す事も出来んな。」

「はあ、そう言われましても……。」

真昼の聖祥大付属小学校、その校門前。

暖かい日差しの中、妙な事態が展開されていた。

俺の前に整然と並ぶ黒服の一団……まあ、対する此方も同様の格好な訳だが。

大の男が寄つて集つて子供に凄んでいるなどと、何とも馬鹿げた話ではあるが。

此方としては危険人物のレッテルを貼られているのだから冗談ではない。

間が悪かったのか、或いは事前に連絡を入れる必要が有ったのか。そう言つた事をきちんと確かめもせずに出発した此の身が恨めしい。

そうこうする間にもじりじりと半円を広げながら、距離を詰められている。

黒いサングラスの下では彼等の視線を追う事も出来ないが。

恐らくは、今にも飛び掛からんばかりに俺を睨んでいるのだろう。

進退維谷まれば、取り敢えずは粘ってみるべきか。

（何だかな……。）

それに小さく溜息を零しながらも。

背中“重り”を一度背負い直して。

右手の“包み”は一層強く握り込んで。

go ,

a b o u t a n h o u r a

「お弁当、ですか。」

「お願い出来るかしら？」

「はい、構いません。」

と言うか、これを受けねば申し訳が立たない。

何となれば、今朝は数少ない仕事を寝過ごしてしまったのだ。

正直、この時間まで放置されるとは思わなかったが・・・いや、他人の所為にするのは良くない。

ノエルさんとファリンさんの振る舞いは、未だ客人に対するそれだ。別段、起こしてくれと頼んだ訳でもなければ当然の帰結。

抑々、寝起きの時間ぐらいは自分で管理出来るべきだろう ま

あ、それは以後気を付けるとして。

「あの・・・学校の“中”が危ないって事は無いですか。」

「まあ一応の警備は居るけど、案外チェックも甘いし。

爆発物だろうが銃火器だろうが、持ち込み放題って言えばそうよね。」

「・・・・・・はあ。」

平然とそんな怖い事を言う。

曰く、聖祥は割かし有名な私立学校なのだそう。

「すぐかやアリサも含めて、社長令嬢なんて子が多いらしい。この時漸く、月村の当主、詰まりすぐ達の父親がさる企業の社長様なのだ」と知った訳だが。

朝夕の送迎には校庭を開放し、それも左ハンドルが当たり前と言う異常振り。

勿論、普通の学生は“何も起こらない”と言う大前提の下で日々過ごしている訳だが。

話を聞いている限り、無いと考えるのも樂觀が過ぎよう。結局は、備え有れば憂い無しと言う事か。

「昨日も行ったんでしょ、何でそんな事聞くの？」

続けて返されたのは至極尤もな質問。

思い過ごしかとも考えたが、その時に浴びた視線の事。合わせて、其処に感じた意図への推察を手短に伝える。

「・・・・あゝ。」

徐に手にしたカップを置きながら、何とも気の無い声を返してくれる。

それに可笑しな顔でもしてしまったか、忍さんは何所か悪戯っぽい仕種で此方の顔を覗き込んで来た。

「なら、それも含めてお願いね。まあ、士郎が居れば・・・・・・。」

「はあ・・・？」

取り分け注意が必要な件でもなかったのか。

いやに含みの有る言い方で、直ぐに顔を逸らされる。

言葉後まで聞き取れず、此方からは曖昧な返事を。

その後が続く様子も無かったのでリビングを後にした。

それから五分程、俺は再び同じ部屋に戻っていた。

着替えを含めても、男の身支度に要する時間など高が知れている。

後は幾許の懐中物と“真新しい鞆”を持てば此方の準備は終わりのだ。

ソファの前、机の上には先程と変わって存外に縦の有る包みが一つ。

それに首を傾げていると、後ろから解答が示された。

「二人分あるから、一緒に済まして来なさい。」

(・・・何と言う早業か。)

些か驚かされながらも、俺は黙って頷き返す。

これと言って今日すべき事が有る訳でもないのだ。

食べてばかりだと自覚はしているが・・・此の際、それは目を瞑ろう。

「帰りは・・・今日は習い事も無いけど、どうする？」

「それなら、迎えも兼ねて行きます。」

会話は淡々と予定調和を辿って行くが、別段気に留める事も無く。
俺は昨日と同様に左腕を吊り、手元の鞆は肩から後ろに回して。
最後に右手で包みを握って、広い廊下を歩き始めた。

「それじゃ、お願いね。」

「はい。」

「「行つてらっしゃいませ。」」

「行つてきます。」

そうして玄関口。

開かれた扉を潜って外へ出た。

背中には、確かな“重み”を感じながら。

S i d e : すすか

「はあ……。」

授業中、小さな溜息が口を吐いてしまった。
見慣れた教室。見慣れた皆の背中、前に立つ先生。

何も変わらない、変わる筈の無い日常の風景を。
それを退屈だと思った事は久しく無かった。

一列前に座っているのは、髪を高く二つに結んだ女の子。
それが出会った頃から変わらない、なのはちゃんのトレードマーク。
窓の方に目を向ければ、アリサちゃんは机に肘を突いてノートに落
書きしていた。

そう、他でもないこの二人のおかげで。

けれど、今は。

まるで昔に戻ったみたい、目に映る風景からは色が抜け落ちてい
た。

正確には三年と少し前、私が屋敷の外の世界に出る直前の事。

段々と物事の分別も付くようになった頃、ようやくそれが告げられ
た。

中世より続く血脈 “夜の一族”。

“月村”の意味、東洋のそれらを纏める三家の一つ。

私が、私達が、ニンゲンではないんだと。

一族の皆に囲まれて育った私は、綺麗な“仮面”しか知らなかった。
その下に有る高慢な“本性”なんて、知る由もなかったから。

はつきり言って、その出自を呪った。伝統、格式、どんな言葉で飾
っても。

人の形をしながら、ヒトの血をすするなんて“バケモノ”だと思っ
たから。

どうせなら、何も知らない内からそれを教え込んでいて欲しかった。
そうすれば、少なくともこんな形で“絶望”する事も無かったと。

けれど現実はどうしようもなく変え難く、何を思おうと全てが手遅れ。

だから、初めは全てどうでも良くなった。

けど、自分からその命を捨てられるだけの勇氣も無くて。

平穩な世界に生きて、いつか訪れる終わりを迎えるまで静かに暮らせればと・・・そう思うようになるまで、それほど時間は掛からなかった。

それからしばらく。父さんと母さんは屋敷を去った。

正統に血筋を継ぐ事を拒否した“姉妹”わたしたちを此処こゝに残して。

ニンゲンただのヒトに混じっての一年は酷く退屈で、遲鈍な物だった。ただ、過ぎて行くだけの毎日。楽しみも、悲しみも無い日常。ただ、目の前を流れるは消えて行く。いい人も、いやな人も皆。

六歳、私は聖祥に入学して。その時、ファリンが家にやって来た。私の専属メイドと言う事で、最初は必要無いからとそれを断った。

『何を仰ろうと、私はすずかお嬢様にお仕えさせていただきます。』

□

そう言うて胸を張るファリンに、結局は私が折れた。

ただし、“お嬢様”と呼ぶのだけは止めてもらって。

そうして、屋敷の中が少しだけ賑やかになった。

そんな事があつた後。学校に通い始めて直ぐ、一人の女の子と喧嘩

した。

私がした、と言うのは少し違うけど、私が原因で一つの騒動が起った。

それは本来、平穏な生活を乱すもの。関わればそれだけ危険が増す。だから全てに無関心を装って来た。

そうすれば、その内に飽きて離れていくから だけど。

私の事を真剣に思ってくれる“ヒト”が居る。

それが嬉しかった。温かく心を揺らしたから。

だから、もう一度この世界を見つめてみようと思えた。

そうして開かれた瞳に映ったのは色彩に満ちた世界。

それが退屈な生活になど、なり得るはずが無かった。

それも今、私の頭に渦巻くのは。

胸に秘した“闇”、私を見るニンゲンの目。

少なからず、そう言った事も在ったとは思っ。

ううん、それはきつといつまでも消えない。

ただ、今思っのは一人の男の子の事。

傷だらけの男の子、私達を守る為に戦ってくれた彼。

何があつたのか。私は何をしてあげられるのか。

昨日だつて、昼食、夕食と顔を合わせたけれど。

それも本当に聞きたかつた事は胸にしまつたままで。

後で、あとで、と先送りにして迎えた今日。

今朝は会えないままに家を出てしまった。

昨日の動物病院のすぐそばで交通事故があつたらしい事。
あのフェレットは無事で、しばらくはなのはちゃんが預かれる事。
名前はユーノと言うらしくて、すっかり元気になったらしい事。
それから、なのはちゃんが学校に連れて来ていた事。

そうやって、時々が出来事に騒いでみても。

この心が揺れる事はなく、全てが私の前を流れ去って往く。
結局、頭を占めるのはある一人の事だけで

キーン　　コーン

「きりーっ、きをつけー、れーい。」

「「「「「ありがとうございます。」「「「「「

（・・・はあ。）

チャイムが授業の終わりを告げる。

いつもと同じ、一節三拍子のプログラム。
お昼休みを迎えて、頭に響く喧騒が遠い。
それに、また小さく溜息を漏らしていた。

「あれ・・・士郎？」

「何やってんの、アイツ。」

「え　　」

そんな中、窓際から届いた聞き慣れた声。

言われて外へ目を向ければ、校門に見間違えようのない赤い髪が。

「・・・っ!!」

「あっ・・・待ちなさいよ、すずか!」

「こーら!月村さん、走っちゃ危ないですよ!」

それを認めた瞬間、私は机の上も出しっ放しで。

後ろの声に振り向きもせず、廊下を駆け出していた。

S i d e o u t

「はあ・・・。」

昼を告げるチャイムが鳴るのを近くに聞きたるも束の間。

本職の方々に敵うべくも無く、俺はさっさと拿捕されていた。

四方を囲む黒服・・・それに思わず嘆息が漏れた。

考えてみれば左腕を吊っており、右手には弁当が有るのだ。

立场上、反撃する事も出来なければ、捌くにしても限度が有ろう。

抑々、勝敗を競っていた訳でもないと言うのに。“撤退する”事を
選択肢から排した時点で、こうなる事は必然だった様に思えるが

「ごめんなさいっ！その子、私のボディガードなんです！！」

「……は？」

遠くから届いたそんな声に、脇の二人が素っ頓狂な声を上げた。鶴の一声とでも言うべきか、途端に態度が一変する。

申し訳程度に此方の服を整え、恭しく差し出されたのはゲストカード。

「どうぞ、お通り下さい。」

「……や、これはどうも。」

其処に“月村士郎”と名前だけ記したのを最後に。

前を囲っていた人垣がさつと二つに分かれ、先を促される。

それに俺も気の抜けた返礼をしていた。

「いや、下まで来てくれて助かった。

何を言っても信じて貰えなくてさ。」

「ごめんね、折角来てくれたのに……なんだか変な事になっちゃって。」

昇降口、取ってくれたスリッパを履きながら。

気にするな、と肩を竦めて見せる。

しかし、すずかは如何も恐縮しているのか力無く俯いた儘で。

声を掛けると、一応は小さく笑みを返してくれた。

遅れて直ぐになのはとアリサも加わり、その足で続けて向かったのは三人の教室。

擦れ違う生徒の悉くが、ちらちらと此方を見てくるので何ともむず痒い。

歩きながら所在無く辺りを見回して、ふと目に留まる物が。

“三年星組”

引き戸の脇に設えられたプレート。

新手の冗談かと、奥を見遣れば“雪組”と在る。

「・・・・・・・・。」

思わず漏れそうになった言葉を呑み下して。

先程三人が入って行った教室の中を覗き込んだ。

その時、丁度戻って来るすずかと目が合った。

「あ、士郎君・・・目の下、怪我してる。」

「・・・・・・・・ん？」

言われて頬の上を拭くと、熱を伴った痛みが奔る。

手の甲に目を遣れば、薄ら赤い筋も擦れていた。

「ああ、さっき引っ搔かれたかな。大丈夫、気にする程じゃない。」

「だめだよ、ちょっと動かないでね。」

(・・・?)

諫める声に仕方無くその場で足を止めると。
すずかは俺の肩を掴んで背伸びする。
何分、顔が近いのだが

「……………」

それに三人、言葉を失った。

当の本人は別段気にした様子も無く。
顔を離すと、ポケットからハンカチを取り出して。
それで目元を拭ってくれるのだが

「…………ああー……っ!!」「…………」

「…………で、うおあっ!?(」

ザザザッ

ゴッ!!(」

「何やってんのよ、すずか!!(」

近くを生徒達が歩いている事を気にも留めずに後ろへ跳び退る。
幸い、誰にぶつかってもなく窓際にぶち当たり 回避していた感
も有るが 視線を正面に戻せば、すずかは目をしばつかせて考え
込んでいた。

それも漸く思い至ったのか、頬が見るみる紅潮していく。

「…………ごめんなさいっ!!」

お姉ちゃんがいつもしてくれるから、つい……………」

「そ、そうか。ん、いや…………ありがとな。
俺の方こそ、変に取り乱して悪かった。」

衆人環視の中、すずかの声は尻窄みに途切れてしまった。

文字通り傷口を舐めると言う・・・確かに、あの人なら面白半分でやりそうだが。

周囲からの無言の圧力に、俺まで何ともぎこちない遣り取りで返してしまう。

しかし、そんな気不味い空気を破って。呆れた様なアリサの声が上がった。

「はいはい、時間も無いからさっさと行くわよ。」

(ぐ・・・。)

「う、うん・・・。」

「・・・・・・。」「・・・・」

一層悪意さえ感じる視線を浴びながら、取り敢えずは体裁を繕って歩き始めた。

もう一度。頬に手を当ててみれば、傷も浅かったのかそれは既に塞がって。

ただ、妙な熱っぽさだけが残っていた。

全く、これでは何方が年上か分かったものではない。

鏡が無ければ見る事も叶わないが、恐らく顔は赤くなっているだろう。

純粹な好意に反応してしまうとは・・・何とまあ、情けない。

動物は本能的に互いの傷を舐めると言う。

人間の場合も同様の効能が得られるかは疑問だが。

まあ、応急処置としてならば選択肢の一つとして有るだろうか。

（ 有る・・・よな？）

納得しようにも、如何も齒切れは悪く。

小さな溜息を漏らしながら肩を竦める。

そしてその儘、三人に続いて階段へと足を向けた。

所変わって屋上、座っているのは四人で使って尚大きい長椅子。

雨曝しではあるものの広い背凭れが設けられ、ベンチと呼ぶのは些か語弊が有ろう。

其処に右からなのは、アリサ、すずかと何時も通りの順番で並んでいる隣に俺も同席させて貰っていた。

広げた弁当のサンドイッチを頬張りながら、視線は反対側に座るのは左肩に。

更に言えば、其処に乗ったフェレット、元い“ユーノ君”に向けられている。

今はなのはから貰った蛸型のウインナーを器用に齧っているが、手乗りインコならぬ“肩乗りフェレット”とは何とも羨の良い事だ。

『昨日の林で見付けた子なんだけど、ユーノくんって言うんだ。』

拾って来た、それも恐らくは他人様のペットであろうソイツ。

早速名前を付けて仕舞うのは頂けないが、寧ろ互いに納得している感さえ有る。

なのは達が名前を呼べば頭を向けるし、俺の挨拶にも頷き返してく

れた。

挙動が「……」と人間染みていいると言うか……この様な小動物でも、育て方次第では意思の疎通、或いは言語レベルでそれが可能と為るものなのか。

まあ、それは良いとして。

「ねえ、士郎。あんたも将来のこととか考えてるの？」

「ん……どうなんだろうな。」

少女達の間では、何とも年“不”相応な会話が繰り広げられていた。俺からしてみれば、この年で定見を持つている方が不自然に思えてならないが。

それも、アリサは親の会社を継ぐらしい。すずかにしても工学系の専門職と、酷く現実感に満ちた目標だ……やはり、家柄の影響だろうか。

なのはが曖昧に濁したのに安心するも束の間、此方に話が振られて返答に窮する。

「あれ、すずかちゃんのボディガードじゃないの？」

「いや、確かに今はそうなんだけどさ。

今後の事は……まあ、働ける歳になってから考えるさ。」

キーン コーン

「やばっ、戻んなきゃ。」

年下の少女に程近い、寧ろ及ばない自身の展望が情け無くはあるが、如何にも場当たりな言葉で返したのを最後に、敷地内を幾つもの鐘の音が木霊する。

それを聞きながら、空になった弁当箱を片付けているすずかへ後の予定を告げておく。

「すずか、終わる頃には下に居る。」

「うん、ありがとう。」

足早ながらも、濃緑色のドアから律義に此方へ手を振る姿を見送って。

誰も盗りはしないと思うが、後ろに立て掛けてあつた鞆は手元に置いて。

独り残された校舎の上、膝から下を降ろした状態で椅子に横になった。

今日はいやに体が重い、行き掛けでは休める程の時間も無かったのだ。

食事が喉を通らない程ではないが、体調管理も仕事の内だろう。

それから暫く。一、二、三、と掛け声が耳に届く。

食事前の体育と言うのも何だが、今はいままで辛かるう。

そんな取るに足らない事を考えながら、小さく体の位置を整える。春天に仰いだ雲の陰、その晴れ間に覗くのは

「つ……。」

そうして、此の身を照らし出す陽光に目を眩ませた。

天日を遮る様に翳した右掌、指の隙。包んだのは金環食。
顔を逸らしても、視界には茫然と“黒檀の太陽”が浮かんだ儘で

(・・・・・・あれ?)

其処に在ったのは幽かな既視感。

何時、何処で。本当は何だったのかも分からない。

ただ、何と無く“其れ”を見た覚えが有る気がした。

それが逆に不安を焚き付けて

思い出そうにも“記憶”していない。

瞼の裏で、陽炎に揺れる其の残像が。

ただ、何時まで経っても消える事は無く。

其れだけが虚空と碧天に重なって

(・・・・・・疲れてる、のか?)

そうして俺は静かに意識を手放した。

陽射しの下、喧騒を遠くに感じながら。

結局、その答えを出せない儘に。

其処へ踏み入る事も、引き返す事も出来ず。

唯、其の“深淵”を覗き込んだ儘で

on weekend after

noon,

「「「・・・」」」

週末、高町家の庭の一角。此处に来て二時間程が経っただろうか。始めこそ俺と美由希さんで仕合を行っていたが、最早体力も続かず。俺は早々に舞台脇に退場していた。

道場を支配する空気は、弦の緊張にも似た風に醸して。それに、見ている此方の心まで高揚して行く

「はああああっ!!」

ダンッ ガガガ

「・・・ふんっ!」

ガガガガッ!!

そうして再び幕を開けた演武。

其れは一等美しく、然るから目を奪われた。

思えば、少なからず良い気になっていたかも知れない。加減されてはいるながらも、辛うじて付いて行けた事で

眼前で惜しみ無く放たれる三連、四連。

道場に響く、宛ら鉄を打ち付け合う様な鋭い音。二人の間に舞い散る剣花を、腰に差した黒鞘を。握った木刀は白銀の小太刀に“錯覚”した。

信じられない様な速度で繰り出される左右の双刀。

其れに掛かる手を合わせ、向かう腕を振るいつつ。時に流し、逸らし。

僅かな動きで全てを確実に捌きながらも、攻めの手を緩める事は無い。

恰も互いが前進しているかの様にさえ感じさせる気魄を纏い。

重圧と重量。其の双方を伴った斬撃に、厚い刀身が打ち震えて。

そればかりか、二人を包んだ緊迫は大気をも鳴動させ、此の肌を刺す。

だから分かった、その認識が抑々間違い。

彼等が此の身には遙か遠い存在なのだと知った。

(・・・スピードも、パワーも違い過ぎるっ!!)

意気沮喪の儘に己の未熟を恥じた。抑々、何のつもりで此処へ来たのだと。

確かに、先天的な素質は如何ともし難いが、それ以前に体力や筋力。全ての前提となる部分に、一朝一夕では決して埋められない溝があった。

小手先の技術とは後に付く物。互いの基礎能力が拮抗して・・・とまでは言わないが、近い領域に在るからこそ問われる部分なのだ。格下が一矢報いる為の物でもなければ、それ単体を身に付けて如何

にかなる訳も無く。

竹槍一本で空を舞う戦闘機は落とせないし、ペーパーナイフで鉄板を裂く事も出来ない。

揃えてみれば酷く虚しいが、今の俺ではそれ程までに絶望的な差が有る様に思えた。

「よし、昼の鍛錬は此れ迄。
クールダウンに入れ。」

「・・・っ、・・・はー。」

ありがとうございます。」

そうして、何れ程の時を刻んだか。

知らず魅入っていた剣舞が終わりを迎え、漸く我に返った。

恭也さんは俺の傍に在った木刀も纏めて抱えると奥へ下がって行く。
美由希さんは手足のストレッチをしながら、ゆっくりと此方へ歩いて来た。

「お疲れ様でした、凄かったです。」

何と声を掛けるべきか迷ったが、結局そんな取るに足らない・・・。
しかし同時に、偽らざる感想が口を衝いた。

美由希さんは隣に腰を下ろし、体を前に倒した儘で言葉を返す。

「あはは・・・ありがとう。けど、他人に見られるのはちょっと恥ずかしいかな。」

恭ちゃんや父さんに比べたら、私なんてまだまだ未熟だし。」

「いえ、そんな事は・・・。」

否定する声も笑って流されてしまう。

再び持ち上げた顔に覗いたのは、純粹に憧憬や矜持だったろう。

その頬を幾筋もの汗が伝うが、確かに先程見送った恭也さんは額に滲む程度だった。

未だ全力ではなかったのか・・・全く、あの人は底が知れない。

世界のアスリートだって吃驚の“超人”振りだ。いや、それを自覚すればこそ、表に出ようとは思わないのだろうか。

それから、僅か二分程。

あれだけ激しい応酬に対し、美由希さんのクールダウンはそれで終わりなのか。

汗を拭きながら外していた眼鏡を取り、完全に雑談の体勢に入っている。

「そうだ、今度家に来る時は士郎君が使ったって言う剣を持って来てよ。」

話題に上ったのは件の双刀。以前も興味を見せていた事が思い当たった。

言うまでも無く、日本で真剣を目にする機会は少ない。

何事も珍さは即ち価値と生る訳だが、此处はその数少ない“例外”だ。

尚も見たいと言うのは偏に熱心なのか、或いは収集家コレクターと括られる類の人種なのか。

流石に譲る訳には行かない。後者の場合、少々に厄介だが。

まあ、見せるだけなら無下に断る程の事でもないだろう。

「はい、構いませんが 「おい、美由希。」・・・（うお!?!）

何時の間にやら、直ぐ傍に立っていた恭也さん。

不意に驚かされながらも、美由希さんは見ていたのか戯けて返す。

「あははゝ。なに、恭ちゃん。」

「余り妙な趣味に他人を巻き込むなど言っているだろう。」

士郎君も、無理に付き合う必要は無いんだぞ。」

「はあ・・・。」

やはり其方だったか。思わず気の無い声が漏れる。
何方にせよ、今は手元に無いので後々考える事だが。
思ふ傍で、恭也さんも俺の隣に腰を下ろしていた

S i d e : 恭也

「士郎君、何ならまた来ると良い。
思ふに、君は未だまだ強くなれる。」

隣に座る少年に、そんな言葉を投げ掛けた。

美由希の前で、右手を正面に構えていた少年。

その太刀筋は極めて平凡、それこそ“別人”かと思わせる様な不調法さだった。

（・・・いや、事実別人なのか。）

確かに、あの日の“彼”が見せた技芸にしても、その全てが平凡と言えた。

俺達のように人間の域を超えた速度での連撃であつたり、不可解な軌道を描いたり、其処に“斬る”以外の効果が混じる訳でもない。只、単調に捌く。唯、単純に斬り返す。

しかし、其々単体が有り触れた物であつたとしても。

極致から繰り出されれば、其れは一つの完成した“業”となる。

なれば正しく辣腕と評すべきか　だからこそ。

剣の道を往く者として、其の真髄が見たいと思つたのだが。

残念ながら、あの日の様に御神の剣を圧倒する様子も無ければ、宛ら脱力した“構え”も抜け落ちて。遅れ勝ちな左腕、捌き切れない太刀は足で避ける。

技術や臂力、反応速度から基本動作に至るまで。

その全てが人並みの子供、有るとすれば

「・・・ありがとうございます。けど、暫くは止めておきます。」

（ふむ・・・。）

僅かな逡巡の後、少年はそう結論付けた。

曰く、体力や筋力であると言った肉体面を第一に考えたいと。

何より、今の儘では教えを十分に修得出来ない。先程の俺達を見ていたからこそ、未だ手は届かないと強く確信したと　それを聞いた。

「そうか・・・いや、其処まで分かって言っんなら構わないさ。」

「うーん、残念だな・・・けど、寧ろ安心したかな？」

恭ちゃんつてば、無駄にスパルタだから。」

「はは・・・。」

俺が頷く側で、美由希は茶々を入れてくる。

些か不満そうに言っのを聞き流しながら。

苦笑いを浮かべている少年に、続けて一つの訓戒を。

「急かす様な事を言っておいてなんだが、別に焦る必要は無いさ。

継続は即ち力と為る。俺は三歳頃から父さんに鍛えられてるし、

美由希にしても中学・・・四年前から本格的な鍛錬をしているんだ。

」

「・・・はい。」

元来の眼の良さ、完成した戦闘理論。

成程確かに、それは彼の有する資質の一つである。

それも、彼本来の“完成型”に欠かせない要素であればこそ。

だがそう、彼に人並み外れた才が有るとすれば。

それは絶対的な“意思”の強さに他ならない。

そして、其れが“強さ”であると同時に“脆さ”をも内包する。

二人の仕合は実に一時間にも及んだ。

彼はそれこそ不満らしいが、マラソンとは訳が違うのだ。

瞬間に掛かる衝撃は筋肉を痛め、外からは木刀を打ち付けられる。それで先日のように、躰を壊してしまったのでは元も子もない。

しかし、彼から休息を求める事は無く。

其れ処か、膝を突く事も。目を瞑ろうとさえしなかった。

やがて結局は、俺の一声で仕合を終えさせる事となったのだ。

「けど・・・てつきり美由希さんも、子供の頃から続けてるのかと思っていました。」

「ん、昔は剣道をやってたんだ。

それが、色々あつて辞めちゃつてね・・・それから。」

(.....)

俺からの用件は伝え終わり、二人の遣り取りに耳を傾けていると。今となつては一層懐かしくも思える、話題に上った一つの過去。彼もそれ以上の追究はせず、暫しの沈黙が降りる

美由希には初めから御神の事を伝えていた。

しかし、鍛錬までは強制せず、結果的に軽く付き合う程度となる。

後に美由希は家の道場ではなく、剣道と言う形を選んだ。

好きな道を選べば良いなどと・・・思えば、それこそが甘い認識だ

った。

転機が訪れたのは中学に入って直ぐの事。

生まれ持ったの眼の良さ、絶対的な反応速度。

女の身でありながら、その二つで以って性別、年齢、体格までも関係無く他者を圧倒した　　御神の血を濃く受け継ぐとはそう言う事だ。

初めこそ、正しく鬼才と羨まれもしたが。やがては羨望が嫉妬へと摩り替わる。

そして、新人戦を控えての選考会、その直前の事だ。

“卑怯だ”

同輩から向けられた一言が“表”の世界との決別となった。

或いは、手を抜く事も一つだったのかも知れないが。

美由希は見苦しい真似は一切せず、潔く竹刀を置いた。

そうして手に取ったのは御神の剣、踏み込んだ“裏”の世界。

銃火器が末端まで出回る世の中だ、技術の進歩と共に“剣士”のリスクは増している。

俺とて、剣に拘る事を“古い”と感じる事は度々有る。

一歩間違えば、父さんだって命を落としていたのだ　　いや、寧ろそれが一種のトラウマに成っていたからこそ、美由希は家の道場を避けていた。

幸い、美由希は自力で新たな一歩を踏み出した。

逆に言えば、その超克さえも“血”が急き立てるのか。

それは同じ“怪物”を宿した俺には分らないが

(ん・・・なののか?)

「あ・・・。」

ふと、意識の端に掛かるものが。

内から外へ、小さな気配が駆けて行くのを感じた。

夜遅くでなければ、本来気にする様な事でもないが。

それと同時に、隣の少年も小さく声を漏らしていた。

「あれ、どうかしたの?」

「い、いえ・・・何でも。」

俺達の間では“なのはの事”に関して結論も出ていた。

だが　そう、確かにこれは余計な事だろう。

それも、すずかの護衛に就いている彼だ、必然的にあいつと居る時間は長くなる。

加えて、信の置ける人物であればこそ。こうして一言、託しておくのも良いだろう。

(・・・ん?)

そうして隣に向き直って漸く気付いた。

彼は唯、黙す儘に其方を“見上げて”いた。

屋根際の狭窓から、赤味を帯び始めた西の空を

S i d e o u t

微風に耳を傾けていると、忽然とその旋律が掻き消えた。
“靈感”でも授かったのか、背中を厭な汗が伝う。
思うや、冷たい風が壁との隙を吹き抜けた。

告、落。

「く、あ」

廻く、^{とお}詰く。^{ちか}

波間に生まれた唸りは（ いや、違う）

唯、其処に在る事を知るのは^{フオン}訃音

聞こえて来たのは何時か感じた筈の。

それに思わず声が漏れた（ そう、これはコエ）

それ程までに不吉を象徴する禍言

「如何かしたのか？」

「・・・っ!？」

そうして再び向けられた言葉に、卒然と酔いが醒めた。
幸い、そんな内心も顔までは出さずに済んだのか。
恭也さん達の疑問の色は、不審と呼ぶには薄かったが。
何でもない、などと再度繰り返して頭を振る。

「　　士郎君、なのはの事なんだが。
もし危険が在る様なら、あいつの方も気に掛けて遣ってくれないか。」

「・・・はい、俺に出来る限りの事は。」

寸刻の後、重ねて恭也さんが口を開いた。
要領を得ない頼み方だったものの、俺の意識は其方に向いてはおらず。

辛うじて“決まり切った”答えを吐き出した。

「もう・・・恭ちゃん。」

なのはの事は暫く様子を見ようって決めたじゃない。」

「確かにそうだが・・・。」

「・・・何か、あつたんですか？」

内心の動揺は覆い隠しながら　気付かれていなかったかは別の話だが　取る物も取り敢えず、体裁を繕うだけの疑問を投げ掛けた。

何でも、先日 of 林での一件以来、夜中に黙って外へ出ているらしい。初こそ咎めもしたが、あの子から理由を口にもしなければ。

士郎さんと相談した結果、話してくれるまでは様子を見る事に決まったそうだ。

特に何が起るでもないだろうが。万が一を思えば、周囲を巻き込む事も想定される。

ならば、すずかのボディガードを受け持つ俺には予め伝えておくのが筋だろうと。

その様な事を聞いた けれど、その半分も頭には入って来ない。

タタカイの度に此の身を急ぎ立てたコエ。
だが、それが何故。今になって聞こえるのか。
この“警鐘”が告げるのは

「さて・・・夕飯でも食べて帰るか？」

を せ。

「 いえ、遅くならない内に失礼します。」

そうして、俺は足早に家路に付いた。
酷く蒼惶とした底気味の悪さを抱えた儘。
後ろ髪を引く手を払う事も、応える事も無く。
此の影を投影する夕陽に背を向けた儘。

止まない耳鳴りを直ぐ其処に感じながら。

結局、頭の中には疑念が渦巻く儘で

一度だけ振り返った西の空、薄く朱を伸ばす夕景の端。

影を見せ始めた鈍色の雲は、嵐の日を告げていたのか。

少年がその答えを得るは未だし、追って先の事と為る

第十話、今回は日常が多めに仕上がりました。

正直、冒険し過ぎかとも思いましたが(なら止める

うぬ・・・まあ、寄り道ばかりも何ですし。程々に挟んでいくと思います。

しかし、士郎君。またしても本筋参戦出来ず。

必然的なのは影の薄さが異常なテイストに。

視聴前提とは言え、本筋の方も多少は進めないと突然出て来る事になるし。

次ぐらいで少し入れてみるか? うん・・・。

まあ、それは置いていて。

一気に日が飛んだ印象を抱きますね。

原作は2005年の暦(奇しくも今年と同じ)らしいので、それに準拠すれば前半は前話の翌日7日(木)、後半で10日(日)と想定され、幾らか飛ぶ訳ですが。

本作に関しては7日(金)(因みに2006年とか2017年とかに相当。

翠屋JFCsが絡む予定は鼻からありませんので、事件発生は(土)の8日に前倒した方が流れとしては綺麗ですね。

まあ、次回か次々回かその辺で更に来週末(15、6日頃)まで飛ぶ予定ですが。

抑、フィクションであれば別段拘りもしません(おい

ずれていると言え、とら八では美由希さんは六歳から御神流を習っているらしい。

恭也曰く、自分以上に才能有り（まあ、血統的にはそうだね重ねて曰く、色々と残念なのはでも、九歳からで十分間に合うらしい。

美沙斗さんを見る限り、女性だから弱いという原則も無い。

美由希さんは美沙斗さんより背だつて高いらしい。

にも拘らず、二人の実力差は何なのか・・・ああ、師匠の差？（無礼千万。

本作では恭也の膝の怪我も無いものとして・・・

美由希くく（越えられない壁）くく恭也

の構図が覆る事は無いでしょう。結果的に、美由希さんは中学からという事に。

余談ですが、実際にフェレットを飼うとなると大変だそうですね。臭いとか酷いらしく、衛生面でやはり菓子屋の高町家が飼うのはいいだけない。

ワクチンなんかも定期的に必要だとか？

まあ、本物のフェレットでもなければ、打たれても困る訳ですが。抑々なんでフェレット・・・前世？

後、こやつ在所為で大変な被害を被った槇原さん。

ユーノ、てめえ・・・許さねえ（まで

思えば、高町家の面々にユーノ本人からの謝罪が無かったような？ A'sの最後、報告会（？）もリンディ女史しか・・・やっぱり許さねえ（もついい

こうして改めて見返して、俺の中でユーノの株が大暴落した（あ

真面目な話、無印って街の被害が凄まじい（三話とか三話とか・・・一話とか。

現実では保険が割と利くらしいけど、それも十割とはいかないだろうし。

民家とかも映像の上で倒壊する様子は無かったけども、損壊程度は見受けられまし。

民事にしようにも加害者が居ないからね（一層、冤罪とか生みそうだ道路とか、公共の施設はそんな悠長な事も言ってられないだろうに、一〜三週間で復旧と言う早業を見せてくれたが。

（三から四話の間は、後の日付指定の関係で恐らく一週間。五話で一〜二週間後。六話で一〜三週間後と思われる。

（いや、被害は一区画のみとして、意図的に映されてないだけかも知れないが。

（ただ、翠屋から子供の足で寄れる範囲が起点の筈だから。何と言うか・・・ね。

Side: 美由希

カンカン ダン

週末の午後、高町家の庭には何時もと変わらない乾いた音が響く。四振りの木刀を打ち付け合う律、板張りの床を踏み鳴らす聲。それが私達にとっての日常。基礎鍛錬に父さんが顔を見せなくなっ
てからは、この道場は専ら私達二人の稽古場と成っていた。

但し、それも今日に限っては。その場に一人の“客人”を迎えて。

丁度、私達が昼の鍛錬を行っていた頃の事。

事前に呼んでいたらしく、彼は再び家を訪ねて来た。

衛宮士郎 てつきり、恭ちゃんが再戦を申し込んだのだと。

そう思っ
て脇へ下がろうとしたところに声が向けられた。

不満の言葉も、初見の相手と戦う事に意味がある、などと返されては後が続かない。

結局、言われるがままに私と士郎君の仕合となった。

憚りながら、私でも所謂“剣道家”に遅れを取るような事はまずない。

実際、全国でも指折りの選手である赤星先輩にだって、二刀の脚技有りでなら八割以上の勝率を保っている。それでも、恭ちゃんの全開には未だ太刀打ちできないでいるのだ。

私の知る限りでは父さんと、那美さんのお姉さんである薫さん。

そして戦っている姿はまだ見た事がないけれど、ノエルさん。

恭ちゃん自身が“勝てない”と評する相手はこの三人ぐらいなもの。

そんな師範代が実戦で手傷を負った。

その事實は、私にとって少なからず衝撃だった。

何より、後日やって来た仕合の相手は紛れも無く小さな少年。

だからこそ。彼の力には興味を抱いたし、期待もしていた。

成程、こうして剣を挟んで向き合っ日さえ望んでいたんだと。

今になって、そんな自分の無意志の願望が分かる。

それが、今。

「……ふうっ！」

私から放つ二刀による連続攻撃。

それを“今の”彼は捌き切れずにいた。

後れて追う刀では間に合わず、咄嗟に体を捻る。

けれど遅い。左の一筋は肩口に吸い込まれていく。

バシッ！！

「……がつ！」

二の太刀、布石に続く必殺の一撃を喉ける……但し、頭の中だけ

で。

その想定を実行に移す事もしなければ、逆に私は間合いを外した。

実戦であれば今の一瞬で終わっているけれど、これはあくまで鍛錬。
“手を抜く”のとは別の意味合いで、加減をして然るべき力量差があった。

今は“貫”と“徹”を極力抑えて、搦め手から仕掛けたり、追い打ちまで禁じている。

実際、無闇矢鱈と本気で当たってしまったては、彼は数合の間さえ意識を保てないだろう。

「はあああつ！」

そんな事を思う間に、彼は体勢を立て直して。
木刀を握り込んで、再び私に立ち向かって来る。

「甘い。」

「・・・ぐつ!?」

何の捻りも無い一撃、ただ袈裟に振り抜いた右刀。

左刀は上がって来ない。かと言って、守りに置いた訳でもない。
左を合わせながら、今度は右から。隙だらけの彼の脇を薙いだ。

正面から斬り合えば打ち捨てられるだけだと、どうしてそれが分からないのか。

鍛錬とは言え、身を打たれる為に出るなど。彼のやり方は余りに馬鹿らしい。

余りに平凡、余りに愚鈍。話に聞いていたからこそ、余計にそう感じてしまった。

けれど、見方を変えればそれこそが異常だった。

こちらは型打ち程度の疲労しか感じないけれど、彼はその真逆。自分よりも格上の相手との仕合がどれだけキツイ物なのかは身に染みている。

だと言うのに、一体何が彼をこれほどまでに急き立てるのか。

それは分からないけれど、ただこの愚直なまでの呐喊は宛ら猛る炎の様な。

激しいけれど不安定で。いつ消えてしまっても分からない・・・そんな印象さえ受ける。

それが、どれほど続いたのか。少なくとも三十分、或いは一時間になるかも知れない。部屋にある時計は恭ちゃん愛用のクリップオンだけで・・・クリップしているのは見た事無いけれど。何にせよ、私が時間を知る術は曖昧な体内時計一つな訳で。

実戦形式の恭ちゃんとの仕合であれば、十分も続けば小休止が挟まれるのだ。

密度が違うとは言え、少なくとも彼が手を抜いている様には感じない。

実際、肩で息をしているし、腕も初めほどは振れなくなっていた。

確かに、ランナースハイなんて言葉があるように、気分が高揚すれば痛みや疲れを超えた一步を踏み出せる。

けれどやはり、そこに肉体的な限界が有る事は変わらないから。恭ちゃんだって気付いている筈の事。それが口を閉ざしている意図は分からないけれど、今の彼にこれ以上戦わせるのは危険ではないか。

私に口出しする資格が無いなら、無理矢理にでも休んでもらえば良

い。

ダンッ！！

「てえええい！！」

三步の間を一息に詰める大きな踏み込み。放ったのは高速の四連斬。今は“徹”を抑えているので、恐らく木刀を砕く事は出来ない。けれど十分。それは既に視認できる速度ではないのだから。離れていればまだしも、相対した状態では尚の事だ。

「・・・っ、はあっ！！」

ガガガガッ

「・・・！！」

だと言うのに、その全てを防がれた。

それも、偶然守りに置いた所を打ったからではない。弾く為の大きな払いを二筋から、続け様に上下への鋭い斬り込み。その一方は左側頭。意識を刈り取るつもりで放った一撃は、紛れも無く本気だったと言うのに。

一瞬の間隙に降りた静寂は、真実驚きだったように思う。ただ、その時。何故か同時に“殺られる”と感じたから。私は知らず、刺突^{つき}を飛ばしていた。

ヒュガッ！！

それをやはり、弾かれる。

況して、遅れがちだった“左”で以って弾き返して見せたのだ。肩から真直ぐ伸びた、彼の鳩尾を衝く筈だったそれを。

「あ
」

声が漏れる・・・気付けば、隣に恭ちゃんが立っていた。

尚も次の太刀を繰り出そうとした左手を取り抑える大きな手。

そうして、呆然とするままに私の剣は宙で止まった。

「ここまでだ、土郎君はもう休め。

美由希は続けて構わないな。」

「俺も・・・っ、まだ・・・やれます。」

「肩で息をしている奴の言う事か。これ以上続ければ、体を壊すぞ。」

混乱した意識を繋ぎ止めて、何とか一度だけ頷き返した。

それ切り、道場を沈黙が押し包む 私達の“死合”が終わった。

Change Side: 恭也

night,

in the deep of

「あれ・・・恭ちゃん、まだ起きてたの？」

「ん、どうも目が冴えてな。」

独り夜風に当たっていると、中の方から声を掛けられた。

家は基本的に朝が早い。必然的に夜は早く、十一時には皆床に就いている訳だが。

美由希の事だ、どうせまた本でも読んでいたのだろう。

「お前こそ、朝は父さん^{あした}が見てくれるんだ。
寝不足だと付いて来れないぞ。」

「あはは、分かってるって。うん、もうすぐ休むから。」

早八年になるか・・・父さんが剣を置いて既に久しい。

とは言え“捨てた”訳でもなければ、週に一度は稽古を付けてくれている。

逆に今日、彼が来る事を告げていたのに、結局見にも来なかった。何やら思う所が有る様に感じていた為、それは少々意外だったが

「ねえ、恭ちゃん。士郎君ってやっぱり普通じゃないのかな？」

尋ねるべき相手の居ない問いに、美由希が新たな命題を与える。

衛宮士郎 忍に頼んでいた通り、彼は再び家を尋ねて来た。

俺からしても、此の日は思い掛けず早い物となった訳だが。

契機は林で野生の動物に襲われた事だと言うが、抑々其れが疑問な

のだ。

あの日の彼であれば、素手で仕留められずとも驚かせる程度は容易かろう。

加えて、俺達は日課の鍛錬で山際の森に何度も踏み入っていた。街外れの緑地と比べれば、何方が危険かは言うに及ばず。

だが、その手の獣に遭遇した試しも無ければ、狐や狸が精々だった。

そんな詮索の一方は、俺が気に病むべき事でもなく。

他方さえ、美由希との打ち合いを眺めていれば、その仮説は立証されていた。

そう、今の彼と“あの日の彼”が別人だと言う事に 成程、始

めから父さんは気付いていたのかもしれない。

「・・・・・・・・」

思案に沈んだまま、頷く事も、否と言う事も無い。

だが今は、その沈黙が肯定と伝わったのだろう。

美由希はそれ以上言葉を続ける事も無く、黙り込んでしまった。

しかし、それは間違いではなからう。

結論から言えば、やはり彼は異常なのだ。

平凡と評するのも俺達と相対的に比べての事。

十歳そこそこの、それも武道を嗜んでいた様子は無い。

言って仕舞えば其処等に居る一般人と同じ・・・文字通り人並み。それでは打ち合うどころか、剣筋を“視る”事さえ出来ない筈だ。

だが現実に、彼は美由希の剣に喰らい付いて来た。

勿論、加減はしていたし、始終圧倒されてはいたが。

それも急速に“あの日の姿”に戻りつつある・・・或る種、異様な程に。

この感覚を体験しつてしている。そう、俺達と似ているのだ。

宛ら“血の記憶”とでも言ったところだろうか。

言い換えれば。誰かの模範ではなく、自身の再現として。

書物や映像と言った記録だけでなく、文字通り此の身に“刻まれて”いるのだ。

たとえ指南書が目の前に在ろうと、“読む”と言う工程だけでは不十分。

それだけで万事罷り通るなら、武術まで学問と括らねばならない。必要となるのは“全”から“個”への置き換え。理想型からの近似。自身が理想を何処まで形に出来るのか。取り分け、如何様に肉薄するのか。

其れを想定の中だけで形作ろうなどと、正しく空に標結う程愚か。何れにしても、多大な修練の果てに掴むのが本来だ。

しかし、俺達の場合は如何か 受け継いだ遺伝子は戦士と成る為の肉体を与える。

裡に疇を巻く“怪物”は力への衝動と、再現の“相似”を与える。何も逸はずれた事をする必要は無い。逸れなければ、やがては其処に至るのだ。

劣化どころか、近似さえも必要とはしない。完全な理想の再現。はじめから生まれた時から、それが決定付けられているのだから。

言うまでも無く、血を濃く受け継ぐ程にその傾向は強まる 御神が血統を優先する理由は其処に在る。事実、美由希の成長には目

を見張る物が有った。

俺が十年以上の歳月を掛けて修得した業を、たった数年で追い越そうとしている。

有るのは男か女かの差だけ。体格と筋量、そして師が俺と父さんしか居なかった事。

もしも、美由希と同様の型を使う・・・そう、美沙斗さん。

仮にあの人が師となっていれば、美由希は疾うに俺を超えていただろう。

（・・・成程、嫉妬心を抱かずにはいられないか。）

詰まらない感情だと知りながらも、それを理解は出来た。

スタートラインが違うのだから、スポーツであれば確かにフェアではない。

ただ、これはそういう話ではない。裕福な家庭に生まれるか、はたまたその逆か。

何方かと言えばその手の議論だ。不満が有るなら自らの手で覆せば良いのだ。

やはり下らない、と吐き捨てたのを最後に思考を戻す 彼の場合は如何なのか。

其の左腕が示すのは他でもない完成型。

そしてあの日、曲がりなりにも一度は其れを“再現”した・・・詰まりだ。

一足飛びに自身への近似を済ませている。であれば、一項から十を想起するが道理。

読み解くのではなく思い出す、それこそが彼の“拾得”速度の鍵だろう。

必要となるのはその切っ掛け。これも推測だが、鍛錬と言う域を超

えた美由希の本気の一撃に対して、無意識に自己防衛の“理想の手”を紡いだのではないか

だが、決してそれだけでは在り得ない。彼は肉体的にも未完成な筈だった。

俺達是一日何時間もの鍛錬を行っていたからこそ、超人的な技芸を再現する事を可能とするが、彼に同様の事を望むべくもない……しかし、現実是如何か。

最後には美由希と同等の動きを見せ、更に一見して不調を来した様子は無い。

あの日こそ、俺を追い越そうとしたが為に軀を痛めもしたが、それも能々考えれば、俺の見立て以上の早さで回復していた。彼の肉体的能力はニンゲンとしてのそれを明らかに上回る

（ いや、それは良い。）

俺は新たに生まれた仮説を棄却した。

そう、彼が人間か否かは俺の関知すべき事ではない。

その領域に限っては、此方から波風を立てるつもりも無かった。

忍に御神の全てを伝えていない様に、忍からは一族の全てを聞かされていない。

淡泊かもしれないが“普通と違う”とはそう言う事だ。

勿論、互いに知るべき事は語り合ったし、必要とされれば全てを曝け出そう。

しかし当然の事ながら、忍に人を殺める術を共有して欲しいとは思わない。

そして同時に、俺には何百年と言う歴史の重みは理解出来ない。

抑々、出来たと思えるのは或る種の錯覚だと言わざるを得ない。
だがそれさえも、共有するのではなく“共通する”だけで惹かれる
からこそ

「ふう。」

思考が逸れ掛けたのを最後に、俺は黙想を解いた。
どれ程の間だったのか。数秒にも、一時間にも思えたが。
そう長い物ではなかったのだろっ、後ろには変わらず美由希が立っ
ていた。

「・・・ねえ、恭ちゃん。」

士郎君、やっぱり見ててあげた方が良いんじゃない？」

俺が息を漏らした事で緊張も解けたのか、美由希が再び口を開く。
取り敢えずは調子を取り戻した様だが、何処と無く狼狽えた感じが
残っていた。

これで真剣を握れば別人の様に威圧感を放つのだが、中々根本的な
性分までは変わらないらしい。

「言いたい事は分からないでもないが・・・。」

「多分、無茶するよ。」

「だろうな。一度、忍から釘を刺して貰う事にする。

俺達は暫く様子を見よう、とやかく言うのはその後で良い。

彼は・・・月村の“家族”になるんだからな。」

ああ、確かに美由希の言い分は正しいのだろう。

彼はきつと無茶をする、愚鈍なまでに底無しの忍耐だ。
そして、その先に待つ物は

「そっか・・・そうだね、ごめん。じゃあ、私はもう寝るから。」

「ああ、引き留めて悪かったな。」

踵を返した背中に掛ける言葉は無い。

そう、自滅する様なら問題にはならないのだ、それは“最悪”ではない。

鍛錬のし過ぎで体を壊す事はあっても、死ぬ様な事態はまず起こらない。

ボディーガードは出来なく為るかも知れないが、忍はその為に彼を困っている訳ではない。一人の“ニンゲン”として“幸福／普通”に生きて欲しいからこそその事だ。一層、その方が都合が良い。

「・・・ちつ。」

他人の不幸を願う様な・・・そんな弱気な発想に、自嘲的な苦笑が漏れた。

そうだ、抑々“最悪”なんてものは訪れない。

その為に俺がいる。守ると誓った人がいる。御神の剣は、守る為の力だと。

言い聞かせる様に、一言づつ形にしながら裡に仕舞った。

その内、一つだけは言葉に成る前に呑み込んで。

「・・・今日は出ず、か。」

それから暫く。

俺は重たい腰を上げ、妹^{なのは}の部屋の方を見上げていた。

流星にこの距離で、眠っている気配を探る事は出来ないが。

夜中に出掛けていると言つても、十二時や其処等が精々だ。

寧ろ、電気が消えていれば大丈夫だと思つているのだから可愛いものだ。

立ち上がった背中、そうして最後にもう一度だけ振り返つた夜空。

肌を刺す寒さが心地好い春の夜、仰いだ紺碧には月明かりが揺れる。其れに、誰に聞かせるでもなく、呑み込んだ筈の言葉が口を衝いた。

「土郎君、君が俺達の前に立つと言つのなら。」

忍を裏切ると言つのなら・・・その時は、容赦無く君を討つ。」

欠けた月を仰ぐ無人の縁座敷。

もう間も無く、日付が変わる

S i d e o u t

ぶっちゃけ、前話で削った部分（＋）です。

当初は省く予定だったんですが、どうも高町家での場面が締まらない。

まあ、折角だし挟んでおこうかと。

前話では士郎君の自虐回想に始まって、恭也がそれを補足。

この話で実際どうだったのかが明らかになって、さらに恭也が補足。これはこれで、構成的には案外アリかと思ったり・・・。

（ 文章的にどうかは別の話な訳ですが（まで

ああ、それと物凄く今更ですが、登場人物にはとら八陣を若干含んでおります。

（ 名前だけでも含めば、かなりなものです。

（ 逆に型月からの出演は宣言通りほぼ皆無でしょうが。

仮にオリキャラを出す事になった場合は軽く説明を入れるでしょうから、そうでなければ原作のどこかに居る筈。

とら八知識皆無の方々。気になる場合はお手数ですがWikiして下さい。

無論、気にならない場合は放置して頂いて差し支えありません（ちよっ

全く関係ありませんが、眼鏡は取った方が良いと思う。

Interlude 02・誓いの日、目醒めの白大芹

Side：なのは

er class is over , immediately aft

放課後の校舎裏。

足元からカサカサと草を踏む音が聞こえる。

今、ここには生徒の声も、鳥の声も届かない。

変わらず照らす太陽だけが、凍ったように私の影を映していた。

全ての音が抜け落ちた真空管の内側で。

ゆっくりと、静かに左手を振り下ろす。

握った白金の杖を、草の陰に揺らめく燐光に。

一節の言葉を誰となく語り掛けて。

「ジュエルシード、シリアル20・・・封印。」

そうして“赤”と“青”が触れた瞬間、辺りを桜色の嵐が包んだ。
止め処なく生まれる光の奔流は、旋風となって頬を掠める。

一度見たはずの光景。けれどまた、呆然と見入ってしまった。

『Receipt number XX.』

どこからか聞こえてくる女の人の声を最後に、光の柱は細くなつていく。

名残惜しむように風が前髪を揺らしたけれど、それもすぐに収まつて。

目に映るのは赤い宝玉と、足元に伸びる私の影。
それを確かめてから、一度大きく深呼吸をした。

「すー……。」

疲れた訳じゃないけれど、どこか昂つた心を鎮めるために。
そうして吸い込んだ、この静かな世界の空気は。

燦々と降り注ぐ太陽の下でも、いくらか冷たく感じられた。

「お疲れ様、なのは。」

一息ついていると、背中の方・・・随分下から声が届いた。
杖を仕舞つてそこにいたフェレットをすくい上げる。

ユーノくん　私の力を貸して欲しいと、必要だと呼び掛けられた。

この子に手を引かれて、私がこちらの世界へ踏み込んだのは昨日の夜のこと。

『信じてもらえるか分からないけど、僕はこの世界の外、別の世界から来ました。』

『別の・・・世界？』

教えてもらったのは、知らなかった世界の形。

いつそ、作り話だと言われた方が納得できるような。

やっぱり夢でも見ているのか、けれどこうして一晩が経っても。

私の目の前には、変わらず“非日常”が横たわったままで。

「正直、見つかるとは思ってなかったけど、付いてきて正解だったよ。」

「うん……。」

どれが嘘で、何が本当なのか。

それはまだ、よく分からないけど……ただ、現実。

こうして私の手の中に、胸の内に。確かにそこに在るのを感じる。

そう、これが私の“力”。

“魔法”……そんな、夢みたい言葉が。

「結界を解くよ。」

「うん……。」

宙を見上げたまま空返事を。そして、それが分かった。

音を立てた訳でも、世界の色が変わった訳でもないけれど。

ただ、ガラス細工のように色の無い“殻”がパリパリと真ん中から割れていく。

その先に変わらず覗いた青空には、傍の木からバサバサと音を立てて飛び発った鳥たちが舞って。真円の太陽にいびつな影を落としていた。

「……なのは。」

「えっ!？」

そのとき突然、後ろから声が掛けられた。
驚いて振り返れば、そこには赤い髪の子が立っていた。

結界を張れば見付からないとユーノくんは言っていたし。
実際、見付かるとしたらもつと大騒ぎになっているはず。
裏口から校舎を出たし、彼が待つてるとしたら表の方。
けれど何故か、すぐそこには士郎くんが立っていた。

「何かしたか、こんな所で。」

「う、ううん・・・なんでも。」

士郎くんこそ、どうしてここに？」

まったく答えになっていない返事。

かと言つて、これ以上聞かれても困つてしまふんだけど。
幸い、彼は追求することなく、私の疑問に答えてくれた。

「ん、俺も別段如何つて訳じゃないんだけどな。」

ただ、何と無く気になつて・・・いや」

「・・・？」

それどころか、俯いて考え込んでしまふ。

そんな様子に首をかしげていると、今度はユーノくんが言葉を返してくれた。

『なのは、昼から気になつてた事なんだけど・・・いい?』

『あ……えっと、何？』

『うん
』

“念話” それは声にならない会話。

思い浮かべるだけで相手に伝わる優れものだけど、それを教わったのが今朝という私には、ちゃんと伝わっているかが不安に思えて仕方ない。

取りあえず、返事があったことに安堵しつつ、その話に耳を傾けた

何でも、士郎くんから異常な魔力を感じるらしい。

昼休みにはジュエルシードの所為で過敏になっているのかと考えたそうだけれど。

それを封印した今でも、こうして変わらず感じられるみたいで。

背負ったかばんと、左腕を覆った“何か” ジュエルシードと

は質が違うし、それに及ばないながらも。ただ在るだけで感じられるのは、十中八九ロストロギアだと。

さっきまで張っていた結界は、あくまで一般人を避けるためのもの。魔法資質の強さによつては結界を察知することも、入ることだってできるらしい。

そうして、純粹に違和感が有ったから足を運んだのか。あるいは、ジュエルシードを捕りに来たのか。

“本当のところ”は確かめようがないとも。

『ロストロギアなんて持ち出して、彼は一体……』

少し前にこの街へ来たって言ってたよね？
次元犯罪者という事もあるかもしれない。』

『そんな
』

「・・・っと。済まん、考え込んでたな。」

「あ・・・。」

そうして、否定しようとしたところで遮られてしまった。

言って苦笑いを浮かべるのは、数日前に紹介してもらったばかりの名前以外の事なんて何も知らない男の子。

なんでするかちゃんの家にいるの？ ケガってなにがあつたの？

家族の人は？ 義手ってなに？ 昨日はどうして途中で帰っちゃったの？

分からないこと、聞きたいこと。聞けないでいることはたくさんあるけれど。

ただ、今は陰口を叩くような真似をしてしまったことがチクリと胸に刺さった。

「戻らなくて良いのか？」

「え・・・あ、うん。もうすぐ帰るから、もうちょっと待っててね。」

「ん、了解。」

それからしばらく。

一人で勝手に沈んでいたところに、士郎くんが声を掛けてくれた。言われて私は歩き始める。その足取りは、まだ重たかったけれど。

ほんの少しだけ、心は軽くなった気がしたから。

重たく軋むドアを引きながら、今度は私からユーノくんに話しかけた。

「ねえ、ユーノくん。さっきのこと、やっぱり考え過ぎだよ。

確かに私は士郎くんのことをよく知らないけど・・・すずかちゃんが大切に思ってる人だし。それが悪い人だなんて思いたくないよ。

「・・・・・・・・。」

取るに足らない意見、明確な目的があれば尚のこと。

だから。そんな“願望”に返事は返ってこなかったけれど。

またあとで、と変わらず笑い掛けてくれたのが。

後ろに居てくれるのは、見守ってくれてるんだって。

私にはそう思えたから

I n t e r l u d e 0 2 誓いの日、目醒めの白大芹

「僕らが発見した古代遺産・・・ロストロギア。

21個のエネルギー結晶体、ジュエルシード。
僕はそれを回収するためにこの世界へ来ました。」

昼間と同じ声が、また聞こえてきたのは九時を回った頃。
そろそろ寝ようと思ってベッドに向けた足が止まった。

それからどれぐらい経ったんだろう。

動物病院まで走って行って、夢に見たお化けとの“戦い”を終えて
疲れたのかこの子は眠ってしまつて、辺りを見回せば大変なことになつていて。

説明を迫られたらどうしようもないので、取りあえずその場を離れることにして。

夜の公園　ここまで足を運んだ頃に、この子はまた目を覚ました。

「ジュエルシード・・・あ、あれ、でもなんでそれがこの街に？」

「すみません、僕の所為なんです。

輸送中に事故が起こつて・・・それで、この世界へ偶然に流れ着いてしまつて。」

ジュエルシード。持ち主の願いを叶えてくれる式拾壺の宝石。

けれど実際は酷く不安定で、さつきみたいに簡単に暴走してしまうらしい。

回収できたのは二つだけ。危険な物だから残りも早く見つけないといけないと。

そんな話を聞きながら、そもそも“願いを叶える”っていうのがよく分からなかった。

大きくなりたいとか、空を飛びたいとか。そんなことなら叶えてく

れそうだけど。

政治家になりたいって言っても、限りある席の中で実際に勤めてい
る人がいるんだし。

大金持ちになりたいなんて言ったら、造幣局の人は困ってしまうん
じゃないだろうか。

けど、そういった自分一人ではどうにもならないことを願う方が普
通だと思う。

それはどうやって叶えるんだろう？

それが叶う世界って・・・それこそ“夢”の中だけなんじゃないか
と。

そんな風にさえ思ってしまった。

「あなたがさつき使ったのは、僕らの世界の技術・・・魔法です。」

「・・・ま、まほう??」

まあ、そんな夢みたいなのことも現実にあるんだけど。

実際に私が願いを叶えてもらう訳じゃないし。

差し当たってお願いしたいこともないし。

「えと・・・自己紹介、まだだったよね。私は高町なのは。

みんなは“なのは”って呼ぶよ。」

「ユーノ・スクライア、スクライアは部族名だから、ユーノが名前
です。」

その・・・あなたを巻き込んでしまって、すみませんでした。」

そう言っしょんぼりと頭を落とされては逆に困ってしまう。

事故のことは知らないけど、この子はそれを解決しに来てくれた訳

で。

こうして怪我をしてしまって。助けられる力が私にあるのなら・・・
助けてあげるのが正解だと思うから。

「大丈夫、きつと何とかなるよ。
私も協力するから、ね？」

私は、そう思ってたんだ。

今日、この時まで。

駆け上がった一際高いビルの屋上。潮風は強く、髪を揺らして。
地平線に掛かる夕日は、見慣れた青を眩しいほどに赤く照らす。

「・・・・・・・・つ。」

眼下に広がる小さな街並み^{セカイ}は。
まるでオモチャみたいに、簡単に壊れてしまっただって。

“街”という色には酷く不釣り合いな深緑の枝葉。
そこから伸びた、木の根のようにも見える何かが道路をのた打ち回
る。

それは、普通に考えればアリエナイ光景で。
それを見ていると、とても悲しい気持ちになっ

『Stand by ready...』

励ますような声に、赤銅色に染まる杖を握り込んで、思わず泣いてしまいそうになったのを押さえ込んだ。

「ジュエルシード・・・封印!!」

悲しかった。悔しかった。

こんなことにならないように、ユーノくんに協力していたのに、向けるべき相手のいない怒りが、自分の中で渦巻いているのが分かる。

そんなどうしようもない感情を“呪文”とさえ言えない言葉に乗せて。

「まさか・・・砲撃魔法!？」

『Sealing』

二つの声が聞こえた気がしたけれど、閃光を打ち出した轟音に掻き消されてしまう。

同時に、私は慣れない反動で大きく後ろに弾き飛ばされていた。

「つつ!?!・・・あ」

失敗したかと思って起き上ってみれば、巨木は霧と消えていた。目の前には見慣れた青い宝石が一つ浮かんでいる。

最後まで上手く扱えなかったけど、レイジングハートがここまで運んでくれたらしい。

杖の先をそちらに向けながら、忘れない内に礼を言うておく。

「ありがとう、レイジングハート・・・。」

『 R e c e i p t n u m b e r X 』

そうして魔杖を赤い宝石に戻せば私の仕事は終わる。
けど、私はなぜかそうしなかった。

何となく、そのままビルの端へと足を進めた。

「・・・・・・・・つ。」

そう、気付いていたんだ。

“魔法”みたいに簡単には消せないんだって。

芽が出てしまったら、それはもう種には戻らないから。
災厄の種が芽を出したのなら・・・多分、それはもう。

だから。

その爪痕だけは、はつきりと残して。

「あ・・・・・・・・」

それに一瞬、視界が歪んだ。

何かが、頬を伝うのが分かった。

私は、知らず涙を流していた

「君の所為じゃないんだ、元々は僕が原因で・・・。
それを、なのはちゃんとやってくれてる。」

ユーノくんはそう言って励ましてくれたけど、言葉を返せない。見下ろした街は、ようやく時間を取り戻し始めていた。

気を失っていたのか起き上って歩き始める人、倒れた車の前で立ち止まる人。

小さく、ぼんやりとそれが見えた。

どんな顔をしていたんだろう・・・怒ってる、それとも悲しんでる？そう、できる限りじゃなくて、できなきゃいけなかったんだ。

皆は街の異変に立ち向かうどころか、気付くことさえできない。始めて戦った日のことだって、あれは交通事故なんかじゃない。

今日のこと、遅からず大騒ぎになる。そしてまた、間違った結論が出されて。

皆それをおかしく思いながらも納得する　　私だけは、本当のことを知っている。

この力は、魔法はそのためのチカラだったのに。

「・・・。」

“私じゃなかったら、もっと上手くやれた？”

握った赤い宝石は、何も言葉を返してはくれない。ただ、今はそれを握り締めた。強く、つよく。

「なのは・・・晩ご飯の時間だ。皆も心配するよ、家に帰ろう。」

「・・・。」

そう言ってくれたけど。

それはよく分かったけど。

明日からも戦うんだって。

それに挫けそうになっていたから。

けど、戦うんだ。

私の力が必要だと言ってくれたんだ。
私のことを主人と認めてくれたんだ。
マスター

だから、今だけは。

この涙が枯れるまでは。

あの夕日が沈むまでは。

私は独り、波の音に耳を傾けていようと

S
i
d
e

o
u
t

Interlude 02・誓いの日、目醒めの白大芹（後書き）

幕間二連続になってしまいましたね。

まあ、どっちも10話の補完な訳で。

その辺は構成上ご容赦願いたい。

指定無く時間帯が前後しますが、読み難いですかね？

前話は士郎君が高町家を再訪問したその日の深夜だった訳ですが。

本話は10話前後半のミッシングリンク、放課後から入って（これは半指定ですが）その前日の夜。でもって前話と同日の夕方です。

御承知の通り、原作的には（2）3話頃です。

しかし、ようやくなのは視点で動き始めたと言えど、何か変な感じが。

（ って言うか、ぶつちやけ暗い？抑々タイトル（あ

やっぱリリカルな戦闘場面を無くしてしまったのは拙かったかも知れない。

しかしながら、戦闘なんてそう度々ある事ではないでしょう。ユーノだって一つは戦闘無しで回収できた訳ですし、この後の展開を考えれば・・・まあ、街は大変な事になっている訳ですし。

実の所、当初はなのはに原作1、2話の戦闘を予定していたんですがね。

少し手を付けたところで、純粋にリリカルな戦闘はどうも抜けた感じがするというか・・・シリアスさの欠けた（いや、最早おふざけと言っても過言ではない）戦闘は書きたくなくなってます。

そう言った事は日常の場面でやれば良いだろうと思ひまして。
実の所、なのは視点でのそれが今一上手く描けず（おい

次話はEPに戻りますが、どうも日常が続きそうです。

士郎君のリリカル本格参戦は次々回でしようかね？（予定は未定。

それはそうと、どうにも更新が遅れがち。

作者の言い分としては、こちらまで手が回らないのが現状だといやまあ、ぶっちゃけサボつてると言えばそうなんですけどね。

先月から徹夜なんて日常茶飯事、書く暇あつたら寝るって話。

（多忙 充実：くそ、リア充b k h t し r・・・失礼、口が滑りました（手か？

ちよびちよび手を付けてるんですが、頭の中に在るのは物語の大筋と、各話の概形だけな訳で。それをそこその文量（無駄に長過ぎるか？）で、そこその文章（全く以って未熟な訳だが）に直すのって案外時間が掛かるというか。

ああ、夏休みが待ち遠しいな・・・（気早っ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3572o/>

魔法少女リリカルなのは -after image-

2011年9月4日20時43分発行